

2009年度

渥美国際交流奨学財団年報

Atsumi International Scholarship Foundation
Annual Report



渥美健夫氏遺影

渥美国際交流奨学財団は故渥美健夫鹿島建設名誉会長の遺志に基づき日本の国際化の推進にささやかながらもお役に立ちたいという願いをこめて、1994年4月1日に設立されました。

当財団は諸外国から日本の大学院に留学している優秀な学生に奨学援助をいたします。

日本にやって来た留学生の皆さんが、学問を成就するだけでなく、豊かな文化や社会に触れ、より大きな収穫を得ることができますようお手伝いさせていただきたいと思えます。

若者たちがより大きな世界を知るよう支援させていただくことによって、人々の心の中に国際理解と親善の芽が生まれ、やがては世界平和への道が開かれてゆくことを願っております。

2009 年度 渥美国際交流奨学財団年報

目 次

◇理事長のことば 「15周年記念祝賀会」	渥美伊都子	2
◇ AISF15周年★SGRA10周年記念祝賀会		4
◇交流事業・思い出			
・現場見学会		20
・軽井沢旅行		22
・渥美奨学生の集い 講演：近藤正晃ジェームス「TABLE FOR TWO」		25
・新年会		27
・研究報告会		29
◇ 2009年度渥美奨学生のエッセイ		32
◇ 2010年度渥美奨学生の自己紹介		47
◇ 2009年度海外学会派遣プログラム参加報告		60
◇ AISF ネットワーク			
・ラクーン会		72
・日韓アジア未来フォーラム		81
・SGRA チャイナ・フォーラム		83
・SGRA モンゴルプロジェクト		86
・関口グローバル研究会 (SGRA)		89
■渥美奨学生 2009年度著作・論文・特許等リスト		91
□付録		104
・設立の趣旨について			
・2009年度収支決算、貸借対照表			
・財団人名簿			
・奨学生名簿			
・2011年度渥美奨学生募集概要			
・2009年度寄附下さった方々			

「15 周年記念祝賀会」

渥美伊都子



渥美国際交流奨学財団創立 15 周年と関口グローバル研究会創立 10 周年記念の祝賀会は 2 月 26 日午後 5 時より鹿島 K I ビルにて開催しました。たくさんの皆様から賜りましたご支援のおかげで、このような祝賀の日を迎えることが出来ましたことを心より感謝しております。

生前主人は、これからは企業ももっと国際化しなければ発展は無いと考え、鹿島建設の事業をアメリカへ発展させました。また、アジア西太平洋建設業協会の会長として毎年各国で開催される総会に出席し、各国との交流を深めるよう努力しておりました。

この願いを込めて 1994 年に渥美国際交流奨学財団を設立し、日本の大学院に留学している外国人の学生を支援することといたしました。毎年 12 名というささやかな事業ですが、15 年の月日が流れ、現在までに支援した留学生は 192 名となり、ネットワークの輪も年々広がり 36 カ国・地域の大輪となりました。主人がよく描いていた狸の絵に因んで、同窓会は「ラクーン会」と名付けられ、元奨学生たちを「ラクーン」と呼ぶようになりました。

ラクーンたちは自国に戻ったり日本に残ったり第三国に行ったりしていますが、大学や企業の研究所に就職し研究を続けている人が多くなりました。優秀な研究者たちばかりですので、世界にちらばったラクーン達をインターネットで結んで「関口グローバル研究会」(S G R A)を立ち上げ、毎年国内外で 5～6 回、テーマを決めてフォーラムやシンポジウムを開催し、毎週 S G R A かわらばんというメールマガジンによって世界各地から送られてくるラクーンのエッセイを発信しております。

今回財団の 15 周年と S G R A の 10 周年を記念して、ラクーンたちのエッセイから選んで一冊の本にまとめ「われら地球市民～かるがると国境を越える～」を出版

しました。当財団の評議員で S G R A のフォーラムにもご参加いただいた明石康先生に巻頭の言葉を書いていたきました。国連で長く勤務され国際紛争の調停役としてご苦勞された方だけに私達の留学生支援の仕事を高く評価してくださいましたことを大変光榮に存じます。「日本は民族主義、排他主義が強いので将来の日本のためにも優れた外国人の英知と活力によって少しずつ国際化を進めなければならない」と日本に対する提言も記されていますので、どうぞご一読いただければ幸いです。

15 周年記念の祝賀会を開催することを知ったラクーンたちは、是非自分達で企画実施したいという思いから、半年前に実行委員会を立ち上げインターネットで意見交換をして沢山のアイデアを出してくれました。

先ず招待状は手作りにしたいということで、藝大卒ラクーンのフローニさんにデザインを頼み、地球の各地にちらばった狸達が様々な国のお祝いの言葉を贈っている素敵なカードが出来上がりました。この招待状は、理事、評議員、監事、元奨学生全員、ご支援下さった企業、団体、個人の皆様、S G R A の講師の先生方、鹿島関係者にお送りいたしました。

当日は早くから実行委員やその他お手伝いの人達がわくわくどきどきしながら集まり役割分担の位置に着き緊張した顔で開会を待ち受けていました。

記念祝賀会が始まる頃には会場も満席となり午後 5 時ぴったりに開会となりました。

最初に私から日頃ご支援をいただいている方々への謝辞を述べ祝辞に移りました。来賓の畑村洋太郎先生は渥美財団設立当初より選考委員をお引き受けいただき、現在まで 16 年間留学生を選考されました。面接する学生の資料を熟読され受験生に鋭い質問をされる熱心な先生ですが「一時は辞めようと思ったときもあったが、最高の学問の研究に接する機会を逃す、と思い直して続ける

ことにした」とユーモアを交えながらお話くださり大変嬉しく思いました。

次に当財団の良き理解者の明石先生にお祝辞を頂きました。

実行委員達が一番心配していたインターネットライブも大成功で、ボストン、台北、ソウルにいるラクーンの皆さんから映像とともにお祝の言葉を受けることが出来感激しました。

第一部の最後に、ドイツ出身ラクーンのみらさんとお嬢さんのゆきこちゃん、邦楽アカデミー和太鼓の皆さんによる演奏が披露されました。太鼓の音は力強く会場一杯に響き渡り邪気を吹き飛ばすリズムカルな素晴らしい演奏でした。これで祝賀会は終り会場を食堂に移して懇親会となりました。

第二部は金屏風の前に置かれた鏡開きから始まりました。畑村先生、明石先生、(財)公益法人協会の太田達男理事長、(財)アジア学生文化協会的小木曾友理事長と私はハッピーを着て景気よく「ヨイショ」の掛け声と共に槌をふりあげ樽の蓋を割り拍手喝采でした。小木曾様のご挨拶の間にそのお酒は会場の皆さんに配られて乾杯し、懇親会に入りました。しばらくの間会場は食事会で盛り上がりましたが、急に会場が暗くなり静々と大きなバースディケーキが運ばれてきました。ケーキの上には「祝渥美財団 15 周年」「祝 S G R A 10 周年」と記されていて皆様の注目の中でローソクを吹き消し、私は今西常務理事と共にケーキにナイフを入れ 15 歳の誕生日を祝いました。その脇に布をかぶせた小テーブルがあり「理事長この布を開けてください」と司会者に言われてそっと開けてみると、私が蒐集している梟(の置物)が、イタリア、ドイツ、スリランカ、中国、台湾、韓国から飛んできて飾られていたのでびっくりしました。ラクーンの皆さんの熱い気持ちがジーンときて感無量でした。

いつも思うのですが、渥美財団では毎年家族が 12 名増えていく感じがしています。早くも 15 年の年月が過ぎ、192 名の大所帯となりました。ラクーンの皆さんが協力してこのような心温まる記念会が出来ましたこと大変嬉しく、またありがたく思っております。

今後も益々発展し世界に通じる研究者のグループが出来上がることを願っています。





渥美国際交流奨学財団創立 15 周年
関口グローバル研究会 (SGRA) 創立 10 周年

1. 記念祝賀会アルバム集
2. 記念出版「われら地球市民」- かるがると国境を越える
3. AISF・SGRA のグローバル・コミュニティー調査中間報告



記念祝賀会

日時：2010年2月26日（金）

第一部：午後5時～6時

第二部：午後6時～8時

会場：鹿島K1ビル

祝賀会実行委員会より祝賀会へのお誘い案内状
実行委員会が企画・運営

プログラム

◆ 第一部

司会：于 曉飛（2002 狸）



■ 開会挨拶

理事長

渥美 伊都子

■ 来賓の祝辞

奨学生選考委員長

畑村 洋太郎先生

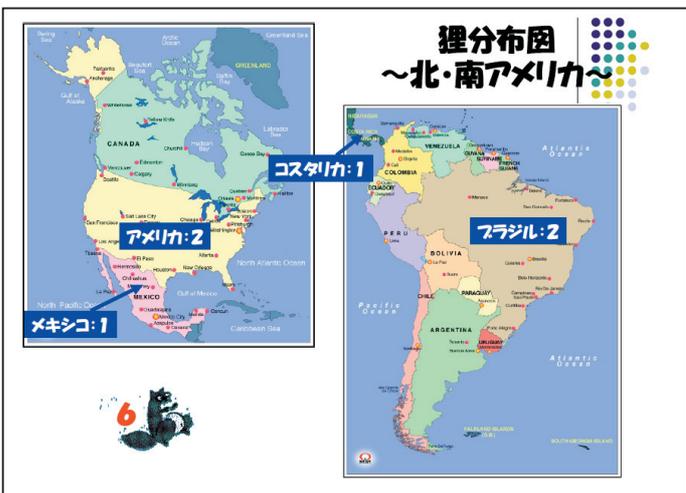
評議員

明石 康先生



■ 渥美財団 15 年 ★
 SGRA10 年の歩みと展望

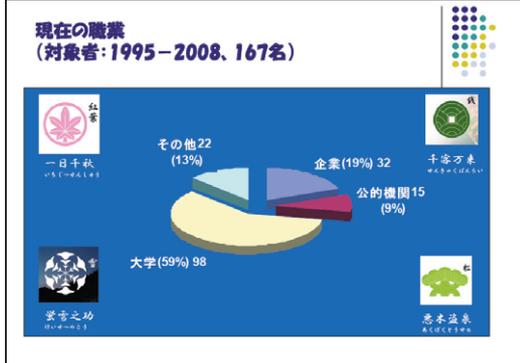
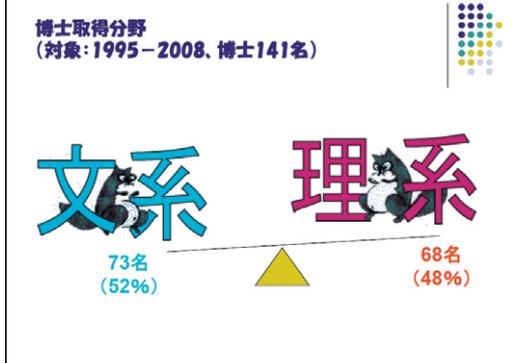
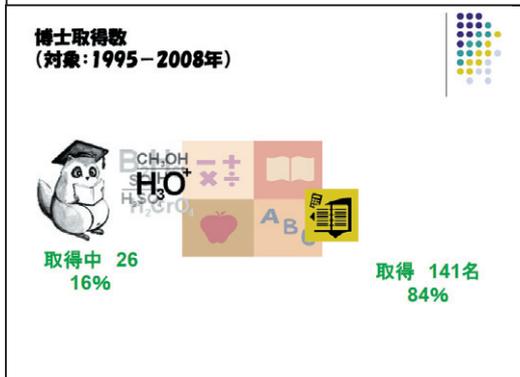
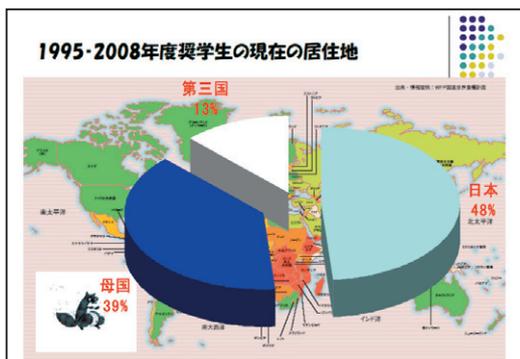
常務理事（SGRA 代表）
 今西 淳子



祝賀会ストーリー：祝賀会実行委員会 マックス マキト記（1995 狸）

2010年2月26日（金）小雨模様の東京の赤坂の鹿島 KI ビルで、渥美国際交流奨学財団創立 15 周年・SGRA（関口グローバル研究会）創立 10 周年の記念祝賀会が開催された。5 年前の祝賀会と比べて一層盛大な会であったが、多くの「狸」の渥美財団（渥美理事長や今西常務理事）に対する感謝の気持ちを十分に実現できたと思う。

狸とは渥美財団の奨学生のことで、財団設立者渥美健夫氏が生前よく狸を描いていたことに因んでラクーン会という同窓会が組織されたため、その構成員は狸（あるいは Raccoon）と呼ばれている。ラクーン会のメンバー全員は SGRA の会員であるが、SGRA は開かれたネットワークであるから、そのメンバーは狸に限らない。尚、以下の狸年齢とは、渥美奨学生になった時から現在までの年数であるが、それは同時に SGRA 会員歴を意味している。

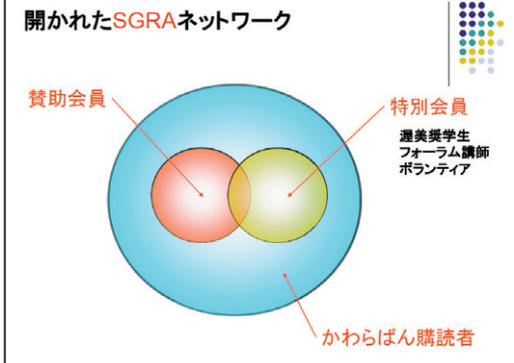


関口グローバル研究会 (セグラ)

Sekiguchi Global Research Association
www.aisf.or.jp/sgra/

フォーラムやシンポジウム ホームページ

SGRAかわらばん



今西代表が一年前の渥美財団理事会に提出した企画書がきっかけとなり、「AISF15★SGRA10」と名づけたプロジェクトが立ち上げられた。昨年夏のSGRA 軽井沢フォーラムの時に、実行委員会の結成が提案され、秋になって正式に立ち上がった。6tanuki3 というメーリング・リストが作られ、オンラインで頻繁に(多い時には1日20件くらい)、オフラインでも数回、実行委員会が開催された。「6」というのは実行委員の人数である(第二部の司会者たちの言葉で、狸年齢も加えると)エリック・シッケタンツ(1歳)、王剣宏(3歳)、シム・チュンキャット(4歳)、江蘇蘇(5歳)、全振煥(9歳)、そして僕マックス・マキト(15歳)。「3」というのは実行委員会を支えてくれたSGRAの石井慶子運営委員、嶋津忠廣運営委員長、今西代表である。

さて、実行委員のエリックは末っ子にもかわからず、欧州梟の手配から当日のお手伝い人員募集やBGMまでた

■インターネットライブ
ラウン会の近況の紹介



・台北

・ボストン

・ソウル



くさんの仕事をやりこなした。狸がまだ健在である筑波付近に住んでいる王は関口で行われた委員会までの長い道のりを何回も足を運んだ。バリトンの声とユーモアに溢れているシムは、委員会の財布を管理した唯一雌狸の蘇蘇と組んで、第二部の司会を務めた。財団や SGRA の良き支援者である鹿島の恩恵を受けている実行委員長の全は、今西代表と連携しながら、会場の設営準備、第一部のインターネットのライブ中継、第二部の鏡開き、ケーキやプレゼントなど祝賀会の楽しいプログラムを仕切った。老狸の僕は皆に詳細な準備を任せながら、アンケート中間報告を中心に、パワーポイントの担当者として、これからの渥美財団と SGRA の将来を考える貴重な機会となる発表を準備した。

その他に、実行委員会と今西代表の呼びかけに応じてくれた狸もたくさんいて心強かった。当日の受付や会場案内にはベック（1 歳）、ホサム（1 歳）孫貞阿（1 歳）、金英順（1 歳）、梁明玉（6 歳）、張桂娥（7 歳）、マリア エ

■ 和太鼓演奏



◆ 第二部 懇親会

司会：江 蘇蘇（2005 狸）
シムチュンキャット
（2006 狸）



レナ・ティシ（7 歳）、インターネットライブには葉文昌（11 歳）、ナリン・ウィーラシンハ（4 歳）、撮影には郭榮珠（1 歳）、馮凱（2 歳）、陸載和（2 歳）、看板や鏡開きには李濟宇（6 歳）、演台設営にはリンチン（1 歳）、イエ・チョウ・トウ（1 歳）、ルイン・ユ・テイ（9 歳）が参加した。皆、研究や仕事で忙しい中、早くから駆けつけてお手伝いいただき、大きな力になった。この人たちを含め、51 人もの狸が、祝賀会に駆けつけた。さらに、世界中の狸からこの祝賀会のために支援金が寄せられたことにも心から感謝したい。その他、SGRA 賛助会員・特別会員、留学生支援団体、鹿島をはじめとする賛助企業などに参加していただき、また、たくさんの方々にご支援・ご協力いただきましたが、全ての方に御礼を述べきれなくてすみません。

「狸からの感謝」というテーマに加えて、この祝賀会で実感できたもう一つのテーマは「世界の狸」の存在だと思う。

■ 鏡開き



■ 乾杯

アジア学生文化協会理事長
小木曾 友先生



5年前には不可能だったインターネットライブを通して、台北の陳姿菁（8歳）と詹彩鳳（3歳）（+後ろで手を振っていたシステム担当の院生）、ボストンから眠そうな林泉忠（10歳）とケビン・ウォン（5歳）（ボストンは午前3時半だった）、「15」という字の飾りのついたチョコレートケーキを用意してくれたソウルの南基正（14歳）、韓京子（5歳）、李垠庚（3歳）からの挨拶があり、地球がいかに小さくなったかを感じさせた。さらには、梟（飾り物）が、（嶋津運営委員長に言わせれば）イタリア、ドイツ、中国、台湾、韓国、スリランカから飛んできた。そして、世界の狸を対象にしたアンケートにより、SGRAの7つの研究チームや4つの海外拠点活動にすでに時間とエネルギーを貸してくれているSGRA研究員に加えて、98人の狸が何らかの形でSGRAの活動に参加したい、23の新しい研究テーマで、新しく19カ国・地域でもSGRAの活動を展開させたいという世界中の狸からのラブコールが寄せられた。

■ パースデー・ケーキ
財団 15 歳、SGRA10 歳



■ 感謝の花束



第一部の締めくくりは、ミラ・ゾントーク（6歳）とお嬢さんのゆきこちゃん、studio 邦楽アカデミー和太鼓大元組の皆さんの演奏だった。司会の于暁飛（8歳）が言ったように、太鼓の音が心の響きのようにカッコイイ演奏だった。

明石康先生はご祝辞の中で、「国際交流は『相手と同じである』というよりも『相手と違う』という前提に立ったほうがいい。『やっぱり同じだな』という発見は『やっぱり違う』よりも嬉しく感じる。違いがあってもそれを尊重することが重要だ」とおっしゃったが、さすが、国連の「一国一票」という原理の良き理解者である。

僕は、今回の発表でも使った 10 年前に SGRA を立ち上げた時の次のような言葉を思い出した。「日出ずる国の道

■ 世界から飛来の梟



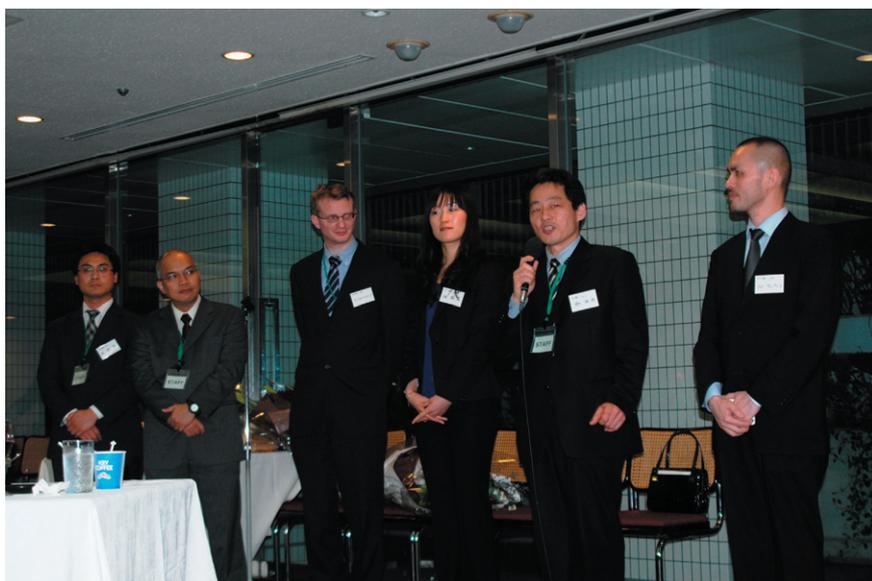
を学ぶため、私達は世界のあらゆる地域から江戸川のほitori大名の領地が残る関口の森にやってきました。この地より私達は世界に向かって発信します。多様性の中の調和を求めて。」

畑村洋太郎選考委員長は、「選考委員を始めたのは今西さんと子どもの幼稚園が一緒という縁だった。途中で一時疲れて辞めようと思ったこともあったが、学問の最高府の研究に接する機会を逃すことになる気が付き、また、やっているうちに面白さを感じ、お邪魔でなければずっと続けたい」とご挨拶されたが、世界の狸が同感できる言葉である。

今西代表も発表の中で、「今後、さらにメンバーを増やし、新しいテーマや新しい海外拠点へ輪を広げていきたい。



■ 閉会挨拶
祝賀会実行委員会



■ 中締め
事務局長（SGRA 運営委員
長）嶋津 忠廣



周辺にあるものこそ、コミュニティーの資源ですから」と訴えかけた。

上述のように、今回の記念事業の一環として行ったアンケートにより、世界各地の狸たちが、SGRA の活動に関心を持っており、協力する意思があることが確認できた。この狸たちを含めた SGRA 地球市民のひとりひとりが、それぞれの置かれているところでイニシアティブをとれば、自ずと SGRA のグローバルコミュニティーへの道が切り開けていくであろう。そのようなイニシアティブをサポートするために、近いうちにアンケート調査の第二弾を実施する予定である。SGRA の皆さんと一緒に、次への一步を踏み出したいと思う。

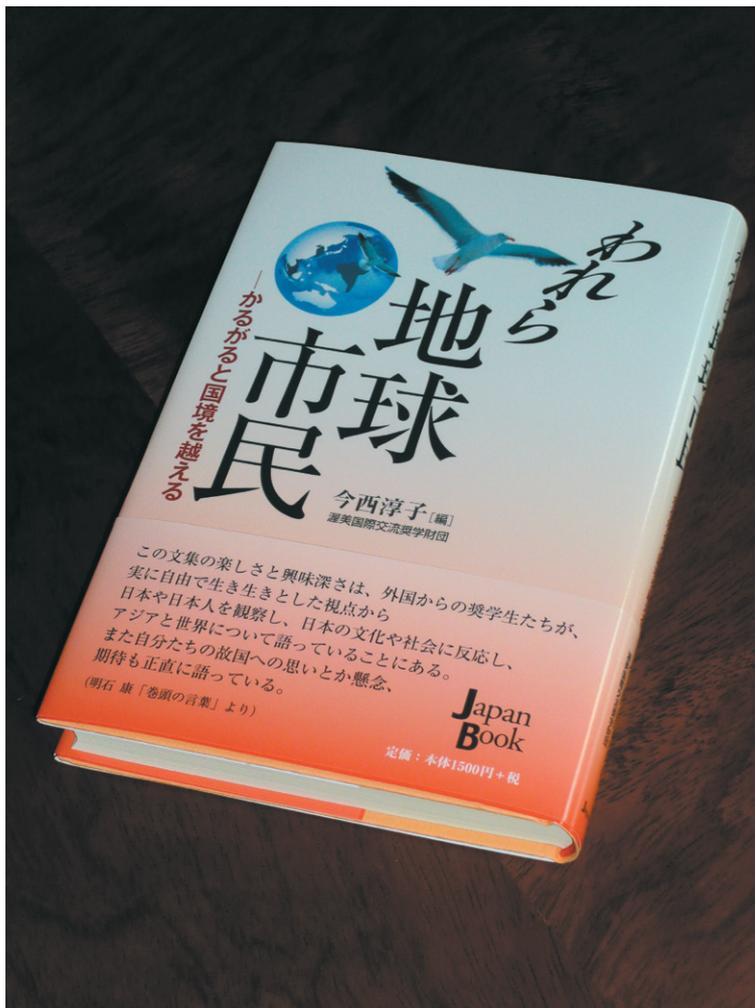
渥美財団や SGRA の未来に関してなんだかワクワクする気持ちが湧いてくる。

渥美国際交流奨学財団 15 周年★関口グローバル研究会 10 周年 記念出版

「われら地球市民」 — かるがると国境を越える —

今西淳子編

株式会社ジャパンプック発行



★ 明石康「巻頭の言葉」より

この文章の楽しさと興味深さは、外国からの奨学生たちが、実に自由に生き生きとした観点から日本や日本人を観察し、日本の文化や社会に反応し、アジアと世界について語っていることにある。また自分たちの故国への思いとか懸念、期待も正直に語っている。

★ 編者 今西淳子「まえがき」より

「地球市民」をもう一度よく考えてみると、私たちは往々にして、心の中にも国境の壁を作っているのではないかということに気づきます。——この本を読んでもくださった方々が「へえー、そんな見方もあるのか」とか、「なーんだ、みんな同じじゃないか」と感じてくださって、ご自分の心の中の国境の壁を少し低くしていただけたら、とてもうれしいです。

AISF・SGRA のグローバル・コミュニティ調査中間報告

- 1 アンケート調査の概要
- 2 アンケートの集計方法
- 3 アンケートの回答に基づいたネットワーク図
- 4 アンケートの回答中に記された具体的な提案
- 5 アンケート回答者にとって「SGRA ネットワークは何か」が読みとれる言葉
- 6 今後の SGRA の発展を検討する際に参考になるコミュニティ論

1 アンケート調査の概要

1.1 実施期間：2009 年 11 月から 1010 年 2 月まで

1.2 対象：渥美財団の元・現役奨学生

1.3 実施方法

1.3.1 実行委員がアンケートを作成

1.3.2 アンケートをメールで発送

1.3.3 今西代表が未回答者に督促メールを 3 回送付

1.4 回答率

1.4.1 発送数：175 件（5 名のメールアドレス不明）

1.4.2 回答数：123 件

1.4.3 回答率：70%

2 アンケートの集計方法

2.1 アンケート 7 つの質問のうち、下記の 3 つの質問への回答を中心に集計した。

2.1.1 あなたが SGRA の活動に対して貢献できることは何ですか。（いくつでも書いてください）

2.1.2 あなたが SGRA の活動から得たいことは何ですか。（いくつでも書いてください）

2.1.3 他に渥美財団と SGRA のグローバル・コミュニティについてコメントがありましたらご自由にお書きください。

2.1.4

3 アンケートの回答に基づいたネットワーク図

3.1 社会ネットワーク分析用ソフトを利用して、アンケートの結果を照合しながら SGRA のネットワークを表すと図 1 のようになった。

3.1.1 この図は、7 つの研究チームに属する 20 名の研究員の回答結果を用いて作った現在の SGRA ネットワーク図である。

3.1.2 赤い○は回答者、□は 7 つの研究チーム（＝研究テーマ）、△は現在 SGRA が活動している 4 つの海外拠点である。

3.1.3 相互の繋がりが多いほど中心に位置され、相互の繋がりが弱いほど周辺に位置される。

3.2 社会ネットワーク分析用ソフトを利用して、アンケートの結果を照合しながら SGRA のネットワークの可能性を表すと図 2 のようになった。

3.2.1 赤い現在のネットワーク図に、アンケートで「何らかの形で SGRA とかかわりたい」と回答した 98 名を青い○で加えた。（※ 4 人の回答においては、参加意思が明確ではなかつ

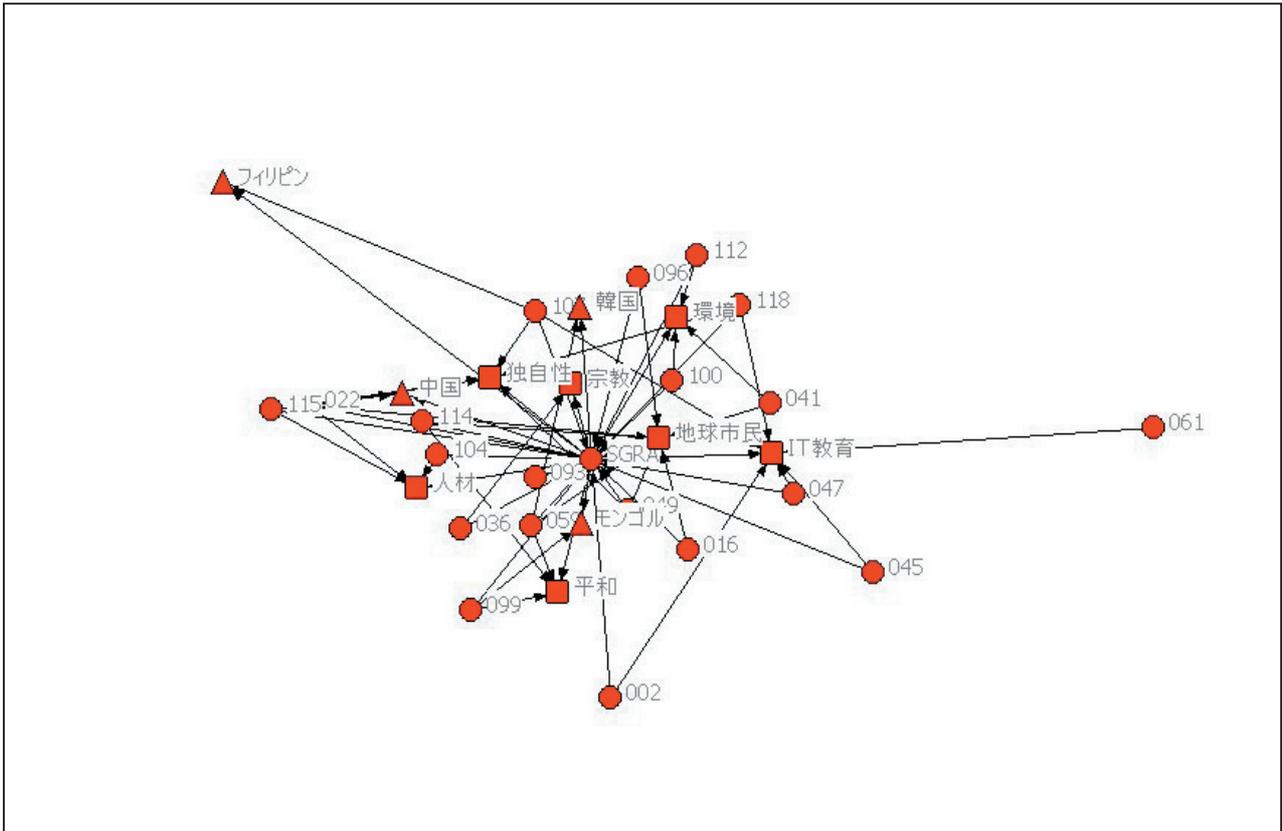


図 1：アンケート調査結果による現在の SGRA ネットワーク

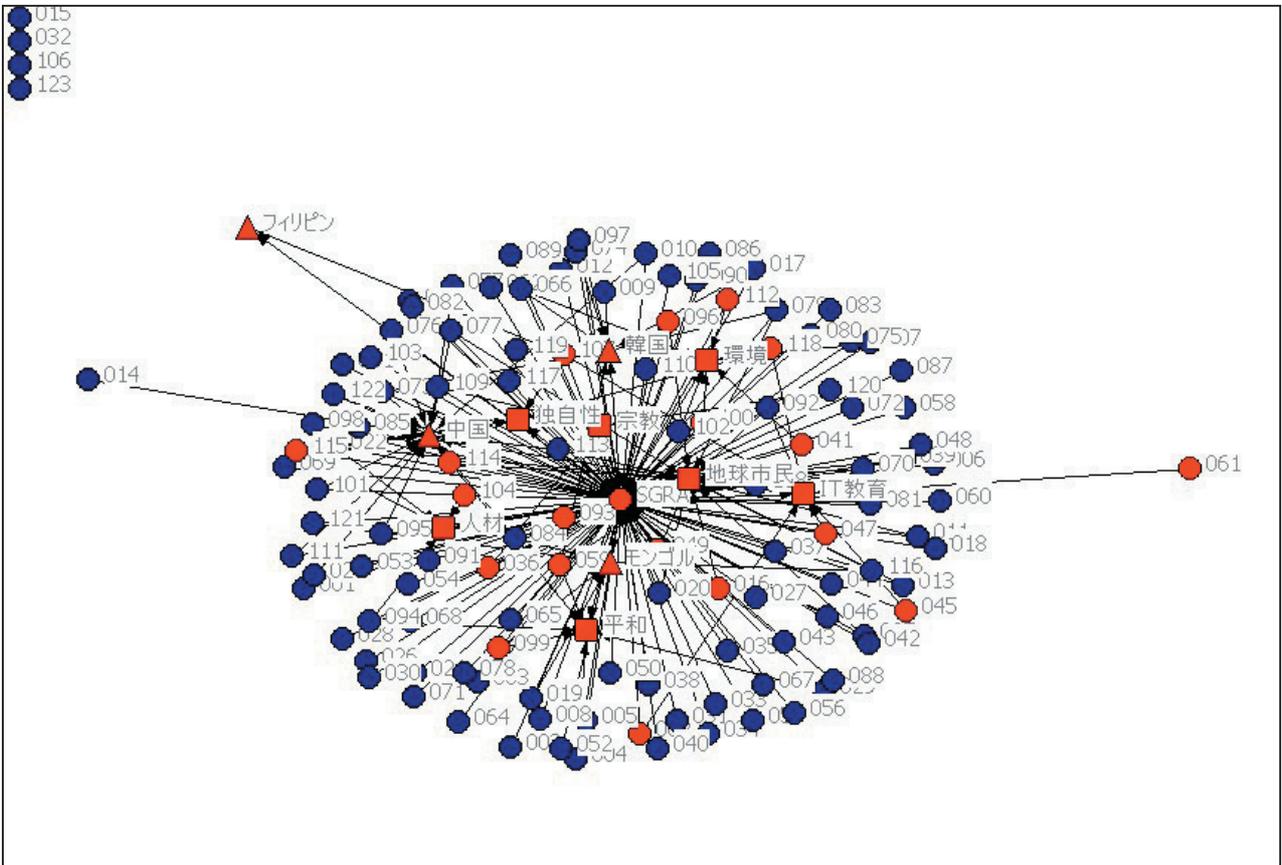
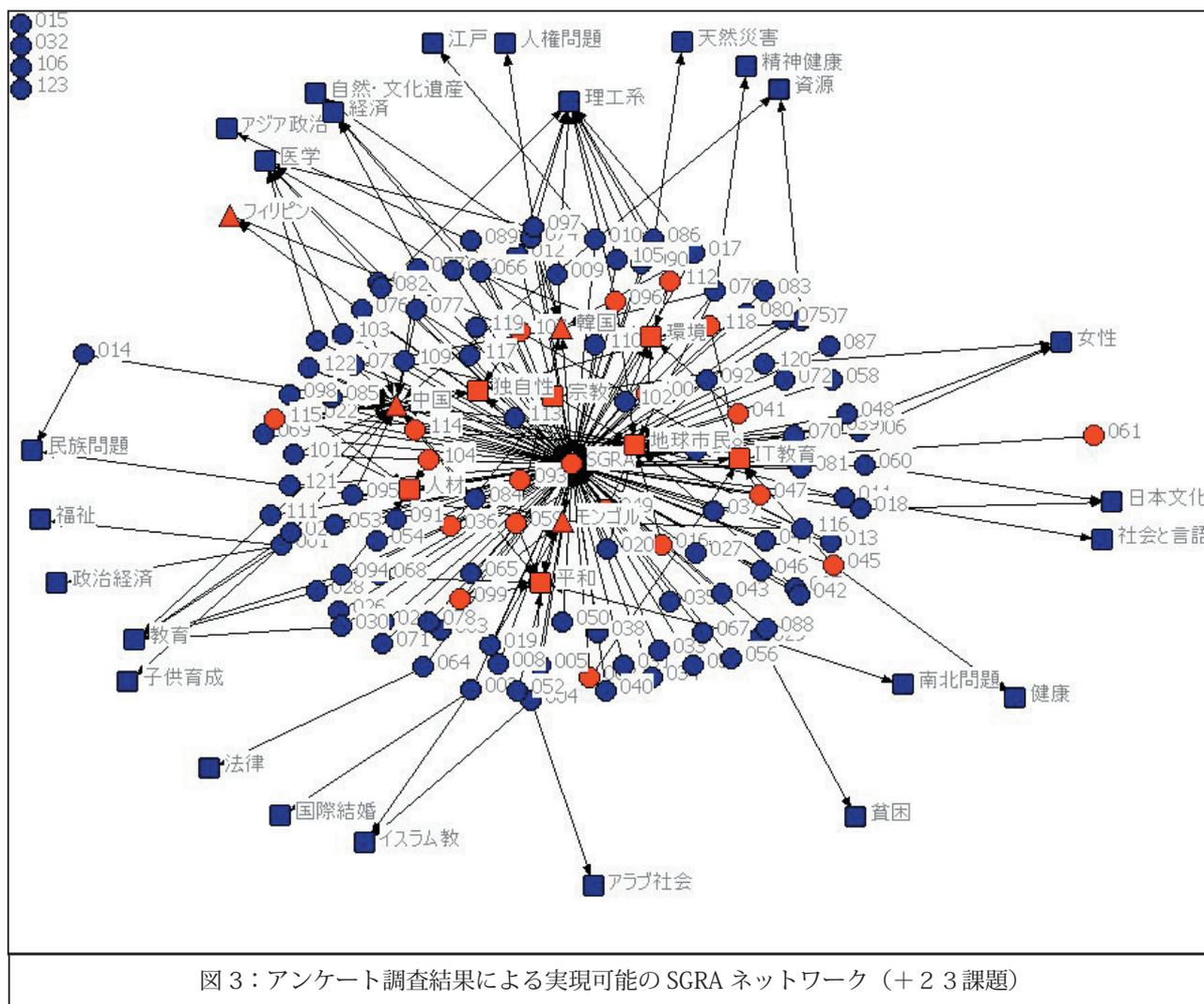


図 2：アンケート調査結果による実現可能な SGRA ネットワーク (+98名)



た)

3.3 さらに回答中にあった 23 の新たな研究テーマの提案を、青い□で加えると図 3 のようになった。(※提案された類似の課題をいくつかの項目に統合した)

3.4 さらに、新たな国・地域で活動を開始しようという 19 の提案を、青い△で加えると図 4 のようになった。(※提示されている国・地域は回答者が活動開始の現場として明確に提示したもののみである。つまり、出身国が単に掲載されているということではない)

4 アンケートの回答中に記された具体的な提案

4.1 各自のネットワークを SGRA ネットワークと連結させる

(※今西代表のコメント：「実は、既に始まっている 4 つの海外拠点プロジェクトは、このようなネットワークの連結によるものであり、今後もさらにこの方式で活動拠点を増やしていきたいと思います」)

4.1.1 「私の研究所 (アメリカ) に SGRA 研究員等を招聘し、グローバル・コミュニティーにおける日本の役割に関するフォーラムを開催しましょう。日本をベースとしたネットワークに属するオピニオン・リーダーや学者たちを結びましょう。」

4.1.2 「私の職場でも常に新しい研究企画案を考えなければならないし、財政基盤を確保するように努力しなければなりません。そうした状況の中で、時々 SGRA との共催プログラムが出来たらと思います。」

4.2 オンラインコミュニティーの維持発展 (今西代表のコメント：「今後の検討課題です」)

- 4.4.3 直接的支援
- 4.4.4 もっともホットなトピック
- 4.4.5 啓蒙活動
- 4.4.6 実践的な効果
- 4.4.7 実用性

5 アンケート回答者にとって「SGRA ネットワークは何か」が読みとれる言葉
(今西代表のコメント：「これが SGRA ネットワークの原動力なのだ」と改めて確認できました。)

- 5.1 多分野
- 5.2 国際交流
- 5.3 マスコミで得られない情報
- 5.4 キャリアー・ビジネス情報
- 5.5 絆
- 5.6 友情
- 5.7 刺激
- 5.8 生き甲斐
- 5.9 人生の誇り
- 5.10 グローバル・コミュニティーの存在の実感
- 5.11 共同発展
- 5.12 夢実現のチャンス
- 5.13 信念

6 今後の SGRA の発展を検討する際に参考になるコミュニティー論

- 6.1 コミュニティー構築には 2 つのアプローチがある。
- 6.2 コップに水が半分しかはっていない、「半分は空」であるという見方と、水が半分もはいつている、「半分は満たされている」という見方がある。
- 6.3 ネットワーク論にあてはめると、半分は空であるという見方は、中の繋がりが弱く、外部から援助しないとコミュニティーに活気がでない。
- 6.4 ところが、水が半分も満たされているという方は、中のつながりが強くて活気があるけれども、周辺の資源が活かされていない。
- 6.5 SGRA の場合は、後者である。周辺にあるものこそコミュニティーの資源であると考え、今後は、さらにメンバーを増やし、新しいテーマや新しい海外拠点へ輪を広げていきたい。

(文責：M. マキト 2010年3月15日)

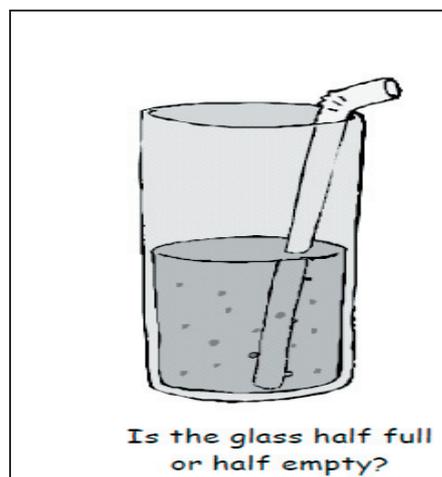


図 5：コミュニティー構築への
2 つのアプローチ

交流事業・思い出

現場見学会

2009 年度奨学生、羽田空港 D 滑走路建設工事現場を見学

2009 年 6 月 29 日、東京国際空港（羽田空港）の D 滑走路建設工事現場見学会がありました。当該見学会は、渥美国際交流奨学財団の 2009 年度の奨学生のために、7 月例会として同財団によって企画されたものでした。参加者は、財団の今西常務理事、嶋津事務局長と我々 2009 年度の奨学生でした。

見学に行く前の私の心境について一言述べたいと思います。私は、ウズベキスタンからの留学生です。ウズベキスタンは、海に接していないどころか、二重内陸国家です。すなわち、ウズベキスタンに接する国にも海はありません。したがって、ウズベキスタンの人々にとっては、海自体が、驚くべき存在です。そして、最もウズベキスタンの人を驚かせるのは、海で橋などを建設するという建設工事です。これまで日本で海にある多くの構造物を見てきましたが、その構造物の実際の建設作業を想像さえできず、いつか自分の目で見たいと以前から強く思っていました。そして、以前から羽田空港の D 滑走路が海の上で建設されていることを知っていましたので、今回の滑走路建設工事現場の見学はまたとない機会であると思い、とても楽しみにしていました。

当日、全員は、お台場の東京テレポート駅に集合し、用意していただいたマイクロバスで工事に関わっている諸建設会社の総合事務所へ移動しました。本工事には日本の建設業界を代表する 15 社の建設会社が従事しており、15 社の代表となっているのは、鹿島建設株式会社です。事務所で鹿島建設株式会社の阿部洋管理部長から工事に関する詳細な説明を受けた後、船で工事現場に移動しました。



工事現場は、想像を越えるものでした。東京湾で、すなわち周辺水深が 20 メートルまで達しているという場所で長さ 2500 メートルの滑走路が建設されています。具体的にいうと、羽田空港の 4 本目の滑走路となる D 滑走路の構造は、主に埋立部と栈橋部とから構成されています。埋立部の沈下防止のために、埋め立てる前に砂杭を打ち込むことによって、地盤が強化されています。また、栈橋部でも、杭が海底下 70 メートルの深さまで地盤に打ち込まれ、沈下防止が図られています。

ちなみに、滑走路全体が埋立構造でなく、その一部が栈橋構造になった理由は、空港の横に流れている多摩川の流れをせき止めないためです。環境影響の観点からの注目に値する対策です。当該プロジェクトの建設工事費は、5700億円であり、このような大規模のプロジェクトは、日本にしても非常に希だそうです。

上述した数字の大きさを分からない人でも、実際に工事現場に行ったら、工事の規模の大きさを容易に実感することができます。すべてのものが大きすぎて、人間の素晴らしい創造力に改めて感心します。説明によれば、D滑走路の開業が来年（2010年）の10月に予定されているため、工事は、24時間、365日という急ピッチで進められています。実は、今回の見学の時点で、既に滑走路の形が出来ていました。

見学を終えた質疑応答の際に、本工事に従事している15社から構成される建設工事共同企業体を統括される現場代理人の、鹿島建設峯尾隆二専務執行役員からご挨拶があり、我々奨学生を温かく迎えてくださっていることを強く感じました。

見学会後、全員はお台場にバスで戻り、ヴィーナスフォートにある素敵なタイ料理レストランで食事会が行われました。食事会は、様々な話題で大変盛り上がりました。興味深いお話を聞くことができましたので、ただ楽しいだけでなく、非常に有意義な時間でした。

工事現場の見学は、私に色々なことを考えさせてくれました。現場で働いておられる方々を見て、正直に言って、羨ましかったです。D滑走路は、現在の努力の結果として、今後長い期間にわたって、多くの人々に役に立ちます。滑走路の工事に関わっておられる方々のその努力は、今後の世代に高く評価されていきます。本当に羨ましいです。

見学会は、私の大切な思い出になりました。世界的に有名な日本の建設技術を現場で見ることができたのみならず、楽しい一日を過ごすこともできまして、渥美国際交流奨学財団や鹿島建設株式会社に心よりお礼申し上げます。

（文責：シェルマトフ ウルグベック）



軽井沢旅行

私の軽井沢旅行日記

2009年7月24日

朝目覚めると大急ぎ！「今日の夜には軽井沢の涼しさに囲まれて眠れる」と思い、何かお祭りにも出かける時の気分で家のドアの鍵をかけた。

おや？東京駅に着いたら馴染みの谷原さんの顔が初めてみる色々な顔と一緒に並んでいる。自己紹介的な挨拶を交わして、新幹線の中へ。大学や学会で先生方とフォーマルなお付き合いはよくあるのだが、今回はプライベートな集まりでもあると思うと、好奇心に混じった緊張感でドキドキしながら席についた。

研修センターの玄関では林泉忠先生が「いらっしやい！」と笑顔で出迎えてくれた。荷物を下ろし、昼ごはんを済ますと山登りにみんなで挑戦した。霧に覆われた山道を登って行くうちに人々の間の距離が縮んできたのを感じた。頂点に着いた頃には会話のなかの「です」「ます」が蒸発していくような気がしてきた。研究室に引きこもりがちな研究者たちは大自然がいつまでもここで待っているのだと驚いた様子だった。

夜になると自己紹介大会がテレビタレントにも負けないシム・チュン・キャットさんのおかげで爆笑ステージへと変身していった。家族連れも全員そろってシムさんがリストアップした質問に答えなければならない。「嫌いなもの・人？」「好きなもの・人？」。おまけに自己紹介が終わった人は、次に自己紹介をする人の質問に答えないと席に戻れない。マイクを握って話しているうちにテレビにでも出ているような気がした。



2009年7月25日

翌朝自由時間で近所の別荘巡りの途中、門の前に「ご自由にお入りください」と看板が出ている一軒の別荘が私たちを誘った。周辺の建物とは違ったこの昭和初期の家のオーナーがあまりにも多国籍な私たちを見ながら「中へどうぞ」と家の中まで案内してくれた。全員が外観に惚れた建物の中に入ってからさらに惚れた。中の家具を眺めながらタイムスリップしてしまったような気がした。

午後になってからはお勉強の時間がはじまったが、以前から慣れている学会気分とはどこことなく違っていった。もちろんそれは学会に初めてスリッパで出席したからではなく、他のメンバーと一緒に散歩したり、食べたり、話したりするうちに一つの絆が生まれようとしていたからである。

フォーラムでは、東アジアの「市民社会」の特徴を聞いているうちに自分がいかにトルコを中心とする地理感覚を強く持っていたのかということ、日本を「アジアの中の日本」ではなく、日本だけのレベルで考えていたこと、そして物事を考える際、「東アジア」は一つの単位でありえることを次々メモしている自分に気づいた。

晩御飯の後に食堂にビールの空き缶がかなり並んでいたにも関わらず、食後の議論は空き缶の話が嘘だったかのように論理的に盛り上がった様子だった。「研究者はアルコールにも関わらず研究者なんだ！」と心の声で確認した。だからフォーラムが終わってからもロビーで深夜まで話声が聞こえていた。

雨って気まぐれなタイプだといつも思うけど、今回もそうだった。花火の予定が雨によって中止になった。大好きな線香花火は日本に来てから知ったものだ。最初には何もないのに、人生の悩みみたいに膨らんで大きくなる線香花火。そして線香花火も時間に負けてしまう悲しみと同じように消えていく運命である。そのような線香花火が出来なかったことだけが残念だ。

2009年7月25日

登山もフォーラムも終わって今日はバーベキューの楽しみが待っている。宿の木製の廊下や馴染んでしまった家具とはこれでお別れだと少し寂しく思いながら起きた。緑に囲まれた山奥の小さな家が私を一瞬ハイジに入れ替わったような気分させた。ヤギとかいたら完全にそうなったかも知れない。

研修センターから理事長の家にみんなで歩いて行った。周りの樹木に圧迫されるような道を会話を交わしながら歩む。軽井沢がなぜここまで有名なのか分かったような気がした。例の昭和初期の別荘の主人に挨拶した。もう少し軽井沢にいたらこの方と近所付き合いを始められそうなのに。

理事長の別荘でのバーベキューでは全員がとても気楽に交流している様子だった。久しぶりの羊肉のシシ・ケバブ (shish kebab) が軽井沢滞在の三日目の大きな楽しみだった。

目隠ししてスイカを割るグループ、記念写真撮影会、それぞれの国の事情をお互いに聞いている人たち、名刺交換の風景、前日のフォーラムの議論を掘り出す人々、なぜかみんな幸せに見えた。となりの方が私に向かって囁いた「このメンバーは優しくて親切な方ばかりでびっくりしましたよ」。私は微笑んだ。

帰りの新幹線では、谷原さんの周りの顔は、もう初めての人はいなかった。

軽井沢滞在で、普段フォーマルな姿しか眼にできない人たちと親密な付き合いができたことに一番感謝している。渥美さんたちのホスピタリティー、そして私たち様々な国からの留学生を迎えてくれた暖かい心に惹かれた。まるで日本でもう一つの家族ができたような気分で軽井沢旅行が終わった。これからも研修センターの黄色いソファァーにみんなで座り込み、夜中まで話し合いたいと思った。しかし、今年であの森に囲まれた研修センターとはさよならしなければならない。研修センターの最後のお客の一人になれてラッキーだった。

(文責：カバ・メレキ)



□ SGRA フォーラム「東アジアの市民社会と 21 世紀の課題」



□ BBQ



□ スイカ割り



渥美奨学生の集い

2009年11月6日、「2009年度の渥美奨学生の集い」が、渥美財団ホールで開催されました。今年は、特定非営利活動法人「TABLE FOR TWO」の代表理事の近藤正晃ジェームスさんにTABLE FOR TWOの活動についてお話しをして頂きました。



TABLE FOR TWOとは、日本における食べ過ぎによる肥満の問題と開発途上国における食料不足の問題とを同時に解決しようとしているプログラムです。その仕組みは次のとおりです。すなわち、日本でより健康的な特定の定食や食品が購入されると、1食につき20円の寄付金が、TABLE FOR TWOを通じて開発途上国の子供たちの学校給食になります。日本で対象となる特定の定食や食品とは、TABLE FOR TWOに参加している企業の社員食堂、カフェ、ネットスーパーおよびコンビニなどで販売される一部の定食や食品です。その定食や食品は、カロリーが制限され、かつ栄養のバランスがとれた食事を可能にする健康的なものであるため、それらを消費することで日本の消費者は、肥満やメタボリック・シンドロームを予防することができます。他方で、上述したように、その各定食や食品の値段のうち20円が、TABLE FOR TWOの事務局によって諸国の開発途上国に送金され、子供たちが食べる学校給食1食分になります。その結果、開発途上国で十分に栄養をとっていない子供たちがより健康的な食事をすることに



なります。現在、プログラムの支援対象となっている国は、アフリカのウガンダ、ルワンダ、マラウィとインドです。このように、TABLE FOR TWO は、日本人も開発途上国の子供たちも健康的な食事をし、同時に健康になれる仕組みを可能にしています。

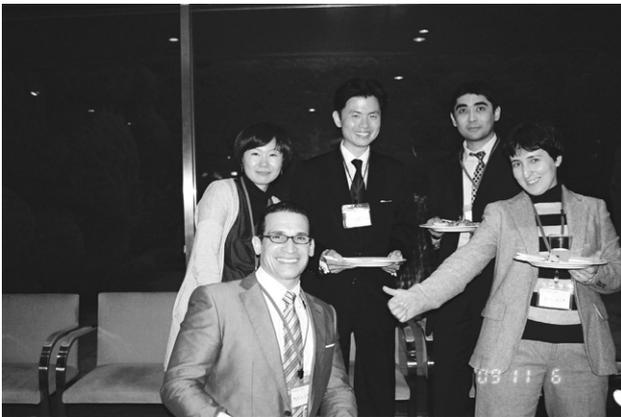


講演会はとても印象的でした。私は、アフリカの開発途上国の人々の生活に関するテレビ番組をよく見ます。そのときは、現地の人々が、食料が足りない、非常に苦しい生活をしている場面が出てくる場合もあります。毎回、そこに住んでいる子供たちのことを考え、泣き

そうな気持ちになります。そして、過酷の気候、水不足、治安の悪化などの事実からすれば、その国の政府が食料問題の解決に真剣に取り組んでも、問題がなかなか解決されないことは十分に考えられます。したがって、この問題の解決に当たって、ときには、先進国の支援が必要不可欠なものです。その意味で、先進国である日本人の健康を図りながら、開発途上国の子供たちのより健康的な食べ物を確保するという TABLE FOR TWO の活動は注目に値します。TABLE FOR TWO の今後のさらなる発展を心より祈っています。

講演会が終了した後に、親睦会がありました。渥美国際交流奨学財団が開く親睦会はいつもとても楽しいイベントです。今回も非常に美味しい料理と飲み物が用意されていました。今回の「集い」に参加した方々と様々なお話をし、大変充実した時間を過ごしました。「2009 年度の渥美国際交流奨学財団奨学生の集い」を開催して下さった渥美国際交流奨学財団に厚くお礼を申し上げます。

(文責：シェルマトフ ウルグベック)



2010 新年会

渥美財団 2010 年新年会

2010年1月9日（土）の12時から、奨学生やラクーン会員および家族約50人が集まる中、渥美国際交流奨学財団の新年会が開催されました。



今回の新年会では、奨学生各自の国の料理を披露しようとの企画があって、ダルウィシュ・ホサムさんはシリアのフムス（ひよこ豆のペースト）を、カバ・メレキさんはトルコのキョフテ（肉団子）、フムス（ひよこ豆のペースト）、トルコ風アップルケーキを、シェルマトプ・ウルグベックさんはウズベキスタンのプロフ（ポロ）（牛肉入り炊き込みご飯）を作ってくれました。フェルトキャンプ・エルメルさんはオランダのデザート、パンネックク（パンケーキ）、イエ・チョウ・トウさんの弟さん



であるイエ・チョウ・ティンさんはミャンマー風のエビチリを作ってくれました。スリランカのシャミラさんがパティス（スリランカ風餃子）、羅仁淑さん（1998年狸）は韓国のキムチを、金英順さん、郭栄珠さんと私は韓国のタッカルビ（辛い鶏料理）、トッポッキ（餅料理）を作りました。シリアとトルコの料理が、ちょっと見たところでは違って見えたのに、材料も作り方も同じと後で聞いて、びっくりしました。

昨年に続いて今年も中国チームは水餃子を作ってくれました。餃子班長の張建さん（2008年狸）と助手塩原フローニさん（2008年狸）は朝早く財団にきて、小麦粉を練ったり、野菜を細かく刻んだり、餃子を作るための作業を始めました。それから、修震さん（2008年狸）ご夫妻と、王立彬さん（2005年狸）の息子さんのしん君を含む何人かが餃子の包みを手伝いました。

皆さんの心のこもった各国自慢料理とおせち料理を、みんなでとてもおいしくいただきました。

お正月の定番、お餅つきが始まると大人子供問わずに庭に出て餅つき体験を楽しんでいました。お餅つきをはじめて見る子供もいたのでしょう。私にとっても直接見るのは初めてで、お餅はこんな風に作られるんだと興味津津でした。



もう一つの新年会の定番であるビンゴゲームは、みんなが当たるまでやるという楽しさあふれるゲームでした。このゲームで当たれば、今年一年間もずっと当たり続けられそうな気がして、とても嬉しかったです。皆さんもそうであったのではないかと思います。

今年 82 歳のお誕生日をお迎えになった理事長へのお祝いにエリックさんがドイツから直接シュトレンというドイツ伝統のケーキを持ってきてくれて、それに蝋燭を灯して、みんなでそれぞれ自分の国の言葉で誕生日の歌を歌いながら、理事長のご健康をお祈りしました。



餃子作りをはじめとして色々な体験ができ、皆さんに会えてとても楽しい新年会でした。来年も日本にいられたら、また参加したいと思います。

(文責：孫 貞阿)



2009 年度研究報告会



渥美国際交流奨学財団の2009年度研究報告会は、2010年3月6日（土）午後、東京都文京区関口の渥美財団ホールで開催されました。奨学生、ラクーン会会員、留学生支援団体などの来賓、財団の役員・スタッフを含め、約50名の方々が報告会に集まりました。天気はあいにくの雨でしたが、本年度の12名の奨学生による研究成果の発表は、それぞれ個性にあふれ、外の雨を忘れさせるほどでした。

研究報告会の冒頭で、渥美伊都子理事長からご挨拶があり、ひな祭りに関する日本文化の紹介および理事長ご自身の雛飾りのエピソードを出席者は興味深く拝聴しました。

次に、研究発表に移り、奨学生は、要求された通り、パワーポイントを駆使し、自分の研究内容を15分以内で、子供にもわかるようにやさしく説明することに挑戦しました。理工系3名、文系9名計12名の奨学生は、森林科学や地球生命圏科学、国際情報通信、地域文化、日本文学、政治思想史など、広範な分野にわたる多彩なテーマをめぐって発表を行ない、研究に対する熱い情熱を出席者に伝えました。

研究発表の後、来賓の笹岡太一様（辻アジア国際奨学財団常務理事）、妹尾正毅様（鹿島平和研究所）、片岡達治様（渥美財団理事）からコメントを賜りました。三名の方は口をそろえて奨学生の多彩な研究成果および成長ぶりに大きな賛辞を送りました。財団の選考委員でもある片岡先生は、発表時間の長短と関係なく、聞き手の興味関心を引き起こすことの重要性を、ご自身の経験談をまじえながら語られました。

報告会終了後、同ホールで親睦会が開催され、出席者は、報告会での発表内容や日頃の調査研究活動を振り返りながら、和やかに歓談しました。

3月は、多少の不安と大きな希望をともに抱える卒業シーズンです。「就職氷河期にあたっていますが、あきらめないで、あせらないで、じっくりと研究を進めてください」という、研究報告会における今西淳子常務理事のこの一言から、奨学生たちはきっと夢をかなえるための勇気と元気をもらえたでしょう。

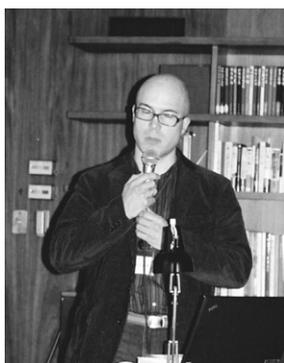
（文責：朱 琳）



□ 発表テーマ

- 崔 恩碩「近世日本の小都市—社会構造と都市問題解決過程の特徴」
 ダルウィッシュ ホサム「エジプトにおける選挙政治」
 カバ 加藤 メレキ「ピエール・ロティの日本理解—日本のピエール・ロティ像」
 金 英順「東アジア孝子説話研究」
 郭 栄珠「GIS 及び RS 画像データによる水害の素因抽出と水害危険度評価に関する研究—韓国、洛東江流域を事例に—」
 リンチン「中国共産党のモンゴル民族統合政策の研究（1949～1966年）
 —内モンゴルにおける社会主義イデオロギーの強化と経済的統合—」
 エリック・シッケタンツ「近代中国仏教形成と日本仏教」
 シェルマトフ ウルグベック「将来債権譲渡担保の生成と展開」
 孫 貞阿「感受性および抵抗性マツ組織内におけるマツノザイセンチュウとニセマツノザイセンチュウの移動」
 フェルトカンブ、エルメル「当たり前のように感じること—韓国と日本における人と動物の関わりに関する変容するリアリティ」
 イェ チョウ トウ「携帯機器におけるアジア音節言語共通のユーザーフレンドリーな文字入力インターフェース」
 朱 琳「中国史像と政治構想——内藤湖南と梁啓超との比較」

□ 研究発表の 2009 奨学生の皆さん（上段左→右へ発表順）



□ 来賓挨拶



辻アジア国際奨学財団常務理事
笹岡太一様



鹿島平和研究所
妹尾正毅様



渥美財団理事
片岡達治様

□ 懇親会



□ 2009 年度奨学生



2009 年度渥美奨学生のエッセイ

崔 恩碩 「おたまじゃくしの感想」 -----	33
ダルウィッシュ、ホサム 「日本への旅—思い出の味」 -----	34
カバ 加藤 メレキ 「日本、我が『アジアの先輩』」 -----	35
金 英順 「東アジアの漢字文化圏と日本文学」 -----	36
郭 栄珠 「人生の転換点」 -----	37
権 南希 「二度目の『留学』」 -----	38
リンチン 「内モンゴル人の伝統医療文化—アンダイ」 -----	38
シッケタンツ、エリック 「日本式喫茶店」 -----	39
シェルマトフ、ウルグベック 「日本留学の感想」 -----	40
孫 貞阿 「森林植物学研究室で学んだ日本」 -----	41
フェルトカンプ、エルメル 「帰国後の『逆カルチャーショック』... は意外に小さい？」 -----	42
イエ チョウ トウ 「テレビから学ぶ日本」 -----	43
朱 琳 「一期一会」 -----	43

おたまじゃくしの感想

チェ ウンソク
崔 恩碩

韓国国民大学 博士（歴史学）
韓国海洋水産開発院研究員（在ソウル）

時に、書きやすそうな文章がとても書けない場合がある。最初あっという間に書けそうであったこの短文がそういうケースであり、最後の最後まで財団の皆様を苦しめる羽目になってしまった。テーマは「日本で暮らした一年の回顧と感想」といういかにも簡単なものなのに、その間論文を一本書きいろいろな仕事を成し遂げながらもついにこの短い文章だけは仕上げるができなかった。

過去った一年を振り返ることは簡単である。財団のおかげで繁多な環境から逃れて学位論文を仕上げ、また一方で長年先送りにしていた翻訳を成し遂げ、さすがした気持ちで今年を迎えることができた。小ぢんまりした埼玉の小都市を思う存分楽しみ、馴染み深い本郷の街角やキャンパスをゆっくり歩きながらその舗石の感触に呼び起こされる思い出に身を任せ得たことに、純粋な喜びを感じたのはいうまでもない。軽井沢の森と関東平野を覆う夕日、ほぼ毎朝瞳のなかに飛び込んできていた榛名山の雄姿はいまも脳裏のなかで鮮やかである。無論、財団の皆様の親切と配慮に感服し、その交わりの場を愉しんだことは二言を要しない。このすべてが、いま肌に触れる風のように生々しく心地よく心を染めている。

これは過去の何年間私が日本で経験していた幸せな時間のほぼ完璧な再現であった。一方ではしかし、この一年で私は故郷を失った。その余韻が残っているのでこの文章を書く筆がなかなか進まなかったといえよう。日本近世史を専門とする自分にとって「古里」といえるものがあれば本郷のゼミにほかならない。漢字の連続にしか見えない候文を初めて日本語として解読するようになったのも、まったく読めなかった原文書を読めるようになり、様々な資料館で何百年も前の史料を解きながら得体の知れない興奮と、当時の人々に対する一種の責任感をも覚えるようになったのも、そして戦前から繰り広げられてきている日本史の英雄たちの論争に心をときめかせたのも、すべてあの古色蒼然な本郷の建物で開かれていたゼミでのことであつた。必死になって日本人先学の跡を追う自分がそこに

おり、私はそれが好きであつた。途中アメリカの大学に移ったり研究そのものを止めたりしたときも、本郷のゼミは私のアイデンティティーを構成するもっとも重要な要素であり私の故郷であつた。

長年故郷を離れていた人たちは、帰ってきた故郷が自分の記憶とはずいぶん違っていることに戸惑いを覚える。去年の四月に何年かぶりにゼミに戻ってきた私の感想がまさにそうであつた。しかし、変わったのはゼミのほうではなく私のほうであることに気付くにはそれほど時間を要しなかった。最初は小さい違和感に過ぎなかったのがやがて膨れ上がって、学位論文を仕上げる頃には至る所で破裂音を出しながら崩れ落ちた。問題の捉え方、時代区分や主要概念の適切性など、これまで信じて疑わなかった枠組みに対する疑問が続々と出てきて、気が付けば私の脳裏の隅々まで浸透していた。こうやって「古里」から、自分を育ててくれた「親」から、私は離れ始めた。対象に対する自分のイメージが崩れるとき、それは時には戸惑いとして、時には苦痛として、そしてある時は喜びとして迫ってきた。2009年を思い出すたびに、私は財団の与えてくれた絶好の環境のなかでこういう複雑な感情を十分味わいながら、里離れを経験したことをいつまでも忘れないであろう。

十余年前、小雨が降り続いていた本郷の古い講義室で開かれた指導教官のゼミの初日、先生がおっしゃったことは今も覚えている—今朝、三四郎池をみたら蛙たちの卵がずらっと並んでいた、今ここに集まった君たちはそういう卵であり、いつかおたまじゃくしになって、また蛙になっていくことを楽しみにします、と。長い間、私は孵化の目途も立たない卵であり続けた。しかし渥美奨学生として一年を過ごすうち自分を囲んでいた薄いながらも丈夫な殻が消えて、頼れる里程もない荒野が目の前に現れどんどん広がっていった。社会経済私的アプローチで影を潜めていた諸々の物事が、そこでは大声で歌いながら自分の存在を主張し出している。それは犯罪だったり、自然災害だったり、動物だったり、化け物だったりする。まだまだ解釈を待っているものたちの混沌とした世界。これがおたまじゃくしを見る世界なんだと、今になっては分かる気がする。孵化の機会を与えてくれた財団に改めて感謝しながら、蛙になれるかどうかは分からないが、当分はこのおたまじゃくしの世界を楽しみたい。

日本への旅一思い出の味

D a r w i s h e h H o u s a m
ダルウィッシュ ホサム

東京外国語大学・博士（地域文化）

東京外国語大学講師・研究員

旅行に行ったとしよう。旅の思い出に残るのは何だろうか。綺麗な風景だろうか。博物館で見た展示だろうか。それとも旅先での思いがけない出会いだろうか。思い出に残ることは人それぞれ・その時々だろうが、誰にでも旅先での美味しかった食事の思い出はあるのではないだろうか。食べ物の美味しい国・地域への旅は、得てして思い出深い旅になることが多いような気がする。

私の日本への旅は今年で8年近くになる。日本に来たばかりの頃は、見るもの聞くもの全てが目新しく、驚くことばかりだった。今となってはすっかり慣れてしまったが、はじめの頃は電車や地下鉄（シリアには蒸気機関車しかなかった）、数えきれない機能が付いたカラフルな携帯電話、平らな道路や整備された歩道まで全てが新鮮だった。今でも鮮明に覚えているのが、来日した翌朝、大学の寮のまわりを散歩し、部屋に戻って来て靴を手にとってみると、靴底がまったく汚れておらず、とても驚いた。また、コンビニやスーパーに入る時、電車に乗る時、さらには自動販売機で飲み物を買う時でさえも、あちこちから案内の自動音声流れて来て、どこかの遊園地に迷い込んだような気分だった。日本に到着してから最初の何日かは、あんぐり口を開けたままで過ごした気がする。成田空港に到着した時、ひたすらお辞儀をしているビジネスマン風の男性を見かけ、翌朝道で腰のまがった年配の女性を見て、「日本では、あんなにお辞儀をするから、歳をとったら皆腰が曲がってしまうんだ」と妙に納得したことを覚えている。日本での生活が長くなり、日本社会や便利さに慣れていくにつれ、このように驚くことは少なくなったが、食べ物に関する新鮮な驚きは、来日当初から今まで色褪せず続けている。

シリアの食事と日本の食事の大きな違いは3つある。一つ目は、カロリーの違いである。シリアの食事の方が油や塩を使う量が多く、カロリーが高い食事に慣れ

ていたため、来日したばかりの頃は、日本の食事では物足りなさを感じていた。たっぷり一人前の夕食を食べてから、ウズベキスタンから来た友人と連れ立って「デザート」にお蕎麦やうどんを食べたくらいである。しかし、徐々に日本の生活と食事に身体が慣れてくると、「デザート」なしでも十分満足し、より健康的な食生活に変わった。今では毎日日本食を食べないと落ち着かないほどである。日本に来てから初めて食べた刺身も大好物になった。食べ物の嗜好がこんなにも変わるとは自分自身で驚いている。

二つ目は、見た目の美しさである。日本の食事の盛りつけの美しさと心遣いには、いつも驚かされる。食事だけでなく、和菓子にもその心があふれている。細部にまで丁寧な仕上げられた和菓子は、食べてしまうのをためらうくらいである。シリアにも繊細なお菓子はたくさんあるが、日本の和菓子ほど色使いや形が綺麗なお菓子は見たことがない。目でも食事やお菓子を楽しむことを、日本に来て初めて体験した。

三つ目は、四季折々の食材である。日本は四季に恵まれ、その季節ごとに旬の野菜や果物がある。スイカが店先に並ぶようになると夏の訪れを感じ、みかんやイチゴが登場すると、寒い季節が近づいたことを感じる。シリアでは、夏と冬しか感じないため、食材から季節を感じることは少ない。さらに日本には、その季節のものを主役にした料理やお菓子がある（例えば桜の花びらを象ったクッキーなど）。季節と料理が一体となった日本の食事の中に見つける様々な創意工夫には、いつも驚かされる。

日本での8年間という長い旅の間、いろいろな料理や味に出会い、楽しんで来た。思い出に残っているのは美味しかった食事だけではない。大切なのは、その料理や味を楽しんだ場面とそれらを共有した人たちである。冬の寒い日に友人と囲んだ鍋、論文の執筆で行き詰まった時に励ましてくれた日本のお母さんのお弁当、満開の桜の下で食べたおにぎり、渥美財団の新年会や15周年記念のレセプションなど、思い出は数えきれない。これらの思い出や経験が、これまでの長い旅を支えてくれた。これからも旅を続ける中で、いろいろな人と一緒にいろいろな味に出会えることを楽しみにしている。

日本、我が「アジアの先輩」

Kaba kato Melek
カバ 加藤 メレキ
筑波大学（文芸・言語）

幕末、そして明治期に入ってから西洋人を中心に多くの外国人が来日し、その多くは様々なかたちで日本滞在体験に基づく紀行文や印象記などを残した。「芸者の国」「侍の国」といったような日本イメージは現在もまだ健在であるということは、日本人の身になってみれば必ずしも喜ばしいことではないだろう。それは、「日本」を勉強している我々留学生にとっても、「うんざり」する一つの現象である。しかし、神秘的な国というレッテルを持って「極東の不思議な国」として日本を見るか、高度経済成長期の体験を前景化し、経済大国としての日本に眼差しを向けるか、この二つの間のジレンマはまだ消え去ったわけではない。

しかし、少しだけ注意をはらってみれば、従来の「日本イメージ」として考えられてきたものは、ヨーロッパやアメリカなどの人々によって書かれた書物に起源をもつものではないだろうか。特に、日本を対象とする文献や映画などの場合もそうである。それでは、中国人、ロシア人、台湾人、シリア人の日本イメージは何であろう。例えば、トルコ人の日本人イメージや日本観はあまり知られていないものである。

トルコの心理学者であるネブザット・タルハン教授の『女性の心理学の』という、トルコ人向けに女性の心理学について語っている本がある。その著書の中で女性と近代化について語る際、日本モデルを賛美している。彼は「例えば日本人は、自らの伝統的な個性を保守しながら近代化することを選択したが、我々〔トルコ人〕は自らの価値観を変えることによって近代化することを選んだ。日本人は洋服ダンスや音楽にはなく、技術に力を注いだのである。それこそが極東の国々をさらに高度な発展に導いたのである。だが、我々はしてはいけないことをしてしまった。つまり、西洋のモダニズムを無批判に受け入れてしまった。」と述べている。トルコの近代化過程に対する反省も注目できるが、それよりも、トルコにとって日本は、自らの「日本人」というアイデンティティを保持しながら近代

化を果たした国である。さらに注目したいのは、「桜・侍・富士山・刀」といった断片化され、誤解に満ちている日本人イメージとは違う次元で考察が行われていることである。トルコは、アジアの「先輩」として日本を見ているのである。

トルコにおいて今年2010年は、「トルコにおける日本年」Türkiye' de Japon Yılıが開催され、数多くのイベントがすでに1月からスタートしている。この2010年のイベント以外にも、毎年夏「ジャパンウィーク」も開催され、飛行機で12時間もかかる日本は、トルコ人にとって、地理的な距離を越え、身近な国である。トルコは親日の国の中でも、一般人の「親日度」がかなり高い国だと容易に言える。留学先が日本だとトルコ人に話すと、なぜかアメリカに留学する典型的な大学生や大学院生よりも異なる返事をもらう。それは単に技術や学問を学んで国に帰る留学生ではないという意味を含む。トルコ人からすると、私は、「人間・自然・資源・勤勉を尊重する日本文化」の中で留学生活を送っていると思われているからである。つまり、学問的な発展そして人間的な成長を果たせる文化空間として日本が理解されているわけである。

最近、筑波大学において課外活動の時間にトルコ語を教え、その学生が私のトルコの実家にホームステイに行った。その後、その学生、そして、私の親や親戚の感想を聞いたとき、これからトルコと日本の友好関係が育まれていこうと考えた。しかし、トルコだけではなく、現在の若者たちはマンガやインターネットを媒介に「桜・侍・富士山・刀・」をはるかに超えた日本理解を持つようになった。



筑波大学の学部生小玉さんと私の弟。トルコの実家にて

2003年以來、日本の様々な機関から支援を受けた私は、3年前から国に帰るたびに日本人や他の国から留学に来ている知り合いをトルコに連れて行き、実家で数日を一緒に過ごすことにしている。親が毎回「どこの国の方が訪れるかなあ？」と楽しみにしている一方では、お客さんの方がどのような文化と出会うのか緊張している様子を眺めている。そして、自分はグローバル社会、「渥美的」に言えば「地球市民」になろうと一歩一歩と歩んでいる。2009年の4月から、毎月「江戸川橋」の駅で下車し、かなりの階段を上ったあと、さらに坂道を上がって行くようになった。それ以来、今度実家につれていけそうな方の人数も国籍の種類もかなり増えてきた。それが、よかった。

東アジアの漢字文化圏と日本文学

キム ヨンスン
金 英順
立教大学（日本文学）

私は日本文学に魅了され、ひたすら日本文学と向き合いながら十数年間の留学生活を送って来た。最初は平安時代の『源氏物語』にみられるような雅やかな世界や、『古今和歌集』にみられる変わりゆく四季の姿に人の哀れを詠む和歌の世界に憧れていた。私が感じた平安文学は正に優雅そのものであった。平安時代を生きた全ての人々が文学にみるような優雅で余裕のある暮らしではなかったにしても、昔の日本人の心を覗き見たような気がした。

しかし、勉強を続けるうちに、中世の軍記物語にみるような王位継承や政権獲得のために親と子が対立し、兄弟が争い戦う世界もみることが出来た。私が修士論文で取り上げた『平家物語』という軍記物語には、王室から武家へと政権が移る変革期にあたる鎌倉初期の様子——王室や武家を始め、寺院の僧侶、一般の人々に到るまで、当時の人々が如何にその時代を生きようとしたのかが描かれている。私がこの物語を修士論文に選んだ理由は、時代に翻弄されながらも親や子を救うため、あるいは、主人を護るために懸命に戦い死ん

で行く人々の姿に強い感動を受けたからであった。自分のためだけではなく、誰かのために生きる姿に惹かれていたかもしれない。

その後、私は中世文学の説話集を中心に、親のために我が身を犠牲にする自己犠牲の孝をモチーフとする孝子説話を研究するようになった。日本における説話研究は、中国の『孝子伝』と、日本の『二十四孝』を中心とする比較研究が中心となっており、日本の一方的な受容論に終始し、間の朝鮮半島に伝わる孝子説話はあまり注目されていない状況であった。最初、研究方法も分からず、従来の研究方法と同じく、私も中国の『孝子伝』と日本の説話を比較していたが、恩師である立教大学の小峯和明先生と出会い、韓国人である私だからこそ出来る比較研究の進め方を教わったのである。そして、今は、日本や中国の説話だけに拘らず、韓国の説話との比較も試みるようになり、自ずと東アジアの説話文学にみる孝子説話という広い視野で研究を進めるようになった。

中国・韓国・日本という視野から説話文学を考えると、これら三国が漢字文化圏であったことによって、私の東アジア説話文学の比較が可能となることに気づいた。現在、私は東アジアの孝子説話にみる子の自己犠牲の行為と仏教経典で説く釈迦の前生譚との関わりについて博士論文を作成しているが、もし、仏教の経典が漢字で訳されていないなかったら、今の私の研究は出来なかったであろう。結局、私は日本文学の研究から韓国や中国の文学を知り、東アジアを考えるようになったのである。このように考えると、これからは、東アジアの漢字文化圏としてのベトナムにも視野に入れて研究を進めるべきで、漢字文化圏という東アジア文学の新たな展開が期待される。

人生の転換点

カク ヨンジュ
郭 栄珠

千葉大学・博士（地球生命圏科学）

土木研究所水災害・リスクマネジメント国際センター

専門研究員

長くても 100 年ほどの人生で、私たちは何回も人生の転換点に出会います。個人差があるので、人によっては気付かない場合もありますし、強く感じる場合もあります。また、良い転換点と辛い転換点があります。しかし、転換を選択するか選択しないかは自分の判断が強く影響し、それによって人生の歩みが決定されます。単純な事実ですが、深く考えると面白くなります。すべてが自分の責任で、外からではなく内から生まれることだからです。

良いことがすべて良くなるわけでもありませんし、辛いことから自分が強く成長する場合もあります。だから、環境が良い時には自分の気力と体力が甘くならないように、環境が辛い時には自分の気力と体力が落ち込まないように！この考えを実践している人は少なくないと思います。例えば、先日、3D服生産機（特許）を発明し、売上が世界1位になった日本の中小企業の社長さんの話をテレビで見ました。「自分の全財産は寄附してしまい、会社だけに投資しています。一番申し訳ないと思うのは家族に対してです。」なぜ？「甘くならないように、ハングリー精神を大切に心がけているからです。それが、今私がここに存在している理由です」と言いました。

最悪を想定して対策を作ると、危機管理能力が高まります。英語で言うとリスクマネジメントですが、私の専門にも関係がありますし、大変興味を持っていることです。社会で適応できる分野は、経済－経営－ビジネス、災害リスク、ストレス、生活－衣・食・住など、たぶん全分野と言っても間違いのないでしょう。

1997年に韓国がIMF（国際通貨基金）の管理下になった時、私は釜山にいました。その時韓国の社会は大混乱でした。2009年、世界の経済システム全体が崩

壊した時、つまり、リーマンショック後の「ドル崩壊」によって世界経済が大混乱した時、私は千葉にいました。しかし、私の周りを見回してもそんなに大きな変化はないようでした。あの時は、誰かが毎日毎日リスクマネジメントを行っていたはずだと思います。

それなのに、当時、精神的にいらいらする自分自身を発見して驚きました。そこで、もっと遠くを見てみると、複雑な現象が見えてきました。経済の問題もありますが、近年、今までに経験しなかったような洪水・地震・津波などの大規模災害が急激に増加しています。いつ、どこに、どのくらいの変化が発生するか予測不可能なのです。

人間の歩みも同じではないかと思います。偉くなった人でも、まだまだわからないことが多いのですから、いつでも、これからも、長い歴史を持っている地球を少しでもよく理解しようと努めながら、楽しい自分の人生の転換点を迎えに行くのはどうでしょうか？

現在、私ができることは限られていますが、辛い時の方が強くなれます。将来、この辛さがそんなに大変ではなかったことを気付かせてくれると思います。私が経験するすべてのことが、私の危機管理能力を高めていると確信しています。

体の健康と精神の健康を与えられているのですから、今を大切に、一步一步前向きに前進し続けている自分自身を発見する時、その時が人生の転換点の入口だと思います。

これからの歩みが恵まれますように。

二度目の「留学」

クワン ナミ
権 南希

東京大学 (国際法)

関西大学政策創造学部助教

昨年9月、私は8年間の留学生活を送った東京を離れて大阪に来た。私を待っていたのは、個性的なパワーに満ちている大学三年生、いや「三回生」たちだった。私が所属しているところは、大阪にある関西大学の政策創造学部。「先生、何故日本に留学しようと思ったのですか?」「韓国人は日本人が嫌いって、本当ですか?」関西弁が飛び交う学生たちの質問攻めのなかで、私の初講義は始まった。初めて日本に留学生として来た時に感じた緊張感のようなものが、もう一度よみがえるような感じがして嬉しかった。

しかし、感傷に浸っている間もなく、これまでとは違う緊張感と責任感が心理的なプレッシャーとして重くのしかかってきた。秋学期、担当することになった科目は、国際法事例研究。学生たちには自らテーマを決めて国際法に関する論点を発表してもらった。インドの児童労働問題、アフリカの紛争ダイヤモンド問題、地球温暖化問題、捕鯨問題、東アジア共同体問題などのテーマについて発表があった。そのなかで私を一番悩ませたのは、韓国と日本の間の問題だった。もちろん、国際法の専門的な知識だけを学生に伝えるなら、問題はそれほど難しくない。しかし、東京裁判、竹島・独島問題となると話は違う。特に「東京裁判」のような日本の歴史認識が直接問われる問題は、韓国人の私にとっては非常に扱いが難しい問題だった。「そんな勝者の裁きだったのに、何故日本だけが、我々がずっと責められなければならないのですか」と問う学生たちにどう答えれば良いのか。そもそも、外国人の私の意図は誤解されることなく、きちんと伝わるのだろうか。

二年ほど前、野坂昭如の小説を映画化したアニメ「火垂るの墓」の韓国のある大学での上映を巡って、韓国内で賛否両論があったことが報道されたことがある。その時、韓国人の友人たちと何時間もこの問題について話した。私たちが日本に留学しなかったら、おそらくそこまで力を入れて話すことはなかったと思う。同

じ韓国人留学生の中でも意見が違う人たちがいることは当然なことである。しかし何年もの時間を同じ建物で過ごしていても、お互いの意見の違いを知り、理解する機会を持つことは意外とないものだ。もちろん、最初から結論はあるはずのない話だったが、それぞれが自分自身に対して結論を出し、解散した。この時のことを思い出したとき、私の悩みはすんなりと消えていた。

彼らの主張を真正面から受止め、問題を共有すること、そして真摯に答えることのみが私のできる精一杯のことであることに気がついた。発表グループの学生たちと議論を重ねて行くにつれ、私は学生たちに、そして学生たちは私に、言いたいことが、そして聞きたいことがたくさんあることが分かった。東京裁判チームの発表が終わった去年11月のある日、私は改めて留学当初の自分に戻ったような気がした。

去年の受講生たちは来春、社会人になるための準備で忙しい。私はいま、二度目の「留学」の初めての春を、一回生とともに送っている。

内モンゴル人の伝統医療文化—アンダイ

Rin Chin
リンチン

東京外国語大学・博士 (地域文化研究)

東京外国語大学大学院総合国際研究院

近代化する中国の内モンゴルにおいても、モンゴル人の伝統文化は生き延びている。たとえば、内モンゴル東部ホルチン地域では仏教と混淆的にシャマニズムが存続しており、近代医学と並行的にモンゴル伝統医学や民間の整骨治療が人々の病氣治療に携わっており、また、昔であれば若い女性の精神異常であるアンダイ病をシャマニズム的に癒すアンダイ治療儀礼が今は民間のアンダイ舞踊としてはやっている。

アンダイは主に18歳から25歳ぐらいまでの未婚または既婚女性の心の病を指しており、またそれを治すシャマニズムの治療儀礼と、それに含まれる歌や舞踊をも指している。さらに病人自身、またはその治療法

と治療者を意味し、内モンゴル自治区通遼市フレイ旗において、シャマニズム的治療儀礼として20世紀半ばまで存在していたと見られ、ホルチン地域のシャマニズムの一つの特徴として注目されていた。しかし、1947年に内モンゴルで実施された「土地改革」運動によりアンダイは「封建的迷信」の一つとして禁止された。1956年、この儀礼は中国及び内モンゴルで開かれた民族舞踊大会において、社会主義を賛美する内容に改変され民間舞踏として登場した。20世紀後半以降、内モンゴル地域で知られている「アンダイ」とは、若い男女が赤や白の布を持って歌いながら踊る集団的な舞踊である。



アンダイ踊り

アンダイ舞踏は病としてのアンダイを治療するとき用いられる歌と踊りによって構成される、宗教的な踊りである。地元の人々の間では「アンダイを歌う」と呼ばれるこの表現は、アンダイ病、アンダイを治療するシャマンとアンダイ儀礼などに関わるすべての内容をあらわす文化象徴となっている。

日本式喫茶店

E r i k Schicketanz
エリック シッケタンツ

東京大学（宗教学宗教学史学）

東京大学人文社会系研究科特任研究員

私は日本に留学したことによって、異文化の中で暮らしはじめた。日本での生活にともなって、たくさんの新しい体験が出来た。いわゆる「異文化体験」だ。日本に来る前から、私は日本で異文化に接することをとても楽しみにしていた。来日前からすでに日本の文化について、本やテレビを通じて得た知識をたくさん持っていた。豊の上の暮らしも期待していたし、お箸で食事することもわかっていた。これらは、ドイツでよく知られている日本文化のシンボルである。だが、このような私が期待していた異文化体験に加えて、予想外の場所での異文化も私を待っていた。この予想外の場所の一つが、日本の喫茶店だ。こんな所で異文化体験ができるとは予想していなかった。つまり、日本の喫茶店はドイツの喫茶店とは異なる文化空間になっているのである。さて、ではこの「日本式喫茶店」とはどのような場所だろうか。

日本の喫茶店が提供するサービスは、ドイツと異なっている。もちろん、飲み物と軽食を売るという点では似ている。しかし、日本の喫茶店はそれ以上の機能を持っている。それに気づいたのは、上智大学に一年間留学した時だった。当時はお金があまりなく、エアコンとお風呂が付いていないアパートの部屋で暮らしていた。扇風機があったとはいえ、夏は暑い。それで、近くのドトールに行って、店のエアコンで涼みながら読書をしようと考えた。店に入ると、私と同じアパートの隣の部屋に住んでいた人も同じ発想で来ていた。なるほど、喫茶店にはこんな便利な機能があったのだ。安い部屋に住んでいた私はあの夏、大いにドトールの世話になった。確かにエアコンは喫茶店の正式なサービスではないかもしれないが、あの夏は喫茶店のエアコンのおかげで何とか生き延びることが出来た。

しかし、喫茶店をより本格的に利用することになっ

たのは、東京大学に留学することになってからである。今のアパートの部屋はエアコンを装備してはいるけれども、部屋が狭く、一人だとなかなか集中できない。私は周りに人がいる場所で勉強することが好きだ。普段は図書館で勉強するのだが、図書館が閉まっている日もよくある。最初はたしかに、図書館が閉まっていたので仕方なく喫茶店で勉強しようと思った。ところが入ってみると、勉強目的で来ているのは僕だけではなかった。これには驚いた。ドイツではよく友達と喫茶店で待ち合わせして、コーヒーやお茶を飲みながらおしゃべりをしていただけれども、喫茶店を勉強する場所としては認識していなかった。ドイツであれば、コーヒー一杯をずるずると飲んで長時間そこにいれば、お店の人に怒られるだろう。しかし、日本では、コーヒー一杯を飲みながら、喫茶店を長時間利用してもいいということが暗黙の了解になっているようだ。多くの人々が狭い部屋に住んでいるという原因もあるのかもしれない。しかし、僕からすると、私的な空間が喫茶店に忍び込んでいるように見える。読書している人ももちろんいるし、友達と会話する人も多い。だが、それ以上に、ドイツでは考えられないのは、喫茶店が職場の延長になっていることである。私のよく行く喫茶店では、隣のテーブルでテストの採点をする学校の先生や、ノートパソコンで洋服やグラフィックのデザインの仕事をやる人をよく見かける。時々、どこかの会社の会議室に間違っに入ってしまったような気がすることもある。

もちろん、すべての喫茶店がそうであるというわけではない。私の近所にある喫茶店から判断すると、ある程度、喫茶店の使い分けがあるようだ。この喫茶店では主に友達同士で会ったりすることが多いのに、あの喫茶店は勉強と仕事をする場所として知られている。多くの人が仕事場として利用する近所のスターバックスのスタッフもそれを意識しているようで、「14:00時-17:00時の間は勉強と仕事をしないようにお願いします」という看板を立てて、店にとって経済的に重要な時間帯を指定している。このことから、この店が仕事場として使われている姿が伺える。

日本にある喫茶店が日本社会の一部として、その特徴を現していることは当然なのかもしれないが、こうして喫茶店によく通ってみると、日本的な社会空間に

入りこんで、ドイツで馴染んでいた場所をまた新しい目で見ることができた。これも日本ですることができた重要な文化体験の一つだと思う。

日本留学の感想

Shermatov Ulugbek
シエルマトフ・ウルグベック

明治大学・博士（法学）

ウズベキスタン最高裁判所（在タシュケント）

2010年3月に明治大学大学院法学研究科博士後期課程を修了すると同時に博士学位を取得し、その直後に母国へ帰国した。初めて来日したのが2000年9月であったので、2003年から2005年までにウズベキスタンで勤務した期間を除けば、日本滞在期間は約8年間であった。この8年間を振り返って、日本での留学について感想を述べたいと思う。

日本での留学は楽しくて、充実した時間であった。日本留学は膨大な学費と生活費がかかるため、多くの留学生在が経済面で大変苦労していることは周知のとおりである。ところが、私は、長い間、国費留学生、そして最後の1年間、渥美国際交流奨学財団の奨学生であったので、留学の間、楽に暮らし、十分に研究に集中することができた。

日本では、自分の研究分野のみならず、その他の分野にも幅広く注目し、自分の視野を大きく広げたと思う。特に、外国の人と交流ができて、とても勉強になった。この貴重な体験は、私の今後の活躍に役に立つに違いない。

日本で私が食べた美味しい食べ物、目の当たりにした美しい自然は一生の思い出になった。旅行をしたときに見た海や山、温泉や飲食店などなどは一生忘れない。そして、日本の便利さに常に感心していた。非常に暮らしやすい国だというのが日本の印象である。

日本で多くの日本人の方々と出会ったことが特に重要である。その方々は、私に日本を教え、様々な問題に直面する私を助けてくださった。そのため、日本で困ったことがなかった。また、たくさんの友達ができた。

友達のおかげで私が早く日本に馴染むことができ、日本語で会話をするようになった。友達がいたので、外国での滞在は寂しくなかった。

もちろん、留学の間、辛いときもあった。たとえば、病気のときはその典型例である。しかし、その辛いときの経験は私を更に逞しくし、母国や家族の大切さをより強く実感させたと思う。

日本社会に問題が多いことにも気付いた。しかし、人々がより楽な生活を送るために日本の政府が効果的な政策を講じていることを認めなければならない。若いウズベキスタンにとって、日本政府のそういった政策が参考になる。留学の間、日本の歴史、政治、経済などに興味を持ち、日本政府および日本の偉人達の業績を分析しようとした。そのような分析の内容は、ウズベキスタンで活躍したいと考える私のために重要な素材になるであろう。

留学の期間として8年は長すぎたかもしれない。私にとって日本は、もはや外国と思えないくらい親しい存在になった。そのため、日本から離れるのはとても悲しい。今回の帰国にあたって、そのような複雑な気持ちが存在した。しかし、これからウズベキスタンで活躍するなかでウズベキスタンと日本との交流の発展に貢献できれば、最高に嬉しいのである。その目標を目指して、母国で頑張りたいと思う。

森林植物学研究室で学んだ日本

ソン ジョンア
孫 貞阿

東京大学・博士（森林科学）

東京大学大学院農業生命科学研究科研究員

私が知っている日本は「森林植物学研究室である」といえます。日本に来て知り合いになった日本人のほとんどが森林植物学研究室の人だからです。研究室の皆さんから、日本語と日本の文化に関して、さまざまなことを教えてもらいました。韓国の文化と似ているところも多い反面、ぜんぜん違うところも多く、こうした違いを一つずつ分かっていくことで、世の中、多

様であることを身をもって知りました。そして国ごとに異なる文化をお互い尊重することが必要であるとしみじみに思いました。

研究室生活の6年間、いろいろな楽しい思い出がたくさんあります。面白い話をしてくれた皆さんのおかげでたくさん笑えて心も和みました。皆さんが紹介してくれた日本の漫画や小説を読み、音楽を聴いて、楽しい時間を過ごせました。こういう楽しい時間の中、一つ分かったことがあります。それは同じ時間を一緒に生きていくことかいかにか大事であるかということです。今現在をみんなと同じ速度で過ごすことで初めて味わえる時間の重さは、過ぎ去った時間をまとめて一気に経験しても得ることができないということでした。この感覚は私が外国にいたから味わえたことだと思います。

2年ほど前の夏、研究室の皆さんと花火大会に行ったことがあります。その時、タイからの留学生と私は生まれてはじめて浴衣を着ました。浴衣を着るという体験は外国人としては非常に楽しいことだと思います。研究室の人に着付けをしてもらったのは面白くて楽しかったです。いざ浴衣を着て花火大会に出かけましたが、初めての浴衣に慣れず、しかも洋服よりずっと暑くてびっくりしました。その時の私はもう二度と着るまいと思いました。“みんな暑いのによく着ていますね”ときいてみたら、研究室の女性は“暑いけど一年に一回は着たくなります”と笑いながら言っていました。私も今年の夏にはまた浴衣を着て花火大会に行きたいなと思うようになりました。

夏の花火とともに春のお花見もとても楽しい思い出です。実験用のクロマツの苗木を植えるために田無試験地に行ったら、桜がちょうど満開で、風が吹くたびに花びらが散って茶色の畑の上に雪のように綺麗に積もりました。花びらの舞いを眺めていると時間の流れも忘れそうでした。一緒に作業していた人から、“もう作業に戻りましょう”と言われてしまいました。田無での美しかった桜の記憶は一生忘れないと思います。桜だけではなく、日本に来てはじめて見たいろいろな花も記憶に残っています。その中でもジンチョウゲは3月の街にとってもいい香りを漂わせて、私をいつも引き寄せ、花の中で深呼吸をさせるのです。近くを通る人たちに怪しまれているのではと感じてやめたこともありました。思い切り深呼吸のできる自分だけのジンチョウゲがほしいと思います。

実験と論文書きでつらい時もありましたが、このような楽しい出来事で乗り越えられたと思います。

意外にも韓国人と日本人以外の外国人と友達になる機会が少なかったなか、今年度、一気にいろいろな国の友達ができとても嬉しかったです。まだまだ話したいことも多く残っているのに、国に帰る人もいて少し寂しいですが、必ずいつかまた会えそうな気がして、その時をもうすでに楽しみにしています。

帰国後の「逆カルチャーショック」... は意外に小さい？

V e i l d k a m p, E l m e r
フェルトカンプ, エルメル
東京大学・博士（文化人類学）
オランダ在住

留学というのは、自分の生まれた国から離れて他の国で勉強することを意味する言葉である。しかし、「留学生」はそのラベルだけでは語りきれない個々人の過去・現在・将来を常に持ち歩いている。勉強以外にも生活の営みや人間としての成長に関わる、数多くの見えない側面を持っているのである。

私は今年の3月末で9年間の日本留学を終えて帰国した。連れ合いと娘といっしょにオランダに帰ってから、約3週間が過ぎた時点でこのエッセイを書いている。何について書こうかと考えていたら、自分の研究テーマにも近い「日常生活—当たり前のこと」を考えることにした。

「日本語がお上手ですね。何ヶ国語話せますか？」を抜きにして、日本に留学している間、よく聞かれたのは「日本のどこがおかしい？日本は不便なことはないの？」という質問だった。このような質問は、国ごとに個別の「文化」があって、違う国に行けばそこには別世界のようなものがあると信じているから生じるのである。私が初めて日本にきたのは1994年の秋だが、あの頃だったら多分「お箸に慣れない」とか「牛乳の味はオランダと違う」等と答えていたかもしれない。でも実は、あの当時の感覚を聞かれてもよく覚えてい

ない。初めは注目するに値する「文化・習慣・生活の差」だったことが、当たり前になったからである。

外国に数年も住んでみれば、結局は留学先のどこが自分の育った国と違うのか、どこがおかしいのか、また外国に長く住んでいない人々が何を意識し注目しているかさえ想像できなくなる。どこの国へ行っても生活の違いはあるだろうし、不便だって「慣れ」の問題に過ぎない。生活というのは、人にもよるだろうが、自分の持っている過去・歴史・慣れを参照しながら新しいことに向かって挑戦することで、過去の使える要素だけを取り入れながら常に変化するものだからである。少なくとも自分の場合はそうである。もちろん、何としても「母国の生活様式」を守ろうとする人もいるが、それを続けていくには相当の精神的な苦勞が必要になるだろう。

日本に住んでいて「これが不便だ」と考えたことはない。慣れてさえくれば（時間の問題だと私は思うが）、どの環境にでも適応できるのは自然なことである。帰国した後もその考え方は変わらない。強いて言えば、「文化の差」は誰でも目に付く食べ物、礼儀、衣食住のあり方ではなく、むしろ些細な生活のディテールにあると感じている。

帰国後の生活がスムーズにできていると思っていたら、数日前にこんなことがあった。晩ご飯の材料がなくてショッピングに行こうとした。東京では、近くのスーパーは夜10時までで、店が閉まっている場合はアパートの前のコンビニでも最低限に必要なものは買えた。しかし、オランダのスーパーは昔の18時閉店から、私が大学生の頃に20時閉店になったとはいえ、時差ボケで日曜日だと忘れていた。日曜日は教会に行く日なので仕事をしてはならない（しかし、実際に教会に通う人が激減しているので、現在の日曜日はとても静かな、何もやることがない日になってしまった）。その夜の空腹感、自分の中の「プチ・逆カルチャーショック」だったのかもしれない。

テレビから学ぶ日本

Y e K y a w t h u
イェ チョウ トウ

早稲田大学（国際情報通信学）

早稲田大学国際情報通信研究センター助手

母国ミャンマーではニュース番組を除いてテレビをほとんど見なかった私だが、来日後は時間を見つけては見るようになった。というのは、日本のテレビ番組には素晴らしいものが多く、学びの可能性が無限に広がっているからだ。

来日当初は、主に日本語の学習のためにテレビを見ていた。NHKの教育番組だけでなく、ドラマから日常会話や若者の使う日本語などを学んだ。字幕付きの番組も多く、漢字の勉強に役立った。日本語がだんだん分かるようになると、スポーツ、旅行、文化、ドキュメンタリーなど、さまざまな番組を見るようになり、日本の文化に対する理解が少しずつ深まっていった。最近では、お笑いや政治番組も理解できるようになり、くだけた日本語や逆に硬い日本語を学ぶのに役立っている。

このように日本のテレビ番組は私にとって貴重な学びの場であるが、中でもドキュメンタリー番組からは多くのことを学んだ。たとえば、戦争体験者の話から日本の歴史的事実を初めて学んだ。ミャンマーにいた時は、戦争を体験した日本人の痛みなど全く知らなかったが、つらい時代を過ごした日本人の語る内容に強い衝撃を受け、戦争について深く考えるきっかけとなった。また、障害をもった人や病気の人が懸命に生きようと頑張っている姿を描いた番組を見て、心を揺さぶられ、命の重さについて考えさせられた。歴史上の偉人、研究者、政治家など、日本を変えるために人生をかけている人についての番組もよく見る。このような立派な人々の努力があったからこそ、日本はここまで豊かな国になったのだと実感する。そんな時、自分もできることを精一杯やらねばという思いで胸が熱くなる。

もちろんテレビが与える影響には良いものも悪いものもあり、場合によっては危険性もある。しかし、私は、日本のテレビ番組は素晴らしい教育手段のひとつであ

ると考える。研究を行う上で手がかりとなるような幅広い知識を得ることもでき、私にとっては知識の宝庫といえる。

学会などで海外を訪れた際は、短時間でもテレビ番組を見るようにしている。そうすることにより、文化、流行、教育などに触れることができ、少しその国に近づけたような気がするのだ。このような経験から、日本に来たばかりの人へアドバイスをするとすれば、テレビから学ぶ日本をお勧めしたい。わずかな時間でも、何かを学び取ろうという意識をもってテレビを見ることで大いに勉強になるということを伝えたい。

寝転がっていながらリモコンひとつで勉強ができる日本では、いくらでも知識を増やしていくことができる。今夜もテレビをつけたまま居眠りして朝を迎えることになりそうだ…。

一期一会

しゅ りん
朱 琳

東京大学・博士（アジア政治思想史）
東京大学大学院学術研究員

学会に参加するために初めて杜の都仙台へ行ってきた。新幹線の車内で、仙台を舞台にした魯迅（1881－1936）の「藤野先生」（1926年）を読み直した。中国の高校の教科書に載っているため、私の世代で知らない人がいないほど広く読まれている作品である。読み直してみて、次の一段落が印象に残った。

私はそこで仙台の医学専門学校へ行った。東京を発って間もなく一つの駅に着いた。日暮里と書いてあった。なぜか、私は今でもこの地名を覚えている。そのほかに覚えているのは水戸だけだ。そこは明の遺民朱舜水先生が客死したところである。仙台は小ぢんまりとした町で、冬はひどく冷えこみ、まだ中国人の学生はいなかった。

そして、先日、ローラ・チャン（本名は、陳怡（チェン・イー））が出演したテレビ番組をたまたま見た。ああ、あの子だ。好きな日本語として、「接着剤」、「生粋」、「天真爛漫」、「中途半端」を挙げたあの子だ。小さな「っ」の入る音の言葉が中国語にはないため、それが新鮮で気持ちいい発音だと言ったあの子だ。中国でスカウトされ来日したかわいい女の子のことである。

二十二年の歳月が経っても「日暮里」という地名をはっきりと思い出した鲁迅も、「接着剤」などの発音に興味を示した今風の女の子ローラ・チャンも、おそらく最初に言葉の響きから入って外国語としての日本語を覚えていただろう。今から考えると、日本語を習い始めた頃の私が「もも」「すもも」をすぐに覚えたのも、音の響きに導かれたのである。しかし、例外もある。例えば、「一期一会（いちごいちえ）」という四字熟語が好きな日本語の一つとなったのは、一度読み方を間違えた恥ずかしい経験と、日本での暮らしのなかで体得したこの言葉の奥深さによるものである。

日本に来たばかりのとき、日本文化を知る一環として茶道の稽古に通っていた。茶道というと、堅苦しく座り、お椀をクルクル回してお茶を飲むものだと最初は思っていたが、数回の稽古を終え「和のこころ」を体験した結果、茶道は単に湯を沸かし、お茶を点て、お茶を振舞う行為だけでなく、建築、美術、宗教を融合させた、日本が世界に誇れる総合芸術であることが少しずつわかるような気がしてきた。

一回目の稽古で、茶道の先生から「一期一会」という四文字の書かれた和紙を見せられた。私は自信満々に「いっきいっかい」と大声で読んだが、先生は微笑みながら「いちごいちえ」と振り仮名をつけてくれた。なぜ普通の音読みではなく、このような変な読み方をするのか、そして、この言葉はどういう意味なのか、と私はすぐに質問をした。先生が淡々と説明してくれた言葉を今でもはっきりと覚えている。そもそも「一期」も「一会」も仏教用語であるため、特別な読み方をするわけである。また、「一期一会」とは、茶会に臨む際に、その機会は一生に一度のものと心得て、主客ともに互いに誠意を尽くせ、すなわち、一生に一度限りの出会いを大切にしろ、という意味なのである、という。しかし、茶会では何度も同じ人と会う機会があるのではないか、そうでしたら「一期一会」ではないはずだろう、と私は首を傾げ、さらに質問をした。「いい質問

だね」と先生は褒めてくれた後、落ち着いた口調で話をさらに続けた。たとえ同じ顔ぶれで何回も茶会を開いたとしても、その茶事を行なうときの天気や露地の景色、お茶の道具などが全部同じというわけではないし、人生は無常かつ老少不定であり、このような世の中で、出会いがある一方、いつ別れのときがくるかもしれない。今日の茶会は決して繰り返すことのない茶会であることを肝に銘じ、主客ともに真剣な気持ちで対処すべきなのではないだろうか。このように先生は今の席しかないという気持ちで相手と接する生き方を教えてくれた。お茶を飲むのに、なぜこれだけ煩瑣な礼法にこだわらなければならないのか、という茶道に対する私の最初の疑問も、次第に解けるようになった。「一期一会」であるからこそ、礼儀作法にのっとりながら、主人の「客をもてなす気持ち」と客の「感謝の気持ち」を表す「礼」という動作をまるで一生分行なうかのように繰り返していくわけである。

茶道が大成したのは戦国時代である。そして、激動の幕末を生きた井伊直弼といえ、まず思い出すのは桜田門外の変（1860年）で暗殺された人物だということだろう。しかし、彼は同時に「一期一会」という言葉を世に広げた人物でもあった。殺伐とした時代にあって、木々に囲まれた四畳半の簡素な茶室の中で、社交の場として茶会が催されていた。茶会で出会った人々は、まるで世間の雑事や煩悩を忘れさせる桃源郷のような空間の中で、至福のひと時を過ごしていた。茶室の「内」と「外」の激しいコントラストが世間の無常を一層目立たせたからこそ、茶会における主客のあり方、作法の美しい形、道具に込めた美意識が、このただ一度の茶会のもてなしに凝縮された。そこに豪勢なもてなしはないが、あったのは幽玄の美への追求と、出会いを大切にする「一期一会」の心なのである。



金沢・兼六園の茶室

日常の暮らしも「一期一会」である。春は花見、夏は花火大会、秋は紅葉狩り、冬は雪祭り。なぜ季節の変化を追う形でそうしなければならないのか、と最初は不思議に思ったことがあるが、日本で長く暮らした結果、首を長くして季節ごとのイベントを待つ一員に加わった。日本の四季折々の自然、伝統的な美しさを大切にすることにも、その時にしかないもの、見た瞬間のときめきと感動を大切にすることにも、「一期一会」の精神が取り入れられている。

人生は旅である。また、人生は「一期一会」でもある。旅のなかで一瞬一瞬出会う新しい風景を愛おしむように、毎日会う人とも「一期一会」の覚悟で向かい合えるなら、どれほどよいことだろうか。良い友と出会うこと、良い先生と出会うこと、良い大学で学ぶこと……一つ一つの出会いは、それぞれがかけがえない一度きりのめぐり合いであり、人生はまさしくこのような数々の出会いを通じて成長してゆく過程なのである。多くの出会いのなか、見過ごしたり、軽く受け流したりしたものもあるかもしれないが、「一期一会」の心構えは「ただの一会い」を「一生の出会い」に変える力があるから、限りある出会いを大事にしていかなければならない。

「藤野先生」は、こういった人間の出会いや影響というものを、深く考えさせられる作品である。「藤野先生」をベースに、東北大学医学部前身の仙台医学専門学校に留学していた頃の魯迅を、東北の一老医師であり、当時の魯迅の親友が語るという設定で、藤野先生・私・周君（魯迅の本名、周樹人）らの純粋な対人関係を描いたのが、太宰治（1909 - 48）の『惜別』（1943年）である。この「惜別」という言葉は、仙台時代の恩師の藤野巖九郎（1874 - 1945）が最後に魯迅に渡した写真の裏書である。二十年ほどの歳月が経ったにもかかわらず、藤野先生に対する感謝の気持ちは魯迅のなかでずっと変わらなかったのである。

なぜか、私は今もって事あるごとに先生のことを思い出すのである。私が師と仰ぐ人のなかでも、先生は私が大きな感銘を受け、大きな励ましをあたえられた人の一人である。私はよく思うのだが、先生の私に対する熱い期待と、倦むことのなかった指導とは、小にしては、中国のため、つまり中国に新しい医学が生まれることを希望してのことであり、大にしては学術のため、つまり新しい医学が中国に伝わることを希望してのことであった。先生の名は決して多くの人に知ら

れている訳ではないが、先生は、私の眼のなかで、私の心のなかで偉大である。先生が手を入れてくださったノートは、三冊の合本にして、永久の記念として保存してあった。ところが不幸にして七年前の転居の際、途中で本をいれた箱が一つこわれて中身の半分ほどが紛失した。そして、折悪しくこのノートもそのなかにはいつていたのである。（中略）ただ先生の写真だけは今でも私の北京の寓居の東側の壁、机の正面にかかっている。いつも夜になって疲れが出、ひと休みしようかと思うとき、顔を上げて、灯りの中の先生の浅黒い痩せ形の顔が、今にもあの抑揚のある口調で話しかけてきそうになるのを見ると、私は俄然良心に目覚め、勇気が満ちてくるのを覚える。そこで、やおらたばこに火をつけ、「正人君子」の輩の憎悪の的となっている文章を書きつぐのである。

（出典：「藤野先生」『魯迅全集』3）



仙台・東北大学図書館の玄関入口



藤野先生が魯迅に贈った写真

もし魯迅が藤野先生に出会わなかったなら、留学生活や日本の認識がどのようなものになったのであろうか。日本に留学しているわれわれもきっと様々な面で

藤野先生のような素敵なお恩師、友人、人との出会いに恵まれ、それがあったからこそそれぞれが今ここに在るわけである。

春は一年の節目であり、出会いと別れの季節でもある。今年の卒業ソングランキングで一位を占めたのがミオロメンの「3月9日」である。もともとメンバー三人の共通の友人の結婚記念日を祝うために作られたこの歌ではあるが、その歌詞が、私の心に響いた。

新たな世界の入口に立ち
気づいたことは一人じゃないってこと

上手くはいかぬ事もあるけれど
天を仰げばそれさえ小さくて

瞳を閉じればあなたが
まぶたのうらに在ること
どれほど強くなれたでしょう
あなたにとって私もそうでありたい

「一期一会」の気構えを持ち、自分の輝き、そして大切な人との絆を信じて、未来へ進もうではないか。

2010 年度渥美奨学生の自己紹介

- チャイトンディー・プラチャッポン 「僧侶として、研究者として」 ---- 48
- 崔 禎恩 「文化財の保存のために」 ---- 49
- キャアコプチャイ・スィラッサナン 「目標は母校での日本語講師」 ---- 50
- 金 囧泰 「平和の道を共に歩くことを願って」 ---- 51
- 李 賢凡 「材料工学分野—世界の日本で」 ---- 52
- 李 軍 「魅力溢れる漢字世界への旅」 ---- 53
- 盧 亮 「父の言葉に励まされて」 ---- 54
- マギッド・イヴゲニ 「レスキュー・ロボットの経路検索アルゴリズム」 ---- 55
- ミヤ・ドゥイ・ロスティカ 「インドネシアに新しい女子教育を」 ---- 56
- ヴィグル・マティアス 「鍼灸・東洋医学・医学史に取り組む」 ---- 57
- 王 昕 「総合的に精通した医療技術者をめざして」 ---- 58
- 尹 鈺喜 「自立できない若者のために」 ---- 59

僧侶として、研究者として

チャイトンディー プラチャッポン
Chaitongdi Phrachatpong



出身国：タイ

在籍大学：東洋大学大学院 文学研究科仏教学専攻

博士論文テーマ：世間灯明精要の研究

私は幼い頃から、「自分は一体何のために生まれたのか。人生の本当の目的は何なのか。」といった疑問を抱いていましたが、それに対する回答は普通に生活をする中では、なかなか見つけることが出来ませんでした。しかし、12年前に、短期出家コースに参加し、実践修行を続ける内に、その回答を見つけることができました。それは、「私たち人間はたくさんの良い事をするために生まれてきた」という事であり、さらに「良い事が満たされれば、生・老・病・死などの苦しみから完全に離れ、人生の本当の目標という『涅槃』に達することができる」という事でした。この回答は、私の人生に大きな影響をもたらしたのです。当初は、3ヶ月間のコースが終了する時点で還俗しようと考えていましたが、もっと仏教の教えを深く理解したいと思うようになり、出家生活を続けようと思いを決めました。

僧侶として、瞑想修行の実践に専念するほか、パーリ三蔵経を主体とした南方仏教教理も学びました。私が所属する寺院は仏教大学を設立する準備を進めており、将来的には僧侶や一般の人々への教育を計画しています。私は教員候補として、9年前に日本に派遣され、日本語の習得と大学で学問的仏教を学ぶ機会に恵まれました。留学先を日本に決めた最大の理由は、日本の仏教の研究レベルが世界でも高水準であり、優秀な仏教学者、研究者を輩出し、豊富な文献資料や研究材料並びに設備が充実しているからです。

日本に留学したばかりの頃、漢字に馴染みのない国に生まれた私にとっては、日本語の習得がとても困難でした。しかし、毎日努力を積み重ね、何とか壁を乗り越えることができました。現在、私は東洋大学大学院博士後期課程において研究を行っています。初期仏教及びインド仏教を専門としていますが、仏教経典全体を理解する

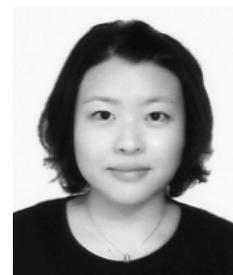
ために、パーリ語やサンスクリット語、仏教漢文、チベット語も学習してきました。

タイの仏教学では、パーリ経典のみを使用して研究を行っており、その註釈書はもとより、復註釈書にまで深まっています。しかし、日本へ留学したことで、インド仏教を研究するためには、パーリ経典以外の他の言語で書かれた重要な経典が現存しているということが分かりました。帰国後、仏教大学教員としてタイ仏教学界が、少しでもパーリ経典のみならず、漢訳やサンスクリット経典などにも目を向けて研究がなされていくように、力を尽くそうと考えています。

また現在、タイの社会は激しく変動を続けています。そのため、人々の心が不安定となり、犯罪や家庭崩壊、麻薬や不倫など様々な社会問題が起こっているのが現状です。私はその根本にある原因は、人々の心に道徳が欠けていることにあると思っています。それらの社会問題を解決する一番良い方法は、やはり人々の心に道徳を植え付けてあげることだと思います。そのため、日本で学んだことを生かし、説法や著作活動などを通して人々を精神面から支え、社会が平和になっていくために貢献しなければならないと思っています。

文化財の保存のために

チェ ジョンウン
崔 禎恩



出身国：韓国

在籍大学：東京芸術大学大学院 美術研究科文化財保存科学専攻

博士論文テーマ：10～14世紀の朝鮮半島および東アジアの古代青銅の金属組織および銅精錬法の推測

私は文化財保存科学を勉強しています。珍しい専門のお陰で考古学などと勘違いされることも多いですが、この分野の研究は文化財を科学の力で古代材料の特性を把握し、体系された保存方法の確立に役立つことを目的としています。私は母国である朝鮮半島の高麗時代に製作された青銅品に関する研究をしております。日本にまで来て母国の研究をする理由を聞く方が少なくありません。これは日本の先進技術を学びたいことだけでなく、母国を客観的に見たかったためです。

私は子供の頃から旅行の好きな両親のおかげで、異国を旅することができました。大学の時には語学留学にカナダに行きました。この時の経験は私に様々な面で大きな影響を与えてくれました。カナダに行く前にはその旅費を稼ぐために初めて働く大変さに気づきました。カナダに行ってから、自分と肌の色も言葉も生活習慣も違う人々とふれあい、自分が井の中の蛙のような小さな世界観を持った人間であることに気がつきました。カナダ人だけではなく日本人、中国人、ロシア人など様々な国の人々と話しながら、“世界がもっと交流できると楽しいのに…”と思いました。

大学4年生になり、私は文化財保存科学の研究がしたいと思いました。美術を勉強した母の影響で子供の頃から美術品に接する機会が多く、この美しい美術品を科学の力で守りたいと思いました。この頃、韓国ではまだそのような分野の歴史が短く、海外のデータや方法を真似することが多かったのです。韓国の土、空気で生まれた文化財はこの国に合うデータが必要だと思い、本格的な文化財保存科学を勉強したいと思いました。その時期に偶然、日本の先生が書いた本に出会うことができました。そこには文化財を保存する方法が文化財に対する思いとともにぎっしりと書かれていました。文化的なつながり

がある日本なら韓国の文化財に応用することもできると考えたのです。カナダでの経験とこの本との出会いが日本へ留学することを決めるきっかけになりました。

日本に来てもう5年になります。最初の戸惑いが不思議に思うぐらい日本に馴染んでいます。文化財保存科学という特殊な分野で博士課程にも入りました。来年の春にはもう卒業です。この分野の特性上、すぐ定職に着くのは難しいのかもしれませんが、先ず文化財が直接扱える博物館や美術館などの実際の現場で経験を積みたいのです。自分は凄く欲張りなため、海外の学会や技術交換の場に積極的に参加し、積んだ経験を発表し交流していきたいです。自分の研究をさらに広め、将来的には大学で研究と後進の指導をしたいと思います。日本で知り会った友人たちとの関係を深めて、将来的には文化財保存科学の技術交流にも役に立ちたいです。それだけではなく日本で学んだ日本の正しい文化を広げ、韓国人が持っている誤解や固定観念などを変えて行きたいです。これは大学だけではなく、本の執筆を通して日本で感じた日本および韓国人のことを一般の人に伝えたいです。

目標は母校での日本語講師

キャアコップチャイ スイラッサナン
Kiatkobchai Siratsanan



出身国：タイ

在籍大学：学習院大学大学院 人文科学研究科日本語日本文学専攻

博士論文テーマ：現代日本語の「だろう」に関する日本語とタイ語の対照研究

私は、タイのチュラロンコン大学文学部東洋言語学科を卒業しましたが、大学時代には勉強の他にボランティア活動をしていました。ボランティア活動をやってよかったと今でも思っています。私のボランティア活動は、裕福でない村にある学校で様々なアクティビティーを通じて将来について考えてもらったり、自分の村の大切さを知ってもらったりする活動でした。人の力になれる喜びを覚えるとともに、ボランティア活動を通じて様々なことを学びました。人を理解することや諦めないことなどを、子供たちや仲間が教えてくれました。毎回大変で諦めようと何度も思いましたが、毎年欠かさず参加できたのは、そこでしか生まれたい強い絆があったからだと思います。そのお陰で毎日充実した学生生活を過ごすことができました。日本語の勉強もやりがいがある反面、非常に難しく途中で何度も諦めようと思いましたが、周りの方の協力と、ボランティア活動で培われた「やり遂げたい強い意志」があったから、最後まで諦めずに頑張りました。しかし、日本語能力を高めるには生の日本語を肌で覚えることが必要と感じたので、日本に留学することを決心しました。

来日当時は学習院大学人文科学研究科日本語日本文学の研究生でした。最初は小野小町について研究を進めようと思って来ましたが、現代日本語学の授業に出席しているうちに、日本語に魅了され、もっと詳しく知りたくなりました。その頃から日本語に対する考えが変わり、指導教官のお陰で修士課程に進むことができました。修士論文ではタイ人日本語学習者にとって使うのが困難である「だろう」とタイ語の「khon」を中心に対照研究として考察しました。その時は、気になる研究を調べたり、自分の研究を進めたりすることができればそれで満足だと思っていましたが、日に日に研究者だけではなく、指導教官のように難しいことを簡単に説明して理解しても

らえる講師になりたいと思うようになりました。目標は出身大学の講師で、博士号を取得することが必要となりました。

博士号を取得できたら、帰国して大学の講師になりたいです。日本語を教えることはもちろんですが、コミュニケーションをするのに言葉以上に大切なことがあることも伝えたいです。それはその人のことを理解しようとする気持ちです。ただし、異文化なので、自分だけでいくら理解しようと思っても壁があると私は思います。その壁を壊すために、相手の文化や国民の考えを知ることが必要です。今迄経験してきたことを活かして日タイ関係を深める活動に貢献したいと思います。お互い理解し合おうと思える人間を育てることは世界平和に繋がると信じています。

平和の道を共に歩くことを願って

キム キョンテ
金 囿泰

出身国：韓国

在籍大学：高麗大学 / 東京大学（歴史学）専攻

博士論文テーマ：壬辰戦争と講和



私は韓国の慶尚北道浦項で生まれました。浦項は工業都市でしたが、隣の慶州は歴史のある古都でした。私は小さい頃から度々慶州に行き歴史に対する感性を育ててきたと思います。大学進学の際にも韓国の歴史を専攻として選びました。大学入学後、私は初めて韓国を出て海外旅行に挑戦しました。選んだ所は大阪と京都でした。この選択は偶然だったかも知れません。しかし、私は慶州と同じく長い歴史を持っている京都のすがたに感動しました。たぶんこの時から人と人との間の関係、歴史のなかの関係、関係の歴史について注目し始めたと思います。

大学院の修士課程に入学したとき、私の研究テーマは韓国と日本の関係史で、その中でも朝鮮通信使でした。韓日（日韓）関係史のなかでの平和の象徴である朝鮮通信使の研究を通じて現在の平和の契機も作られるのではないかという考えでした。しかし、韓国と日本の歴史を勉強しながら、そして幾度も日本旅行をしながら、韓日間の歴史から発生した葛藤が依然として残っていることに気づきました。その中では真実ではないこともあって、葛藤を生みだすために利用されたこともありました。私は考えを変えて、当時もっとも熱い葛藤の場であって現在も葛藤の代名詞として語られる壬辰戦争【「壬辰倭乱」（韓国）、「文禄・慶長の役」（日本）、「抗倭援朝戦争」（中国）】という場所に直接飛び込んで葛藤解消のきっかけを作ってみようと考えました。

壬辰戦争以後の韓国と日本の講和交渉に対する修士論文をはじめ、いくつかの研究を進めながら私はある限界を感じ、新しい目標を考えるようになりました。壬辰戦争は大きい国際戦争であって、一国史ではなく関係史として述べられるべきでした。一国史から離れた視点のため国家の枠組みから離れた個別主体への注目も必要でし

た。そうするためには朝鮮の史料はもちろん、中国(明国)の史料、日本の史料の収集が必要だと思いました。そのなかでもっとも多く史料が残っていて、また各種の日記、覚書など多様な主体から作られた日本の史料を直接見て、調べなくては私の研究は半分以下のものになってしまうと思いました。「関係史専攻」とどまらず、真の「歴史と現在の関係」のためにも、自分（の研究）を閉じ込めないためにも日本に行くことが必要だと思いました。そして、私は日本留学を決めました。

韓国と日本と中国の関係史としての壬辰戦争史を博士論文として作成して提出した後、私は東アジアの中の葛藤と平和の歴史をより深く勉強したいと思っています。勿論、葛藤の解消と相互共存を目指したいのです。私は政治的な利害関係も偽りもない民間レベルで、韓国と日本と中国の人々がお互いを理解して認めあい、そして平和の道を共に歩くことに歴史学者として役立ちたいと思います。そして、東アジアから全アジア、ひいては全世界の平和のために活動する団体が私が小さくても役割を持つことが私の夢といえば夢です。

材料工学分野—世界一の日本で

イ ヒョンボム
李 賢凡

出身国：韓国

在籍大学：東京工業大学大学院 理工学研究科材料工学専攻

博士論文テーマ：アルミニウム複合材料



私は、韓国で国立全北大学校新素材工学部金属工学科に入学し、修士課程を修了して、現在東京工業大学里&小林研究室で勉強しています。

日本へ来る前に結婚し、今は妻と一緒に日本に住んでいます。妻は韓国で日本文学を専攻していました。また、日本の文化などに強い関心を持っていたため、私と一緒に日本へ来ました。

私は修士1年を終えた後で、ニュージーランドで開かれたICAMP4-2006国際学会で研究成果を発表しました。その後、ニュージーランドのハミルトンにあるワイカト大学で6ヵ月間の共同研究をしました。

外国の生活が初めての私にとって、6ヵ月はとても短く感じました。韓国と異なるさまざまな研究体系や方法などを学び習得したことは、外国で勉強することに対する意欲を持つきっかけになりました。

6ヵ月間の共同研究を終えて、修士論文を準備している際に、私が研究している分野において世界一の技術を持っている日本で勉強したいと考え始めました。

そのような時、東京工業大学大学院材料工学の里先生に私の研究成果を見ていただける機会があり、研究成果の更なる向上、またその応用に対して強い関心を持っていた私に、博士課程への入学を勧めてくださいました。

東京工業大学に入学してから今まで、先生方はとても熱心に指導してくださいました。私が日々努力した甲斐もあり、さまざまな研究成果を得ることができました。これまでの研究結果をPFAM18国際学会やICAA12国際学会で発表します。そして、全ての結果をまとめて学位論文を作成する計画を立てています。

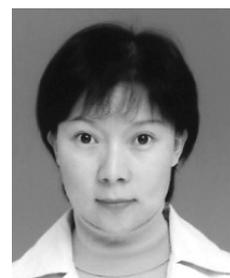
研究以外では、里先生からご推薦をいただき実験 TA

として材料工学部の学生たちを指導しました。初めは日本語が下手で指導が思うようにならず、非常に大変でした。学生たちにより分かりやすく実験内容などを説明するために、日本語の勉強も怠りませんでした。学生たちが私の説明を聞き、実験を理解していくのを見てやりがいを感じ、私が持っている知識を多くの人々と共有したいという気持ちが強くなりました。

したがって、私の分野でより深く広い知識を積み、今後、より多くの人と知識を共有して新しい発見をしていくことを続けたいと思います。

魅力溢れる漢字世界への旅

リ ジュン
李 軍



出身国：中国

在籍大学：早稲田大学大学院 教育学研究科国語教育専攻

博士論文テーマ：高等学校における漢字、語彙単元学習の開発に関する研究

一日中の漢字教育・漢字文化の比較を軸に一

ニーハオ！李軍と申します。この名前を見た瞬間、男性かなあ、強そうな名前だなあと思われる方が多いかと思いますが、ご安心ください、とても優しい性格の持ち主です。両親がなぜこんなに強そうな名前を付けてくれたかについては、機会があれば、お教えします。

私は中国・瀋陽出身の留学生で、早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程国語教育専攻に在籍しています。主に漢字教育を中心とした日本と中国の国語教育の比較研究に取り組んでいます。

小学校の時に姉の影響を受けて、響きの美しい日本語に強く心が惹かれました。中学校に入ってから日本語を学び始め、大学卒業後、瀋陽の高校で念願の日本語教師になり、小学校からの夢がやっと叶いました。その後、より深く日本語の研究を進めたいと考えて、日本への留学を決意しました。

来日後、日中両言語で似ているようで微妙に違う言い回し、たとえば日本語では「比較的簡単」というのに、中国では「比較簡単」というような差異に興味を抱き、福岡教育大学の修士論文では、明治から大正にかけての代表的な文学作品における「的」付き語彙を分析して、中国から伝来した接尾辞「的」の形態・意味・機能の歴史の変遷を明らかにしました。

修士論文に関わるデータ収集の過程において、「的」以外の日中両言語の漢字、漢字語彙にも広く関心を持つようになりました。早稲田大学大学院博士後期課程では、「高等学校における漢字、語彙単元学習の開発に関する研究一日中の漢字教育・漢字文化の比較を軸に一」という研究テーマで、日本の漢字教育に資する新しい指導法の開発の理論研究と実践研究を進めています。

日本では、中国発祥の漢字に多彩な変容を加えて定着させました。字体の面では、ひらがなやカタカナを発明

し、音声の面では、音読みのほかに意味の対応する漢字を大和言葉の音で読ませる訓読みを発明しました。これほど柔軟に漢字文化を受け入れて固有の文化に融合させたのは、世界の中でも日本が最たるものでしょう。日本の漢字文化は中国の古来の漢字文化の面影と日本の言語文化の特質を内包しており、両言語の奥深いつながりと漢字の形成過程に由来する多元性、融合性、柔軟性を持っています。

これまでに、漢字に纏わる興味深い現象を漢字教育の中に取り入れる漢字指導法をいくつか提案してきました。例えば、「身体」「河川」「温暖」のような「同義反復熟語」がなぜ存在しているのか、「眼目」や「生活」といった「同義反復熟語」がなぜ本来の意味と違った抽象的な意味で使われているのか、という問いを発したり、異なる意味の語彙と認識されている「話す」と「放す」「離す」が、「はなす」という大和言葉の持つ「あるものから何かが出てきて遠ざかっていく」という共通根源イメージを共有することを指摘したりして、漢字学習者に漢字文化の奥深さを理解させようと工夫してきました。

博士号取得後は、日本での研究生活や社会活動から学んだことを生かして、再び中国の学校の教壇に立って日本語を教えたいと願っています。日本の研究機関で国語教育の研究を続けるのも日本で学んだことを生かす一つの道ですが、自分の夢を叶えるためには、やはり最終的には中国に戻って、日本語の普及に貢献したいと希望しています。

情報技術の発達が著しい今日では、中国に戻るにしても、また仮に日本に留まることになるにしても、日本語教育および日本における国語教育に関する様々な情報を発信することで、中国をはじめとする国際社会と日本とを繋ぐ役割を果たしていきたいと考えています。

父の言葉に励まされて

ろ りょう
蘆 亮

出身国：中国)

在籍大学：東京工業大学大学院 理工学研究科原子核工学専攻

博士論文テーマ：プラズマ直接入射法を用いたがん治療用の加速器の研究



私は高校卒業後すぐに日本に留学することを決めました。きっかけとなったのは、父に「これからの世界は国際的な視野を持つ人間が必要となり、それは外国に留学して外国で暮らすことによってしか成し得ない」と言われたからです。当時、私の叔母（父の妹）が福岡にある九州大学に留学していました。父は叔母を通して、日本社会の仕組みや、漢字が日本でも通じる事など、日本文化を理解していたので、日本に留学したらすぐに慣れると思って、私に日本留学を薦めました。

国際的な視野を持つ人間になるには、常に相手の立場から考えること、また相手が育った文化を理解することがとても大事だと考えております。例えば日本人は歩く時、また電車の中であまり食事をしません、これは「人に迷惑をかけない」という考えがあるからです。こういった異文化理解のためには、たくさんコミュニケーションをしなければならないと思います。

私は日本に来て以来、勉強に加えて、色々な異文化交流とボランティア活動を行いました。2001年から2年間は、アジアユースロビー合同交流会に参加しました。大学3年の時は2週間、障害児の介護をし、大学4年の時には、1週間、知的障害者の介護をしました。東京工業大学に入学してからは、留学生の合宿や見学会などで通訳をしたり、学園祭で故郷の料理を提供したりして、沢山の交流活動をしました。

今まで、主に異文化交流に関する活動をしてきましたが、研究を進めているうちに、自分の研究を理解してもらうことも必要であることに気がきました。今現在、加速器は人々の生活と離れているため、加速器というものさえ分からない人がたくさんいると思います。初めて会った人に自己紹介するときにも、初めて加速器という言葉聞いたと言われた経験があります。

博士号取得後、普通の人々の生活を向上するため、中国で就職しても日本で就職しても、半導体の生産やがん治療用などの加速器に関する開発研究を続けたいと思っています。研究を続けると同時に、インターネット上の情報公開を含む積極的な研究公開、中・高生を対象としたサイエンス支援活動、加速器に関する技術及び加速器の応用についての紹介など、先端技術の普及活動もしたいと考えています。

また、身近な異文化交流に関心を持っていつも参加し、日中の食文化の交流や、中国語または日本語クラスを開くことなどを通して、中国の文化や、日本で学んだこと体験したことなどを周りの人々に伝えたいと思っています。

日本に留学して以来、沢山の日本の方にお世話になっており、既に日本は二番目の故郷と思い、近隣である日中両国の友好に力を尽くしたいと考えています。

レスキュー・ロボットの経路検索アルゴリズム

マギット イヴギニ
Magid Evgeni



出身国：イスラエル / ロシア

在学大学：筑波大学大学院 システム情報工学研究科 知能機能システム専攻

博士論文テーマ：レスキューロボット ナビゲーション

私は 1975 年 1 月 16 日、ロシア連邦のヴォルゴグラード市で大学教授の長男として生まれました。1982 年から 1992 年まで、ヴォルゴグラードにある英語に重点をおいた第 1 学校で学び、首席で卒業しました。在学中は、英語と数学、歴史の科目に興味を持ち、地区での英語や数学の能力を競う大会で優勝しました。優れた成績を修めた結果、アメリカ合衆国のオハイオ州 DeVillbiss High School の交換留学生として選ばれ、1991 年 10 月から 12 月まで留学しました。アメリカ人家庭にホームステイをしましたので、アメリカの文化を学ぶことができました。1992 年 9 月にヴォルゴグラード工学大学に入学し、工場用ロボットを専攻しましたが、1995 年 7 月に退学しました。それは、工学分野において世界的に有名な Technion という大学で学ぶことを目指してイスラエルへ移住したからです。1995 年 9 月にイスラエルに移り、1996 年 7 月までアルバイトをしながらヘブライ語を学びました。1996 年に Technion に入学し、数学とコンピューターを専攻して、2001 年に卒業しました。学生時代は、貧困家庭の子供に教育支援を行う PERAH プログラムというボランティア活動をしていました。週に 4 時間英語を教えたり、困った境遇に置かれた子供の面倒をみたりして、お兄さんのような役割を果たしました。また、貧困層のお年寄りやハンディキャップの人達を支援する SHAHAK プログラムでは、日常生活で手助けが必要なお年寄り達を手伝ったり、お世話をしたりしました。

大学で勉強するうちに日本の文化や歴史、言語など、日本に関するすべてに興味をもち、熱心に学ぶようになりました。また、柔道にとっても興味をもち、大学の柔道チームのメンバーになりました。その時から日本への関心が一層高まり、日本に行くということが私の夢になりました。2001 年 10 月に同大学の大学院（修士課程）の応用数学研究科に進学し、1 年間コンピュータービジョ

ンというテーマで研究を行い、国際学会で発表しました。しかし、その後、日本へ行くために、研究テーマを自律移動ロボットのナビゲーションに変更しました。

2003 年 9 月から 2004 年 3 月まで筑波大学のシステム情報工学研究科、知能ロボット研究室で交換留学研究生として研究をしました。この留学により、日本が想像以上に優れた国であると実感し、日本の平和な雰囲気や日本人の勤勉さに好感を持ち、日本への関心が更に高まりました。この時、日本人の友達をたくさん作り、教授たちからこの知能ロボット研究室で勉強するよう勧められました。家族をはじめ、周囲は日本への留学には反対でしたが、自分の夢を実現させるために、博士課程に進学するための文部省の奨学金を獲得しました。この間、イスラエルでは修士課程で学びながら Technion 大学と短大 (ORT Hermelin College of Engineering) にて、ロボットという科目を、日本の豊富な研究、事例を挙げながら教えました。2006 年 4 月、イスラエルでの修士課程を終え、日本の博士学位を取得するためにまず研究生として留学し、2007 年 4 月から筑波大学大学院の博士課程に入学しました。日本の社会を一層深く理解するために、私の研究ではあまり要求されない日本語を留学センターで勉強し続けています。

博士課程終了後は、日本企業の特徴やその働きを理解するためにも、是非、日本の大企業に入りたいと考えています。そして数年後には帰国し、同じ企業のイスラエルかロシアの支社に勤務することができれば理想的です。日本で学んだことを活かし、特に日本の平和な社会や文化を伝える事に力を注ぎたいと思います。

インドネシアに新しい女子教育を

ミヤ ドウイ ロスティカ
Mya Dwi Rostika



出身国：インドネシア

在籍大学：国土舘大学大学院 政治学研究科政治学専攻

博士論文テーマ：インドネシアの国民形成期におけるカルティニの女子教育観とその政治的役割

実は、私の日本留学は2度目です。高校時代、インドネシアのジャワ島中部地域で最優秀学生に選ばれ、国際交流基金のプログラムで1年間広島県立高校で学ぶ機会を得ました。そして、男女や貧富、宗教や民族の間に全く差別がない自由さと、それにもかかわらず教育レベルの高いことに私は大きな感銘を受けました。とくに女子教育はインドネシアでは、非常に遅れています。母国では今でも女性は男性よりも下位にあると社会的に見なされているため、女性には高い教育は必要ないという考え方が支配的です。帰国後、大学で学習する内に私はインドネシアの女子教育の発展について真剣に考えるようになりました。ちょうどその頃、母国のガジャマダ大学で行われた国際交流セミナーで戸津先生と出会い、再び日本留学の機会に恵まれました。

修士課程では、インドネシアの女子教育の先駆者であるカルティニと日本の女子教育の先駆者である津田梅子との比較を中心に研究を行いました。インドネシアでは女性のシンボリック的存在となっているカルティニは津田梅子と同時代の人ですが、インドネシアの独立に果たした役割や、インドネシアで最初の女学校を設立して女子教育の発展に努力を傾注してきたことはあまり知られていません。

博士課程では、カルティニと津田梅子の比較研究を継続し、女子教育の先駆者であるこの両者を比較・分析することによって、インドネシアにおけるカルティニの再評価をすると共に、独立に果たした彼女の政治的役割を新しい視点から明らかにすることを目指して研究を行っています。

博士号取得後は母国の大学で教職に付くとともに、日本での研究を基盤として宗教や民族を超えた新しいタイプの国際的な女子高校を設立したいと決意しています。

もちろん私の力だけではとても無理なのですが、私が指導を受けている先生方や日本で知り合った人たちもこの夢の実現と一緒に頑張ろうと協力を申し出てくれています。そのためにも私は、博士号の取得に全力を注ぎつもりです。

研究以外の面では、国際交流やボランティア活動などで私にできることがあればと考えています。そのひとつの活動は、2003年から、所属している研究室の学生と一緒に毎年2回ジョグジャカルタの障害児学校に日本では不用となった子供用車椅子を届ける交流事業を続けています。その数はすでに50台近くになっています。インドネシアでは子供の障害者用の車椅子が全く足りないため、日本の可愛い色々なタイプの子供用車椅子を手に入れた障害児たちは大喜びで私たちを歓迎してくれます。子供用車椅子を見るために、インドネシアの各地から見学者が訪れています。

これからも研究と社会活動の両面に全力を注いで、インドネシアと日本の交流に貢献したいと考えています。

鍼灸・東洋医学・医学史に取り組む

マティアス ヴィグル
Mathias Vigouroux



出身国：フランス

在籍大学：二松学舎大学大学院 文学研究科中国学専攻

博士論文テーマ：江戸時代における鍼灸医学—その形成・普及・伝授を中心に—

九年前にフランスの大学に入学した時、学部の専門で日本語の勉強を始めました。二年間日本語を勉強した後、一年間早稲田大学に留学しました。そこで、母国でいくら外国語を勉強しても、現地で留学してみないと上達するのは難しく、努力はなかなか報われないと初めて悟りました。留学が終わった後、フランスに帰国し、日本学を専門として修士課程に入りました。専門学校で鍼灸医学を勉強した時から、アジアや日本の東洋医学について色々な本も読み、医学史について関心が生まれました。特に明治以前の日本医学史に興味深かったので、江戸時代中期に活躍した有名な漢方医の吉益東の業績について修士論文を書きました。フランスでは日本医学史についての資料が全くなく、この分野を研究する学者もいないので、修士論文を書いた時に大変苦労したので、ヨーロッパの日本学研究の分野でもほとんど未開拓である日本医学史は現地で研究するのが何よりも大事だということが分かりました。そこで、博士課程に進むならフランスよりも日本でやった方が意味があると思い、留学することになりました。最初の一年半位は日本の国費留学研究生として、立教大学文学部日本文学科の渡辺憲司先生の下で江戸時代学の手解きを受けながら、医学史の研究にも着手しました。

二松学舎大学に入った理由は儒学と医学を中心に日本漢文学を研究している町泉寿郎先生が私の分野と最も近く、町先生の下で江戸時代学を深く研究し、博士論文を書きたいと思ったからです。日本の東洋医学の歴史を見ると、その伝来、日中間における医学思想の流通など、日本と中国の関わりが非常に深く、日本医学の研究をしても両国の知識が必要だということがわかりました。しかし、今までは日本学を第一にしていたから、中国についての知識が浅くて勉強不足な点が多かったので、自分の研究を深めるために、中国学を専攻しました。そ

して、将来自分の専門分野の範囲を広めていくために、日本医学史に関する中国語で書いた文献を読み、同じ研究をしている中国人学者とやりとりができるように、中国語の勉強も必要だと思い、半年間北京大学へ短期留学をしました。北京大学では中国語の勉強をしながら、自分の研究についての資料調査を行い、資料を収集し、論文も書き続けています。

私は二松学舎大学を卒業した後、帰国して、フランスかヨーロッパにある国の大学に勤めたいと考えています。そこで、日本のことを学生に教えながら、自分の研究も続け、アジアにおける医学の交流、また日本の医学史の研究をヨーロッパでも広めたいと思っています。私の研究分野はヨーロッパの日本学研究の分野でもほとんど未開拓の分野ですから、この分野は研究をする価値が大いにあると考えています。学者の道を歩んでいきたいと考えている私は、日本の有名な大学に留学し、日本人の先生方から学ぶことができたのは素晴らしい機会だと思いますから、将来日本で学んだことを、日本学を専門にしているフランスの学生にも伝えたいと思います。

総合的に精通した医療技術者をめざして

おう しん
王 昕

出身国：中国

在籍大学：東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科先端医療開発学専攻

博士論文テーマ：揮発性バイオマーカー用バイオセンサと医療応用に関する研究



私は 1999 年 7 月に瀋陽第四中学を卒業後大連医科大学の臨床医学系に入学し、基礎科目の解剖学を始め、臨床医学と繋がる診断学、内科学や外科学などの医学専門授業を受けました。

医学部時代に積極的に取り組んだのは、顕微鏡を用いた細胞の形態観察実験やマウスやラットなどの動物実験でした。医学部 5 年の間に臨床診察や治療のための様々な技能を身につけることができました。私の特徴は誰よりも負けず嫌いなことです。大学 3 年生の時、大学日本語試験 4 級(日本語能力試験 2 級に相当)に合格し、また、独学で英語を 3 ヶ月間勉強して、大学英語試験 4 級(大学英検 2 級に相当)に合格することができたので、人一倍の努力家と自負しております。目標が達成するまでは絶対に諦めない姿勢でこれまで勉強に努めてきました。

2004 年 7 月に大連医科大学を卒業し、10 月に日本に来日しました。1 年半、日本語学校に通い日本語の勉強をした後、2006 年 4 月に東京医科歯科大学に入学し、1 年間の専攻生を経て、2007 年 4 月に医歯学総合研究科博士課程に入学しました。

1. 日本留学を決めた理由

中学生頃、日本の病院を舞台に医療の現状を真摯に描いたドラマを見ました。このドラマを通して初めて日本の医療現場の話を知りました。ドラマなので現実の再現ではありませんが、外科医師は自分と戦っており、手術の時間を短縮させ、数多くの患者を救った技量に感銘を受けました。このドラマがきっかけとなり、私は技量の優れた外科医師になりたいと思い、医学部を目指し、高校の 3 年間で頑張り続けた結果、1999 年 7 月に大連医科大学の臨床医学系の日本語クラスに合格することができました。大学に入学後、専門授業はすべて日本語で行った為、ますます日本の言葉や文化に興味を持つようになりました。日本は世界でも最先端の科学技術と医療技術

を有しており、日本へ行って先端技術を身につけ、数多くの患者を救いたいと思うようになり、卒業後に日本へ留学することを決心しました。日本留学は私にとっては新しい人生の布石として将来大変重要な経験になると思っております。

2. 博士号取得後の進路希望

来日してから 5 年になった私は日本の研究開発への関心や技術レベルの高さに感銘を受け、日本で研究活動を続けていきたいと考えております。しかし、外国人の私は医者として日本の医療現場で患者を救うことがなかなか難しいのは現実です。数多くの患者を救いたい夢を実現するには研究者になることが重要であると考えております。より医療現場に近い医療機構や大学の研究所において、医学部で取り組んだ学問を生かし、工学・情報科学などの技術との高度な融合領域における研究を基盤に、先進福祉社会と健康増進を支えるコンソーシアムの形成を牽引できる研究者になりたいです。社会、医療、患者等のそれぞれのニーズと工学・情報科学などの技術に総合的に精通した医療技術者として、医療現場のニーズに応えるための研究・開発を、医療に留まらず、福祉と健康増進に関する、人にやさしい新しい技術の創成や国際競争力の高い新規知的産業の創出に繋がられる人材になりたいと考えております。

自立できない若者のために

ユン ジンヒ
尹 鈺喜



出身国：韓国

在籍大学：お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科ジェンダー学際研究専攻
博士論文テーマ：経済不況下における若者の自立をめぐる家族の困難経験に関する家族社会学的研究

1. 日本留学を決めた理由

私が日本留学を決めた理由は、私自身が自立したいという気持ちを強く持っていたためである。

私の兄は、大学を卒業した後しばらくは働いていたが、突然仕事を辞めてしまった上に、対人関係を拒否し、家から出られない「ひきこもり」となってしまった。こうした兄は両親にとっての最大の悩みであった。また私も兄を否定し、兄のようになってはいけぬ、自立しなければならないと強く思っていた。しかし私自身も大学進学のための授業料を親に出してもらうなど、経済的な依存という面では兄と同じだという焦燥感を持っていた。

このような悩みに直面していた大学3年の頃、国際通貨危機（IMF）の影響で韓国社会は深刻な不況に陥った。そのため父が勤めていた会社の経営も苦しくなり、親に経済的に依存することは難しくなった。私はこの状況を自分のチャンスだと考え、大学の授業料は自分で払うようになった。そして新卒就職が困難という面もあったが、日本の大学院でキャリアアップし、不況を克服した韓国で就職するために日本に留学したのである。

2. 日本留学後の経験と現在の研究

ところが日本に留学し、大学院で社会学を学ぶことで、私のそれまでの自立観、家族観は激変した。留学前の私は、若者は経済的に自立しなければならないと強く考えており、自立できない若者は意志の弱さのためであると捉えていた。しかし日本で学んだ若者の自立に関する社会的な研究は、自立できない若者について、それを個人的な問題ではなく、社会的な問題へと転換する視座を私に与えてくれた。

しかしそうした研究に同意しつつも、実際に自立の困難に直面している若者とその家族を知っている私は、違和感も抱いていた。それは若者の自立に関する社会的な研究が、政治経済的な影響を強調する一方で、当事者

家族の苦悩やリアリティーを無視していることであった。それゆえ私は、自立できない若者についてその政治経済的な要因を重視しつつも、文化的側面、そして家族内部での相互作用にも注意を払った、当事者にとってもより説得的な研究を展開し、当事者支援にもつながる若者の自立に関する家族の困難経験についての博士論文を執筆中なのである。

3. 博士号取得後について

現在は韓国のみを対象にした研究であるが、博士号取得後は韓国に限定せず日本を含めた諸外国での若者の自立に関する困難とその支援のための研究を展開したい。そこで重視するのは、研究対象の国の文化的な特性である。すでに私の研究では韓国の若者の自立をめぐる家族の困難において、韓国の文化的な特性が強く影響を与えていることが明らかになっている。これは若者の自立は単に政治経済的な側面だけではなく、その国の文化的な側面をも理解しなければ解決できない問題であることを示している。

と同時に、若者の自立をめぐる苦しむ当事者やその家族は、国ごとの文化的な差異を越えて連帯できる可能性があるとは私は考える。こうした若者の自立のための国際的なネットワーク形成に貢献することが私の夢であり、その活動を通じて社会の「調和ある発展」を実現したいと考えている。

2009 年度

海外学会派遣プログラム参加報告

ロハス オスカル ポラス 「中米諸国の海難事故を減ずる対策の普及活動」 ---- 61

塩原 フローニ フリデリケ 「エジプト・ケニア研修旅行」 ---- 63

ガンバガナ 「アメリカにおける資料発掘」 ---- 66

包 聯群 「台湾での国際会議参加報告」 ---- 67

マリア エレナ ティシ 「目的の多い日本への旅」 ---- 70

中米諸国の海難事故を減ずる対策の普及活動

ロハス オスカル ポラス

Rojas Oscar Porras

博士（応用環境システム学）東京海洋大学

コスタリカ大学太平洋岸校副学長（在コスタリカ、Puntarenas）

2007 年度奨学生

私は東京海洋大学大学院で「中米地域における海難事故での死者および行方不明者数削減策の研究」をした。海に出る為には世界中の国は必ず IMO（国際海事機関）に参加しなくてはならない。私の調査はその中の特に 2 つの条約、SOLAS（海上における人命の安全のための国際条約）と STCW（船員の訓練、資格証明および当直維持の基準に関する国際条約）に関係していた。

2008 年にコスタリカへ帰国し、渥美国際交流財団の海外学会派遣プログラム制度の利用の許可を頂き、研究結果とこれからの対策を留学前に調査に行った国々へ報告に行った。

留学前の調査はコスタリカ、パナマ、グアテマラ、エルサルバドル、ニカラグアだったが、今回はホンジュラスにも行った。

まず、出発前に、各国の IMO を担当している組織 { 運輸省の Maritime Authority (MA) } に連絡し各国の法律の状態を調べた（表 1）。コスタリカとパナマは軍隊が無いので海上保安庁が海を守っている。他の国は海軍が守っている。

実際に中米地域（CAR）の全ての国で説明する為に各国の MA だけでなく、海軍と海事教育学校にまで行った。コスタリカを除く海外へは、合計 6 回の訪問をした。

2009 年 5 月に 3 日間、まずニカラグアからスタートした。7 月にパナマへ 1 週間、12 月にパナマに 8 日間、他の国に 10 日間（グアテマラ 2 日間、エルサルバドル 3 日間、ホンジュラス 2 日間、ニカラグア 3 日間）。2010 年 1 月にパナマに 5 日間、2 月に他の国に 8 日間（グアテマラ 2 日間、エルサルバドル 2 日間、ホンジュラス 2 日間、ニカラグア 2 日間）訪問した。

パナマへは空路を利用したが、他の国はコスタリカから一番遠いグアテマラに空路で入り、その後は陸路で移動した。各国間で国際バスが走っている。夜はバス会社

の近くのホテルで過ごした。小さい国々ではあるが隣の国までは平均 8 時間かかる。グアテマラでは空港で海軍の防弾車が迎えに来てくれた。強盗、誘拐を警戒したためだった。

博士論文執筆時（2007 年 8 月）に中米各国の MA と色々な相談で連絡を取り合っていた。2008 年 3 月の卒業時の IMO の国際条約の状況が次の表である。

表 1 中米各国の IMO の国際条約

2007 年の状況

	GU	ES	HO	NI	CR	PN
SOLAS	O	---	O	---	---	O
STCW	O	---	O	---	---	O

(O) = ある ; (---) = ない。

GU= グアテマラ, ES= エルサルバドル, HO= ホンジュラス, NI= ニカラグア, CR= コスタリカ, PN= パナマ

自国へ戻ってから MA への説明と助言で変わった現在の状況が次の表である。

表 2 中米の各国の IMO の国際条約

2010 年の状態

	GU	ES	HO	NI	CR	PA
SOLAS	O	---	O	O	▲	O
STCW	O	▲	O	O	---	O

(O) = ある ; (---) = ない ▲ = 作業中

ニカラグアは両方の国際条約に入った。

コスタリカは SOLAS に入ったが、国の予算不足で発行されていないので使えない。その上、STCW の 3 部分が IMO から正式なスペイン語訳が届いていないので、ま

だ完了していない。

エルサルバドルは STCW の手続きを始めた。SOLAS はまだ未着手である。

STCW の条約では 4 つの授業が必要である。エルサルバドル以外は中米各国の船員のために国内で法律が作られた。この法律では漁業労働者の授業は特別に国の予算から出すように規定している。コスタリカの場合は MA の許可により国立職業訓練校で無料で受けられる。

他の国では MA が授業を行っている。

論文のテーマで発見した問題点

- 1) 気象情報の伝達体制不備
- 2) 航海と救命に関する教育の不足
- 3) 船舶検査制度の不備
- 4) 救助体制の不備
- 5) 海難事故記録制度の不備

解決のために次の対策を提案した。

- 1) AM ラジオによる海上天気予報、すべての漁船に対する出漁前の天気予報紙の配布。
- 2) 乗組員全員に対する IMO (国際海事機関) のサバイバルモデルコース授業の実施。
- 3) undecked ship を含む全ての船舶についての船体目視検査および救命設備の点検実施。
- 4) 相互救助のために漁船団でのグループ操業。
- 5) 出入港時の届け出制度 (書類提出) による事故把握。

CAR に提案した対策の調査してからの進捗状況

対策	GU	ES	HO	NI	CR	PN
1) 気象	---	---	---	---	▲	---
2) モデルコース	0	---	0	0	0	0
3) 検査	0	---	0	0	0	0
4) 相互救助	▲	---	▲	▲	▲	▲
5) 書類提出	▲	---	▲	▲	▲	▲

渥美財団のおかげでこの以上の様な結果を出すことが出来た。これで終わりではなく、まだまだこれから続くが、海と人命を守るためにたゆまぬ努力をしていきたい。



写真1：パナマガトゥン湖で



写真2：パナマシティ。数年の間で巨大ビル群が出現した。麻薬の資金洗浄か？



写真3：パナマシティのアメリカ橋。パナマ運河太平洋側入口近く。この橋で二分された国をつないでいる。右奥に国立パナマ海事大学がある。元米軍基地



写真4：パナマ運河の水門が開く所

エジプト・ケニア研修旅行

塩原 フローニ フリデリケ

Shiohara Vroni Friederike

博士（文化財保存学） 東京芸術大学

（株）資生堂

2008 年度奨学生

エジプト

エジプトでは、JICA の中村三樹男氏が、ドライバーと共にカイロのホテルに迎えに来てくださいました。そして直接 JICA のエジプト考古学博物館修復協力センターにいきました。



見学をした後はギザのピラミッドを回りました。文化財保存の関係で、秋からはピラミッド周辺に車では入れなくなるそうですが、今でもピラミッドの入場はとても厳しく、一日 100 名までしか入ることができません。

そんな厳しい入場制限の中、ピラミッドを特別案内していただきました。中での写真撮影は禁止ですが、渥美財団のために特別に映像を撮らせて頂きました。数年前のカイロでのオペラハウスの建設のときに、鹿島建設に協力してもらったので、中村三樹男氏は今後の JICA

プロジェクトとしてエジプト考古学博物館に新しい建物を建てる時も、鹿島建設に頼みたいとの希望があるそうです。ピラミッド、ラムセスの船、スフィンクスの見学の後にビザンチウム博物館を案内してくださいました。そこで今後の新博物館のディスプレイや保存の仕方について討論しました。

ケニア

その夜に空港へ移動し、翌朝、ケニア・ナイロビに着きました。空港にはキメフ・ジョンソン氏が迎えに来てくださいました。ジョンソン氏はケニア国立博物館の研究員で、20 年間サファリドライバーの会社を運営しながら、同時に国立博物館のために鳥や猫科の動物を研究していくつかの論文と辞典を出したそうです。そのジョンソン氏にケニアを案内して頂きました。空港から直接レーク・ナクルに移動し、国立公園では、フラミンゴやライオン、そしてあまり見られない豹を見ました。ライオンは車の直ぐ近くまで来るので、とても怖かったです。

次の日はマサイマラ国立公園に行ったのですが、砂利道を 6 時間かけて行ったので、かなり大変でした。行くだけで疲れてしまい、着いたら二時間くらい寝ました。午後はサファリドライブで国立公園を回りました。動植物の生態に精通しているジョンソン氏の案内のおかげで、二日間でほぼ全種類の動物を見ることができました。翌日は国立公園の中にあるマサイ族の村に行きました。着いて、車を降りたら十数名のマサイ戦士が挨拶に来てくださいました。首領は 90 歳で、村の外の木陰に座っていて、首から目薬のプラスチックビンを提げていて、かぎタバコも携帯していました。31 歳の息子、オレ・

キオク・レマイアン氏が村を案内してくださり、みんなでマサイ戦士が「ライオンを殺す前のおどり」を踊ってくださいました。マサイ族では、一番高くジャンプの出来る男性が女性に人気があるので、皆さんがジャンプをしてくださいました。



村に入って驚いたことは、まず地面には全て牛の糞便がかぶせられていることです。それなりに匂いがしています。そして、蠅が何処にもいます。子どもの目や鼻、そして傷の近くにもいました。事前にそういう状況を聞いていたので、私は消毒剤をお土産に持って行きました。家の建て方は、日本の伝統家屋と共通点が見られましたが、泥の代わりに糞便を使用していました。中に入ったら真っ暗で、窓は小さかったです。

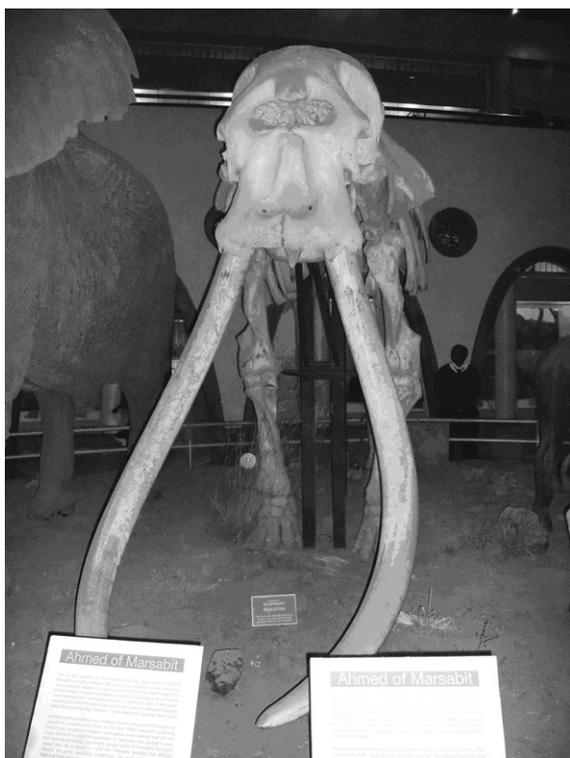


夜は外に出ている牛が男の人と一緒に帰ってきます。子牛は家の外壁と中の部屋の間の屋根の有るところに寝て、他の牛は村の真ん中で寝るそうです。男の人が牛に餌を食べさせに出かけている間、村の女の人が子守をしながらビーズワークを作っています。驚いたのは、ケニアの三色でオバマ氏のブレスレットを作っていたことです。オバマ氏は去年同じ村に来たそうで、その縁もあり作っていたそうです。次の日はもう一度、公園を回ってナイロビに戻りました。



次の日は国立博物館を案内していただきました。考古学者のリーキ氏は、数年前に世界の一番古い骨格・頭骨を掘り出しました。他の展示物は民俗学関係のもので、1960年代まで使われたヴードゥー教の用具でした。残りはケニアの動物の剥製。見学者は殆ど学生で、学芸員が案内をしていました。ケニアで印象に残っているのは、土産販売店はたくさんあるけれども、美術品は展示していませんでした。今まで回ってきたところと較べると、守らなければいけない物質的な文化財を持っていない、あるいはその感覚がない国であるように見えました。

その中でも印象に残ったのは、歯が凄く大きくて長い最後のマンモス象の骸骨でした。ジョンソン氏はマンモス象について、次のように説明してくれました。「最後のマンモス象は4匹で、そのうち一匹はメスでした。国はそのマンモス象を絶滅させないために法律を作り、保護しようとしていました。しかし、マンモスの象牙は一匹からたくさんの量をとることができるので、非常に人気があり、ハンターたちの格好のターゲットになっていました。ある晩、タンザニアからハンターがやってきて、メスのマンモス象を殺してしまったので、子供を作ることができなくなり、絶滅してしまいました。その後、国は



全ての象牙貿易を禁止し、警察の手入れで、見つけた象牙を全て燃やしました。そのときからは象牙の代わりに骨を使うようになりました。」

それまでは美術品や宝物の価値をあまり考えたことがありませんでしたが、この国立博物館がマンモス象のお墓になっているということに気づいて、はっとさせられました。人は死んで残すものはなんでしょう？自分の作品でしょうか、自分が作った会社でしょうか、自分が産んだ子供でしょうか。この人生で残るものは一体なんでしょう？人と人の間の気持ち、考えたこと、受けた影響、印象等は物質ではなく、形もありません。しかしそれは人の心の中に残っていきます。そんなことを考えました。



カイロ

その夜、22時の飛行機でもう一度カイロに戻りました。中村氏とドライバーが空港に迎えに来てくださり、直接鹿島建設が建てたオペラハウスに移動しました。

テント風の円形屋根になっていて、非常に印象深い建物でしたが、日本政府の無償援助によって建てられたと聞き、さらに感動しました。いつかそこでオペラを聞きたいと思いました。次はエジプト考古学博物館の館長に挨拶し、展示室を見学しました。コレクションはたくさんあり、掃除もよくされていない状態で、整理が大変そうでした。ミイラも見せていただきましたが、その方の人柄や性格がはっきりと想像できそうなくらい、鮮明な形で残っていて、本当に感動しました。今でもエジプトの文化は生きていて、4000年の歴史の重さを感じることができました。その一方で、自分は人生100年程度で何を出来るのか。もうあと60年間しかないことに気づき、帰りに人生について、改めて考えさせられました。物質がない中でのマサイの生き方を目の当たりにしながらも、私自身、これから欲しいもの、やりたいこと、しなければいけないことが次々と去来し、残された人生の時間の少なさに唖然としました。

夜に空港まで送っていただきました。そして中村氏が最後にプレゼントをくださいました。パピルスに描かれたエジプト神話に登場するヌート神の絵でした。この女神の下で人々は暮らしていると信じられていました。ヌートが太陽を飲み込むと夜が訪れ、その太陽が産み落とされるとまた朝がやってくる、のだそうです。

アメリカにおける資料発掘

ガンバガナ

博士（学術）東京外国語大学

秋田国際教養大学非常勤講師

2007 年度奨学生

私は博士学位論文で、1930年代に発生した内モンゴル自治運動に対し、日本はいかなる政策を取っていたかという問題を扱った。しかし、主に日本・中国・モンゴルの資料に頼ったため、ほかの国と地域の資料へのアクセスが不十分であったという問題を抱えていた。そこでその欠点を少しでも補いたいと思い、博士課程終了後、私は2009年5月から8月にかけてアメリカにわたり、勉強の傍らアメリカ議会図書館、ニューヨーク市立図書館などに足を運び、新しい資料の発掘を試みた。日本に帰ってきた後、2009年12月19日に昭和女子大学で開催された第19回モンゴル学術交流会において、「太平洋戦争と日本の対内モンゴル政策」というテーマで成果報告を実施し、次のような結論にいたった。

日中関係、ならびに日中戦争の進展にその行方が絶えず左右されてきた、デムチグドンロブ王の指導した内モンゴル自治運動は、1941年12月8日の太平洋戦争の勃発によって新たな局面を迎えることとなり、その後、日米関係を中心とした国際情勢の変化にも大きく影響された。私は「日華同盟条約」を事例として、その詳細を明らかにすることにした。

日米交渉の決裂は、太平洋戦争の直接の原因になるが、その決裂においては、「蒙疆地域の特殊性」と、「駐兵権」の撤廃問題が一因となっていた。交渉にあたっては、日本、とくに陸軍は、あくまでも蒙疆地域における駐兵権の維持を堅持しており、最後の譲歩案でも「25年間」という期限限定の駐兵権を求めた。この「25年間」は、内モンゴル自治運動にとっては重要な意味をもっていた。すなわち、当時の状況から言えば、それがモンゴル自治邦政府の「事実上の独立」、または蒙旗地帯の自治と復興につながるものであった。しかし、結果的には、日米交渉は成功に至らず、戦争へ突入することになった。

開戦当初、日本は軍事的に大きな勝利を収めていたが、

1942年に入ってから、ミッドウェー海戦とガダルカナル会戦で、開戦後初めての敗北を喫し、それまでの攻勢から、守勢に転じることを余儀なくされた。そこで、劣勢挽回のために導入されたのが、「対支新政策」であり、それに伴って浮上したのが汪兆銘政権の参戦、ならびに「日華基本条約」の改訂問題であった。

その後、「日華基本条約」の改訂問題をめぐる日汪の交渉が始まるが、汪兆銘側が参戦の条件として、もっとも強く主張したのは、華北・蒙疆地域の「特殊性」、ならびに「駐兵権」の撤廃であった。それに対し、日本側、とくに陸軍側は、少なくとも蒙疆の「特殊性」をなんとか維持しようとしたが、すでに守勢に転じていた戦局の巻き返しをはかるには、汪兆銘政権のさらなる協力が必要であったため、最終的には、汪兆銘側の要求をほぼそのまま受け入れる形で、「日華同盟条約」が締結されることになった。

それにしたがって、「日華基本条約」によって定められていた蒙疆地域の「特殊性」と「駐兵権」が取り消され、さらに蒙疆地域の高度自治も姿を消した。「日華同盟条約」は汪兆銘政権の「主権回復」と「領土の尊重」を強調し、形式上、汪兆銘政権の国家統合に一定の役割を果たす結果をもたらしたが、内モンゴル自治運動にとっては、日本の外交政策におけるスタートラインまで後戻りしたことを意味するものであった。その背景には、汪兆銘側の動きはもちろんのことであるが、急激に変化する国際情勢も無視することはできないと思われる。

そして、終戦にあたって、日本はソ連から何らかの譲歩を引き出すために、新たに「満蒙」をソ連の勢力範囲にする案を作成することになる。興味深いのは、ソ連を意識しながら始まった日本の満蒙政策がソ連を意識しながら幕を閉じていたことであろう。

今回の海外調査は私にとっては初めてのアメリカの旅

であったため、思い出に残る話は数多くあったが、SGRA かわらばんに掲載した「自由の鐘」というエッセーもそのひとつである。内容についてはSGRAのホームページからご覧ください。

最後に私に貴重な海外調査の機会を与えてくださった渥美国際交流奨学財団の海外学会派遣プログラムに深く感謝の意を申し上げたい。

台湾での国際会議参加報告

バオ レンチュン
包 聯群

博士（言語情報学）東京大学
東京大学大学院総合文化研究科学術研究員
2005 年度奨学生

1. 「本会議」

私は、渥美財団の海外派遣助成を受け、2009年12月16日から22日までに台湾で開かれた『Asia University 3rd International Conference on “Globalization’ and Chinese Narrations”（第三回「グローバル化および華語叙述」国際シンポジウム）』に参加した。会議を主催したのは台中にあるアジア大学人文社会学院外国語文学部で、会議は同大学の交際会議センターにて開催された。今回の会議は台湾の新竹教育大学中国語文学部、台湾の台東大学語文教育研究所、アメリカの西北大学アジア・アフリカ文学部、アメリカのThe University of North Carolina 英文学・外国語文学部と合同で開催されたものである。

今回の会議ではアメリカ、日本、中国、台湾などの国や地域から100人以上が参加し、60人以上の人が発表をした。この会議は12月17-18日の朝から夕方まで二つのセッションに分けて行われた。私の発表は17日の午前中だった。発表テーマは『モンゴル語に対する中国語の影響——都市部への移住による言語維持や言語変異——中国黒龍江省のモンゴル族を事例として』であった。今回の会議の主題は「華語」（中国語）を軸とし、言語学に限らず、文学、哲学、文芸などを含む広範囲にわたる内容が含まれていた。例えば、「台湾文学と台湾性」を主題とした「台湾のコミュニティーの物語」、「視覚芸術の台湾性」などに関するセッションがあり、また、「語



会議場

文のフィールドワークと言説主体」、「言語、翻訳、人性」、「グローバル化のもとでの華人組織行為」などに関するセッションもあった。さらに「言語のコミュニティー（Speech Community）理論」、「英語の翻訳問題」、「台北市の公的場における言語使用と言語シフト」、少数民族の言語問題などの内容を含んだ論文もいくつかあった。セッション別にそれぞれ英語や中国語を使用した。会議の討論が活発に行われ、非常に自由な雰囲気という印象を受けた。

2. 二番目の会議と「読書会」に飛び参加

台中に到着した次の日に私は、外国からの研究者を招集した責任者の陳先生に19日-20日に台北で開催され

る会議に参加しないかと誘われた。メールによる「緊急連絡」をチェックしていなかった私はその時までまったく知らなかったので大変驚いた。実は、アジア大学で開催された会議が終わり次第、一部の人は台北大学で開催される「字義論述シンポジウム」(哲学の分野を含む会議)に参加する予定であった。この知らせを受け、私は大急ぎで発表する論文の準備をした。幸い、「万が一のため」と考え、事前に用意していた日本語バージョンの「研究調査報告書」があった。2009年の秋ごろに、中国黒龍江省肇源県におけるモンゴル族のモンゴル語教育、言語使用や言語調査をし、それをまとめたものである。

会議は二日間(19—20日)にわたって台北大学にて開催され、参加者は20人前後だった。20日の会議が終わり次第、台湾大学にて「読書会」(研究者何人かが月ごとに開催されている勉強会)があると告げられ、会議に参加した皆さんがそのままタクシーで台湾大学へ移動した。このとき、もうすでに夕方の五時ぐらいをまわっていた。台湾大学に到着した後、「読書会」はすぐに開始され、お弁当を食べながら進行していった。二日間の会議や「読書会」では、自由で活発な発言や質問が非常に多かった。このようなハードスケジュールははじめてだったので、疲れを感じる一方、時間を有効に活用し、とても充実したものとなった。また、参加人数が少ない会議ではあったが、哲学分野の台湾の研究者たちはお互いに自分の意見を率直に述べ、激しい議論が行われている場面を目の当たりにして、とても勉強になった。研究雰囲気「厳しい」ようだったが、会議が終わると、お互いにとても親切で、先程の「議論」とまったく異なる穏やかな雰囲気となった。こうして、皆さんが率直に意見交換を行うことでともに成長すると彼らは言う。この意見交換は、研究にとって不可欠だと思われる。

3. 蒋介石の「官邸」や「故宮博物館」を見学

四日間の会議を終え、戻る日までに一日余裕があったため、会議に参加した中国徐州師範大学の蔡先生と「故宮博物院」と蒋介石の「士林官邸」を観光することにした。午前10時頃に、陳先生は私たちを車で「士林官邸」まで送ってくれた。こうして蔡先生と一緒に台湾の観光を始めた。

「士林官邸」という蒋介石が住んでいた居住地はまだ開放されておらず、修理中だった。そのため、他の建築物や庭園を鑑賞した。鑑賞を終え、二人でバスで「故宮博物院」に行った。着いたのが丁度お昼の時間だったの



蒋介石の礼拝場



蒋介石の官邸



故宮博物館外観

で、ここのレストランで食事をすることにした。二人で食事を注文してから席に座ったまま待っていたが、店員に「カウンターでの会計をお願いします」と言われた。日本ではほとんどのお店で後払いなので、それに慣れた私は、前払いをすっかり忘れていた。

● モンゴル・満洲関連のお土産品

「故宮博物院」を見学できて、とても楽しかった。今回でここを訪れるのは二度目だったが、飽きることはなかった。最も驚いたことは、見学を終えた後、一階のお土産の店に行ったときだった。何とチンギス・カーンの奥さんの画像が印刷されたファイルが売られていた。これは買わなければいけないと思い、一枚買ってしまった。またも博物館では丁度「清朝雍正皇帝」に関する展示会が行われていたので、そのためか、満洲字で飾られたTシャツもあった。満洲語の研究もしている私にとっては、これはまた非常に興味深いものだった。「故宮博物院」にしても、蒋介石の「士林官邸」にしても、山のすぐ近くに位置しているため、空気がよくて、とても綺麗な印象を受けた。

● 日本語ができるバス運転手

見学を終え、バスで市内へ移動中に途中から日本人のお客さんが乗車してきた。そして、日本語でどこどこに着いたら教えてくれませんかと話していた。私はそれを聞いて、もし困ったら助けてあげようと考えていた。その時、何とバスの運転手さんが日本語で返事をしていた。これにも驚いた。バスの運転手さんがいきなり日本語で返事するというのは私の予想外だった。

こうして学会や観光を無事に終え、帰途についた。今回の台湾訪問は収穫の多いものとなった。学会発表のみではなく、たくさんの歴史文物を見学することもできた。台湾の皆さんはとても優しく接してくれて親切な方々ばかりだった。この度、視野を広げるチャンスをいただいた渥美財団に感謝を申し上げます。



台湾の地下鉄改札口（子供と通過する際の指示が標記されている）

目的の多い日本への旅

マリア エレナ ティシ

Maria Elena Tisi

博士（児童文学）白百合女子大学

ボローニャ大学、ペルージャ外国人大学、サレント大学非常勤講師（在ボローニャ）

2003 年度奨学生

渥美国際交流奨学財団の「博士号取得者の海外学会派遣プログラム」のおかげで2月下旬に日本へ行くことができました。

2年前、日伊文化交流関係に貢献するためにイタリアに帰国して、今は児童文学を通じて日本文化を伝えています。大学で日本文化を教えているので、授業の中でも日本児童文学の作品をいくつか紹介しています。

今年の2月に開催された渥美財団・SGRAの15/10周年の記念祝賀会がきっかけで、今の研究テーマ、日本のファンタジーについて研究を深めるチャンスがありました。また、最新の日本文化にも触れることができました。

日本滞在中、予定通り児童書専門の本屋と図書館でよく書籍を調べて、幅広い資料を集めることができました。またファンタジーの専門家たち（先生と研究者）と話すことができ、いろいろな発見ができました。また、教科書としても貴重な資料を入手しました。

その上、いくつかの興味深いイベントに参加できました。

まず世田谷文学館で行われた「石井桃子展」を見学しました。展覧会では作品と貴重な資料を通じて優れた児童文学作家の石井桃子の仕事と活躍がよく紹介され、彼女の翻訳と創作を見ることができました。

次に国際子ども図書館で2月20日に開催された「日本発子どもの本、海を渡る」を見学しました。いろいろな言語に翻訳された日本の児童図書が紹介されている展覧会で、それぞれの本を比較することができて、翻訳という立場から異文化の問題がよく感じられました。

それから、「三鷹の森ジブリ美術館」も訪ねました。世界中でよく知られている宮崎駿監督

の作品は、日本文化をよく伝えてくれるため、授業でも使っています。宮崎駿の目的通り「入った時より、出る時ちょっと心がゆたかになってしまう美術館」でした。いろいろなヒントを受けました。

研究者としても教師としても満足しました。

さらに大学院でともに学んだ仲間たちと会い、久しぶりに2003年度ラクーン会もでき、家族といるような温かい時間を過ごすことができ、個人的にも満足しました。

「Last but not least」、旅の終わりの2月26日に渥美財団・SGRAの15/10周年の記念祝賀会に出席しました。素晴らしいイベントに参加できて、感動しました。特に今回は重大な責任があったと思います。実は私は実行委員ではなく、特別なパフォーマンスはしませんでした。懇親会で花束を理事長さんに渡すことになりました。15年間の全ての渥美国際交流奨学生の心をこめたため、とても重い花束になりました。私も、とても満足しました。

目的の多い旅は本当に満足の多い旅になりました。



AISF ネットワーク

- ラクーン会 72

- 第9回日韓アジア未来フォーラム 81
「東アジアにおける公演文化(芸能)の発生と現在：その普遍性と独自性」

- 第4回 SGRA チャイナ・フォーラム 83
「世界的課題に向けていま若者ができることー TABLE FOR TWO ー」

- 第2回 SGRA モンゴル・プロジェクト 86
「ウランバートル国際シンポジウム『世界史のなかのノモンハン事件
(ハルハ河会戦)』」

- 関口グローバル研究会 (SGRA) 89

2009 年度ラクーン会レポート

■ラクーン会 in バンコク

2009年4月7日、たいへんな雷雨の後、午後7時より、バンコク市の中心部にある Siam Paragon 中の Manna Thai Restaurant にてラクーン会が開催されました。参加者は、ビラバットさん（1996 狸）、ノイさん（1997 狸）、プラチャーさん（1999 狸）と奥様の修子さん、お嬢さんのありさちゃん、バンコク訪問中の今西の6名でした。今西のバンコク訪問は4年ぶり、3名のラクーン全員が集まったのは7年ぶりでした。当然のことながら、一番盛り上がった話題は、黄色シャツ派と赤シャツ派の対立抗争。この日は実は、大混乱の始まりの前日でした。詳しくは S G R A かわらばん「[バンコクー東京通信](#)」をご覧ください。

（文責：今西淳子）



■韓国ラクーン会 in ソウル（2009 年春）

2009年4月25日、お昼の12時、ソウルの鍾路区光化門にあるモラツ（Bistro Seoul Morac）で韓国ラクーン会（K S R）が開かれました。伝統的な韓国料理をアレンジしたお店で、3月にリニューアルされたばかりだったので選んでみました。今西さんをはじめラク-

ーン会のみなさまも有名なお店は制覇されてるので、新しいちょっとした隠れ家風なところを見つけたかと思っていたのですが、このお店もすでに来たことがあるという方がいらっしやいました。秋に向けてまたがんばって新しいお店を探しておこうと思います。

今回は渥美財団常務理事の今西淳子さん、李来賛さん（K S R 会長、96 狸）李香哲さん（97 狸）洪京珍さん（99 狸）韓京子（K R S 幹事補佐、05 狸）李垠庚さん（07 狸）の6名が集まりました。学会や海外出張、会議などが重なりたくさんの会員が集まれなく残念でした。

食事後、お店から近い美術館の彫刻庭園内のカフェでお茶をしようと思ったのですが、あいにくの雨で気温も下がってしまい、あきらめて向かいのおしゃれなカフェに変更しました。この美術館、おととしてしたか学歴詐称で逮捕された有名な元大学教授がキュレーターとして勤めていたソンゴク（省谷）美術館です。カフェはおしゃれなカップとおかわり自由ということでぜひ入ってみたかったのですが、また今度の機会にということになりました。落ち着いた感じのするところですので都心のちょっとしたデートコースとしても使えそうです。

ラクーン会が開かれたのは国会議員再選挙の一週間前でもあり、また盧前大統領が収賄容疑で検察に事情聴取されることになったという報道もあった頃でした（この原稿の校正の日、逝去されました。ご冥福を祈ります）。毎回大統領が変わるとどうしてこうなるんでしょうね。また、相次いで集団自殺が起こってもしました。韓国では「心中」を「同伴自殺」ということが多いのですが、「同伴」だとプラスイメージがあるので使うべきじゃないといわれています。政治も問題ですが、世界上位を占めてほしくない「自殺率」も問題です。また、お釈迦様の誕生日を控え、あちらこちらにランタンが飾られ、この日仁寺洞一帯では象や龍などをかたどった大きな提灯や信者の行列の行進がありました。ちなみに韓国ではお釈迦

様の誕生日もキリストの誕生日も休日です。朝鮮時代は儒教国家だったのに、孔子を祭る釋奠が行われていること、宗廟祭礼が行われる日などは知らない人が多いでしょう。宗教じゃないからといわれればそれまでですが。

今回は韓国ラクーン会会長の交代の話がありました。終身制とばかり思っていたのですが、長年会長を務めてくださった李来賛さんから南基正さん（96狸）への交代となります。会員のみなさまが集まった時ではなかったので「交代式典」もできませんでした。李来賛さんはこれからサバティカルでアメリカへと行かれるそうです。本当に今までお疲れ様でした。これからもよろしくお願いします。また、新会長の南基正さん！よろしく願っています。

次は昨年からはじまった渥美財団の奨学生選抜（韓国現地採用枠）の面接の日程に合わせて開かれる予定です。それでは、また秋の日に。

（文責：韓京子）

■ラクーン会 in 名古屋

2009年7月10日（土）のお昼、名古屋駅の上の名古屋マリOTTアソシアホテル18Fの中華料理店梨杏（リンカ）にて、1年半ぶりのラクーン会 in 名古屋が開催されました。参加者は、胡潔さん（1998狸）、梁興国さん（2001狸）と奥さんの李玲さんとお嬢さんの梁しんいさん、ランジャンナさん（2002狸）、そして会議のために訪名中の渥美伊都子理事長、岩崎統子評議員、今西淳子常務理事でした。皆さんすっかり名古屋の生活に慣れたようですが、ランジャンナさんは秋から、母校のデリー大学東アジア研究科に戻って教鞭をとることになっ



たので、ランジャンナさんの送別会でもありました。皆さん、来年はニューデリーに遊びに行きましょう！

（文責：今西淳子）

■ラクーンビジット in プンタレナス



プンタレナスの教会

2009年8月10日～14日、オスカルさんを訪ねてコスタリカのプンタレナスへ行った。首都のサンホセから120 km、車で約2時間の太平洋岸のリゾートとされる人口約5万人の町である。ニコヤ湾に5キロメートルに渡って細長い砂州が海に突き出し、その先にプンタレナスの町がある（プンタレナスとは「砂の岬」という意味）。昔はサンホセから自動車道がなく鉄道が通っていた。太平洋岸では最大の港だという。自然保護区が多く、動植物の宝庫としても知られている。



家の前は海



コスタリカ大学プンタレナス校の学長（中央）と

オスカルさんは2回目の日本留学により東京海洋大学から博士号を取得した後、コスタリカ大学プンタレナス校に戻り、現在は副学長を務めている。昨年帰国してからは貸していた家の修理改築が大変だったということだが、そのお宅に泊めていただいた。奥様の久美子さんと愛犬ルミちゃんの3人(?)暮らし。オスカルさんの家は細長い岬の中ほどに位置し、裏口からでると左手には1軒おいて砂浜、右手には鉄道線路の跡や道路や数件の民家の向こうに運河が見える。残念なことに浜辺には流木をはじめ漂流物が多く誰も泳いでいない。サーフィンやヨットなどのマリンスポーツも何もない。もう少し岬の先の方に行けばビーチになっていて、週末にはサンホセからも人々がやってくるということだが、滞在したのが週の中ほどだったせいか、夏休みが終わってこの週から学校が始まったせいか、ビーチで泳いでいる人はひとりも見かけなかった。一方運河の方は港や船の停泊地として活用されているが、反対側はマングローブの森が続き、そこにはワニがたくさんいるという。

プンタレナスという海と運河に挟まれた0m地帯の砂州が本当に安全なのか、本当にこれから何百年もそのまま存続するのかという疑問がわいてくる。それに対する答えは「今まで津波も高潮もなかったから大丈夫でしょう。まあ、もし津波がきたら助からないかもしれませんがね」とのこと。このあたりはアメリカの独立戦争と同じころに独立したので、せいぜい200年ちょっとの歴史である(原住民の歴史を考えなければ)。「数年前の火山の爆発でカリブ海側の地盤が上がったから、太平洋岸は少し下がったかもしれない」と話す人もいたが、オスカルさんの話によれば以前はもっと海が近く砂浜が狭かったそうなので、水位は下がったのかもしれない。南太平洋の島々にみられる地球温暖化による水位の上昇は、こち

らでは全く語られていないようだった。

久美子さんは「まだ間に合わなくて冷房がないんですよ」と言うが、冷房なしの生活はもしかしたらオスカルさんの狙いかもかもしれない。そもそも、このあたりでは、冷房のある家はあまりない。気温は真夏日と熱帯夜が続いている感じで、湿度も東京に負けず、汗っかきの私はじっとしていると汗がぼたぼた落ちる。滞在中、タオルが手放せなかった。ただし海辺なので風があり、冷房の利用が少ないから、東京の都心よりはましかもしれない。それにしても、これが「夏」の気候ではなく、1年中こうなのだから凄い。近隣諸国を含めてこの地域には四季がない。あるのは雨期と乾期だけ。海に行けばいつも真夏。山に登ればいつも涼しい。実際、最後の日に海辺のプンタレナスからサンホセ市の近くの標高2800mの火山へ行ったが、そこは摂氏15度で震え上がった。だから中米では、おおかたどの国も首都は標高1000m以上の高地にあり、会議もそのようなところで開催されることが多い。中南米でこのような暑さを経験したのは初めてだった。扇風機の前に座って食事やメールチェックをし、あるいは扇風機の風にあたりながら眠ることになった。そして、外は暑すぎるから、家の中で扇風機にあたりながらベッドに寝転がって本を読むという何とも幸せな一時を過ごすこともできた。ここでは時間がゆったりと流れていて、その中に浸っているのはなんとも居心地が良かった。

オスカルさん、久美子さん、素敵なお泊りをありがとうございました。

(文責：今西淳子)

■ラクーン会 in 北京

第4回SGRAチャイナ・フォーラム前日の2009年9月15(火)、天高き秋の北京でラクーン会が開かれました。北京大学から近い中関村の悄江南というレストランで開催された今回のラクーン会には、今西淳子常務理事、フォーラムの講師近藤正晃ジェームスさん、李恩民さん(1997狸)、孫建軍さん(2002狸)、朴貞姫さん(2003狸)、劉建さん(2008狸)、ネメフジャルガル(2008狸)の7人が集まりました。今回のフォーラムの現地担当宋剛さん(2008狸)は高熱を出していたため夕食会に参加できませんでしたが、次の日には元気をとり戻して仕事をこなすことができました。



まずは10月1日の中国の建国60周年にあたる国慶節のパレードから話が始まり、話題はウルムチの針刺し事件から酒井法子の麻薬事件、日本の政権交代から寄せ書きに見る文化の相違まで及びました。特に孫建軍さんによる中国の大学の日常に関する話は非常に面白かったです。中国のほとんどの大学は国立であり、かつての国営企業に似たような「大学＝社会」の体質を持っています。大学は学問と学生の教育だけではなく、教職員の住居や子女教育など日常生活にもしっかりと影響を及ぼしているようです。デザートに出たお菓子の大きさにはびっくりし、久しぶりに集まった皆は話題も尽きず楽しい一時を過ごしました。

16日(水)の午前中、東京から前夜に到着したSGRA運営委員の石井慶子さんも加わり、北京外国語大学のキャンパスを視察しました。とても立派な大学で、学生たちも元気いっぱいでした。特に日本政府の援助で建設された北京日本学研究中心は、キャンパス全体の雰囲気と調和しながらも日本の特徴を失わない建物で、教室、研究室、図書室を揃えた立派な施設でした。江西料理の美奐村での昼食もミニラクーン会になりましたが、メニューから皿の大きさを判断できず注文し過ぎて、「メタボと飢餓を同時に解決する」フォーラムの講演の趣旨と相反してしまったのが残念でした。フォーラムについては、宋剛さんの報告を参照してください。

(文責：ネメフジャルガル)

■韓国ラクーン会 in ソウル (2009 年秋)

2009年10月9日金曜日の午後7時、ソウルの鍾路区景福宮のとなりにあるハンソンカルグッズというお店

で、新会長を迎えてはじめての韓国ラクーン会(KSR)が開かれました。国立民俗博物館の入り口から韓国伝統家屋村であるプクチョン(北村、李明博大統領が就任直前まで住んでいたおうちもあります)方向へ横断歩道を渡ったところにある、ちょっと知られた韓国式手打ち麺のお店です。韓国ではめずらしく行列ができるお店としても有名です。韓国では食べるために並んで待つ(飲食店ではありませんが、レイビトンのお店は入場人数に制限があるのか、お店の前で客が並んでいるのをつい最近みかけましたが)という傾向が少なく、かの有名なクリスピードーナツ(数年前、新宿での行列にびっくり)もソウルでは人が並んでいるのをみたことがありません。まあ、感動するほどの味でもないというのも原因かも知れません。個人的にはパン類や洋菓子類は日本の方がおいしいような気がします。湿度のせいでしょうか、しっとり感が違います。でも、しっとり感のいらぬハンバーガーは韓国の方がおいしいような気がします。

今回は渥美財団常務理事の今西淳子さん、南基正さん(KSR新会長、96狸)金雄熙さん(96狸)金幸晟さん(98狸)鄭成春さん(00狸)蔡相憲さん(03狸)金賢旭さん(03狸)韓京子(KRS幹事補佐、05狸)玄承洙さん(06狸)李垠庚さん(07狸)の10名が集まりました。学会や海外出張、入試の面接などが重なり、また平日ということから参加率が低いのではないかと心配しましたが、意外と集まりました。



ところが、平日、それも金曜日の夕方という時間、都心を選んだことから、ほとんどが大遅刻。先に着いていたメンバーには本当に申し訳なかったです。お店はすぐそこなのにまったく進まないで私と今西さんはタクシーから降りて歩きましたが、自家用車組は車を乗り捨ててくるわけにもいかず、ソウルの渋滞を満喫したようで

す。やっとの思いでみんなが集まると、お腹がすきすぎて食べるのに必死で、会が終わってみると車の中に入った移動時間と会そのものの時間があまりかわらないくらいでした。渋滞で疲れてしまったせいもあったのでしょう。今後はもうちょっとメンバーのみんなと互いにお話できる会にしようと反省しております。

さて、今回今西さんは偶然飛行機でスマップのキムタクととなりあわせになったらしいです。それを聞いても「めっちゃめっちゃ」うらやましいというほどの感情が起こらなかったことに、私自身「不惑」という歳を実感しました。ある人は「不惑」は何事にも惑わされないという意味ではなく、「誰も誘惑する人がいない」という意味と言っていました。ちょっとさびしい気もしますが、妙に納得してしまいました。

秋風にますます紅葉が鮮やかさを増しています。学生には「季節を感じながら生きる」よう教えていながら、私自身は実践できてないようです。季節を感じ、ときめくということを忘れないようにしたいです。

次の日、未来人力研究院の事務所で渥美奨学生選抜（韓国国内枠）の面接がありました。面接に関わった先生、今西さん、お疲れ様でした。それでは、また、桜満開の春の日に。

（文責：韓京子）

■ミニ・ラクーン会 in ボストン

ボストンの秋深まる 2009 年 10 月 28 日の夕方、ハーバード・スクエアから少し裏道に入った所にある「アップステアーズ・オン・ザ・スクエア」というレストランでミニ・ラクーン会が開かれた。

私（南基正）がソウル大学日本研究所に移動し、早 4 ヶ月が経つが、二度目の出張先としてボストンに行くことになった。最初は日本への出張であった。今回は、欲を出してアメリカへの一人旅を実行に移した。ハーバード大学にあるイェンチン研究所やライシャワー日本研究所を訪問し、インタビューと資料調査を行うことが目的であった。出発前に今西さんに報告したら、ボストンのラクーン達に「コリアン・ラクーン、ボストンに現る」の知らせを出していただいた。そこで、孟子敏さん（04

年ラクーン、ハーバード大学東アジア言語文明学部客員研究員・松山大学人文学部教授）、ケヴィン・ウォンさん（王健敏さん、05 年ラクーン、ハーバード大学医学部 MGH 病院研究員）と私の三人でのミニ・ラクーン会・イン・ボストンが開催されることになった。



ケヴィンさんのお勧めで入った「アップステアーズ」は典型的なアメリカン・レストランという感じだったが、これまたケヴィンさんのお勧めでたのんだ海老の前菜が、とても美味しかった。私はメカジキのステーキを食べることにした。初経験だったので、その味をどれ程堪能できたか自信はないが、マグロを少し硬めに焼いたようなもので、まあまあ美味しかった。料理を食べながら、それぞれの近況と仕事の内容、ボストンでの生活などを話題にして楽しい時間を過ごした。孟さんは家族を残して一人で来ているので、研究ばかりの毎日である。寂しい時もあると思うけど、充実した時間を過ごしているようで羨ましかった。ケヴィンさんも家と病院を往復する単調な生活にもかかわらず、楽しく好きなことをやっているという表情だった。その後、孟さんとは、近くのレストランで短い二次会を開いた。ちょっと赤みのボストン・ビールが美味しいレストランだった。二人には楽しい時間を割いていただいた上、美味しい料理とビールを奢ってもらった。旅行するゲストにはお金を使わせないのが中国式だという。改めて感謝の言葉を伝えたい。そして、ソウルで借りを返しませう！

他に、王岳鵬さん（97 年ラクーン、タフツ大学分子心臓病研究所研究員）、孫艶萍さん（98 年ラクーン、ハーバード大学ブリッグム病院放射線科准教授）、林泉忠さん（2000 年ラクーン、ハーバード大学客員研究員、琉球大学法文学部准教授）学など、ボストン在住ラクーンた

ちからメールをいただいた。仕事や出張などで参加できないが、ボストンの夜を楽しんでほしい、という内容であった。

次の日は午前までに仕事を終わらせ、午後から、ボストンの街とチャールズ川の辺、MITのキャンパスなどを歩いて廻った。疲れも知らず歩いて、また歩いた。ボストンの街は美しかった。カメラのレンズをどこに向けても絵になる風景だった。きっとまた来よう、と心に決めた。

今回の旅行では、改めて世界に広がるラクーンのネットワークを実感した。孟さん、ケヴィンさん、そしてボストン・ラクーンズの皆さん、お元気で！またどこかで会いましょう！

(文責：南基正)

■ミニ・ラクーン会 in ソウル

私(王雪萍 05年ラクーン)は、韓国の東アジア研究財団主催のシンポジウム「東アジア世界」のアイデンティティーと多様性にて、研究報告するために、韓国のソウルを訪問しました。

2009年11月8日、忙しかった2日間の会議の後、自由な一日がありました。せっかく韓国に行くので、卒業してから4年間も会っていない同期の韓京子さん(05年ラクーン)と久しぶりにお会いしたいと思いました。今西理事から、韓さんの連絡先をもらい、さっそくメールを送ったところ、韓さんは驚異的な速さで、返事してくれました。4年ぶりの再会を楽しみにして、韓国へ出発しました。

朝、大雨の中、韓さんがホテルまで来てくれました。そのうえ、初めて韓国に訪れた私のために、一日の観光コースまで準備してくださいました。再会の歓談と喜びも、一日中続きました。午前中、雨が降っていたので、国立中央博物館で韓国の歴史について、説明してもらいました。中国や日本と共通する文化も多い中、韓国独特の部分もある程度理解できました。韓国についてほとんど無知だと言える私にとっては、大変良い勉強になりました。

お昼、私の大好きな参鶏湯の有名店に案内していただき、至福の食事タイムを体験しました。韓国ドラマが大好きな私は、日本でも数回韓国料理店で参鶏湯を味わったことがありましたが、これほど濃いスープで煮込んだのは初めてでした。食事をしながら、同期のラクーンの皆さんについての情報交換をしながら、学生時代を懐かしがりました。



午後、雨はすっかり止んで陽の射す中、韓国故宮の景福宮を2時間ほど見学しました。中国と日本での生活が長いからか、中国文化と日本文化を連想する箇所が多いように感じました。伝統衣装を着て、宮殿を守っている「兵士」のショーを見て、韓国の観光客へのサービス精神と伝統文化を守る心が伝わってきました。

ソウル観光の最後のくつろぎの場として、韓さんは今西理事と一緒にいった韓国の伝統茶の喫茶店に案内してくれました。お茶を飲みながら、今西理事を含めて、渥美財団の皆さんとの交流の話を楽しみました。

楽しい時間も東の間、空港に行く時間になりました。久しぶりに会った韓京子さんと別れたくない気持ちでいっぱいでした。早い再会を心に祈りつつ、空港バスに乗って、ソウルに「再見」と告げました。

(文責：王雪萍、確認：韓京子)

■ラクーンビジット in デリー



2009年12月19日(土) インドのニューデリー訪問中の一日、ランジャナ・ムコパディヤヤーさん(2002狸)にデリー大学を案内していただきました。ランジャナさんは、母校のデリー大学東アジア研究科准教授として11月に帰国したばかりだったので、未だ逆カルチャーショック中でした。デリー大学はオールドデリーにある広大なキャンパスをもつインド第一の国立大学で、イギリスと同じ大学制度で、学部はいくつものカレッジに分かれており、大学院になって専門ごとに分かれます。東アジア研究科では、日本、中国、韓国を中心とした東アジアの地域研究と語学教育をしています。土曜日で大学はお休みでしたが、ランジャナさんの同僚の先生や大学院生と日本語で話す機会もありました。大学見学の後、キャンパスの近くの小さなレストランで食事をしてから、少し時間があつたので、ムガル帝国時代の城塞 Red Fort (赤い城) という遺跡を観光しました。インドの遺跡は、その規模の大きさに圧倒されます。その後、ランジャナさんのお宅にお邪魔して、ご両親にお会いしました。お父様は、ランジャナさんが帰ってきたことを大変喜んでいらっしゃいました。また、ランジャナさんを訪ねて名古屋へ行った時、毎日スーパーマーケットに通って、すっかり顔見知りになった話を楽しそうに話してくださいました。インドから日本へ来る留学生数は少なく、今までに渥美財団が支援したのもランジャナさんひとりだけですが、日本とインドは今後はますます交流の機会が増えると思いますから、是非 S G R A のプロジェクトができたらいと思います。

(文責：今西淳子)

■ラクーン会 in 釜山

韓国慶州教育文化会館で開催される第9回日韓アジア未来フォーラム(2010年2月9日)を控え、2月7日午後2時少し前、一足先にプサン入りした韓国ラクーン会(KSR)の金雄熙さん(96狸、仁川在住)、金賢旭さん(03狸、ソウル在住)、韓京子さん(05狸、ソウル在住)らの暖かい出迎えの中、渥美財団から参加した今西淳子さん、石井慶子さん、東京在住のKSRメンバーの梁明玉さん(04狸)と陸載和さん(08狸)、そして私(03狸、台湾出身で台北在住)がプサンの金海空港に到着しました。

久しぶりに再会したラクーンたちは、情熱的な挨拶を交わし、陸載和さんを除いた東京組の4人は早速、梁明玉さんのご好意によってわざわざ空港まで送迎して下さったお姉さま梁明順さんの自家用車に乗り込んで、宿泊先のホテルリベラ海雲台へ向かいました。

想定外の好天気に恵まれ、ぼかぼかの陽気に包まれながら、流れていく車窓の風景を眺めていると、海を飛び越えてプサンに来ているのに、なんだか外国に来たという実感があまりしない自分にびっくりしました。どこか懐かしい雰囲気さえ漂っているこの町の風情に馴染んで行く私ですが、東アジア社会に共通する何らかの繋がりを肌で感じた瞬間が味わえました。今までただの記号としか見えなかったハングル文字も、今にもカラフルな看板から躍り出ようとした感情豊かな文字に見えてきて、ほんの2、3文字でも認識できれば町の景色に少しずつ溶け込むこともできたのにと、密かに悔やんでいました。

程なくホテルに到着し、チェックイン手続きが終わって各自の部屋へ移動しようとしたところ、今回の未来フォーラムの発表者の一人である横山太郎先生(跡見学園女子大学)が、自力で見事にホテルにたどり着き、絶妙なタイミングでフロントに現れました。振り当てた部屋で少しくつろいでから、みんなで(しかも自家用車一台で六人乗り⇒さすがに華奢な女性陣ならではの凄技ですね^^)海雲台ビーチの美しさを堪能できる釜山ウェスティン朝鮮ホテルの喫茶ラウンジに繰り出し、自己紹介の続きに、素晴らしい砂浜の景色を眺めながら、日本・韓国・台湾の大学教育現場の珍現象について議論したり、梁明順様からの差し入れ=美味しい干し柿(マシッソヨ!!カムサミダ!!)をつまんだりして、優雅なティータイムを心ゆくまで満喫しました。

しばらくすると、金海空港でもう一人の発表者である藤田隆則先生(京都市立芸術大学)の到着を待機してい

た金さんたちも喫茶ラウンジに合流し、これで全員集合。釜山在住の朴貞蘭さん(95 狸)を入れて総勢 12 人でわいわい話しながら、海雲台ビーチを一望できるラウンジ窓際の特等席を独占していました。もちろん、フォーラムの打ち合わせや翌日の慶州観光ツアーのスケジュールの確認も入念に済ませました。そして、歓談も一段落ついたころ、夕日に染まり始めた白い砂浜を後にした全員は、二台の車(うち一台は乗客定員 11 名の現代(ヒョンデ)ワゴンレンタカー)に分乗して、ラクーン会 in 釜山の会場へ出発。



数年前から韓国料理のおいしさに目覚めた私は、韓国でのご馳走といえば御馴染みの焼肉やブルコギか伝統的宮廷料理と思い込んでいましたが、幹事の朴貞蘭さんが案内してくださった場所に着いたら、なんと「夢」と名づけられた高級日本料理店!! 朴さんのご主人のお勧めでもあるようですが、ぜひ韓国人の目線から捉えられた日本料理のあり方を体験してもらいたいという朴さんの企画動機を聞いて、なるほど、この店で出された日本料理を食べたら、韓国の人々に受け入れられる日本料理の姿がわかるということになるわけです。まあ、韓国料理なら、明日も明後日も食べる機会がいくらでもあるし、せっかくのチャンスなので、世界に広がりつつある日本料理を通じて、食生活における異文化理解にアプローチしようじゃないかと期待を膨らましながら席に着きました。

さすが、プサンの政財界にも名の知られるご接待向けの日本料亭だけあって、出された料理の数々は、本場の日本人でも納得できる秀逸の品ぞろい。お刺身、ふぐのてっさ、焼き魚、煮魚、珍味、漬物、しめのうどんやご飯と味噌汁。しかし、一見高級日本料理の素材がふんだんに取り入れられても、ドレッシングやソースの種類を

はじめ、付け合せの野菜や食べ方まで、やはり韓国料理的要素が上手にミックスされていると感動しました。地元の人でもめったに体験できない日韓食文化の集大成に舌鼓を打った私は、韓国における台湾料理を一回だけでも味見したいなって、ついに欲が出てしまいました……。

食べ物の話はさておき、第 2 回目になるラクーン会 in 釜山のメンバーは、なんと日本人 4 人と韓国人 7 人と台湾人 1 人という国際色に富んだ集いでした。会席の間に交わした話題は、今回のフォーラムテーマである「東アジアにおける公演文化(芸能)の発生と現在: その普遍性と独自性」にちなんで、日韓中における伝統的芸能の様々な様相をはじめ、接待向けの座敷から生まれた日本の遊女・舞妓・芸者文化や韓国の妓生(キーセン。【wikipediaによると、朝鮮国に於いて、諸外国からの使者や高官の歓待や宮中内の宴会などで楽技を披露するために準備された女性の事をさす。しかし実際の妓生の位置付けは芸妓を兼業とする娼婦である。】)まで広がり、東アジアの民族性や民俗イベントの異質性と同質性をめぐる熱き論議が繰り広げられていました。専門外の私も時々箸を置いて日韓双方の見解に耳を傾けて頷くほど、本番のフォーラムに遜色のない真剣な話題も盛りだくさんでした。

これぞ、ラクーン会の醍醐味ではないかと思いつくづく思ったのは私だけでしょうか。まだ初日での顔合わせの段階なのに、参加者たちの気持ちはすでにアジア未来フォーラムに向けて、着々とウォーミングアップし、後一歩で準備完了の態勢にシフトできるのではないのでしょうか。

(文責: 張桂娥)

■ 2003 狸のラクーン会 in 東京

平成 22 年 2 月 22 日、4 つの 2 が揃ったこの特別の日に東京新宿で 2003 年度奨学生ラクーン会が開催されました。渥美奨学財団常務理事の今西淳子さんをはじめ、=2003 年度ラクーンの林少陽さん、フスレさん、ヤマグチ・アナ エリーザさん、ティシ・マリア エレナさん、ご新婚の張桂娥さんご主人、筆者の私(臧俐)の計 8 名が参加しました。2003 年度ラクーンの私たちにとって、今回の集いは奨学生終了後の初めての単独の集まりでした。しかも、イタリアと台湾からそれぞれ来日したティシ・マリア エレナさんと張桂娥さん、またこの 3 月

に香港の大学に新たに赴任するために東京を去る林少陽さんがいるため、ラクーン会であると同時に歓迎会と送別会でもあるような雰囲気でした。

私はその日の仕事を終えて駆けつけましたので途中からの参加でしたが、着いた時には既に相当盛り上がっていました。その後も、地球市民の話や、日本の政治・社会・鳩山新政権の話や、中国社会の昔と今・及びその諸問題についてなど、みんなで多面にわたって歓談しました。特に日頃言葉数が少ないフスレさんがいつもと違って大活躍してこの集まりを最後まで盛り上げてくれました。結局、会を終えた時には予定より大幅に時間が過ぎていました。最後に今西さんから財団設立 15 周年記念出版『われら地球市民—かるがると国境を越える』という本をいただきました。



久しぶりの再会と歓談でしたので、私ももちろんですが、みんなとても楽しそうでした。話題も国際的に多岐にわたり、本当に有意義な一時を過ごさせていただきました。このラクーン会を開催してくださいました今西さんと渥美財団に心より感謝を申し上げます。また財団設立 15 周年、本当におめでとうございます。

(文責： 臧 俐)

韓国未来人力研究院 /21 世紀日本研究グループと渥美財団 /SGRA との共同プロジェクト

第 9 回日韓アジア未来フォーラム

「東アジアにおける公演文化（芸能）の発生と現在： その普遍性と独自性」

日 時：2009 年 2 月 9 日（火）午後 2 時 00 分～5 時 00 分

会 場：慶州教育文化会館

日韓逐次通訳付き

東アジア地域協力を考えるに当たって文化的同質性が注目されて久しい。しかし、共通の文化への注目は未だに実を結ばずにいるのが現状である。本フォーラムでは、「文化」をキーワードに東アジア地域協力の歴史性や方向性について考えてみることにした。とくにその大きなポイントとなる公演文化（芸能）における同質性と異質性に着目し、その展開と現在の意義について考察した。いくつかのテーマについて主題発表をお願いし、その後、パネルディスカッション、自由討論を行った。

■ プログラム

総合司会：金 雄熙（韓国仁荷大学国際通商学部副教授、SGRA 研究員）

【開会挨拶】今西淳子（SGRA 代表、渥美国際交流奨学財団常務理事）

【挨拶】宋 復（未来人力研究院理事長）

【基調講演】「文化論の不変と特殊」：全京秀（ソウル大学教授）

【主題発表 1】東アジア公演文化の普遍性と各国の独自性：全耕旭（高麗大学国語教育科教授）

【主題発表 2】音楽と芸能における「伝統」「古典」観—伝統楽器の練習方法の韓日比較から：藤田隆則（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター準教授）

【主題発表 3】芸能が劇場に収まるとき：横山太郎（跡見学園女子大学准教授）

【パネルディスカッション】進行：金賢旭 パネラー：発表者＋林慶澤（全北大学）、韓京子（檀国大学）

■ 概要報告

2010 年 2 月 9 日（火）、韓国の古都慶州（キョンジュ）で「東アジアにおける芸能の発生と現在」をテーマに第 9 回日韓アジア未来フォーラムが開催された。日韓アジア未来フォーラムにおいて、芸能、特に伝統芸能がテーマとしてとりあげられたのは初めてであった。伝統芸能は、過去に留まっているものではなく、歴史を貫いて今でも生き続けているものが多い。例えば、日本の能や歌舞伎や浄瑠璃、韓国の仮面劇やパンソリなどがそうである。今回は、このように時代を越えて今に伝わる東アジア芸能を中心に、それらの普遍性と独自性を探り、その展開と現在の意義について考察することにした。さらに、「東アジア地域協力の歴史性や方向性について考える時、伝統文化の視点から提示できるものは何であろうか」という問いについて考えてみる機会を設けたのであった。

フォーラムでは今西淳子（いまにし・じゅんこ）SGRA 代表と韓国未来人力研究院の宋復（ソン・ボク）理事長の挨拶に続き、4 人のスピーカーによる基調講演と研究発表が行われた。まず、韓国ソウル大学の全京秀（ジョン・ギョンス）氏が「文化論の不変と特殊」と題した基調講演で、東アジアという地域の概念について説いた後、伝統と近代、東アジアの世界化などについて幅広い見識を述べた。次に韓国高麗大学の全耕旭（ジョン・ギョヌク）氏は、「東アジア公演文化の普遍性と各国の独自性」と題した発表で、東アジア共通の文化遺産である仏教・儒学・漢字などは、



韓日中の各国においてそれぞれの国の風土と習合しながら独特の文化として形成されたことを指摘し、それは伝統芸能の世界でも同じであることを説いた。特に、シルクロードを経由して中国・韓国・日本に伝わった散楽が東アジアの仮面劇のルーツであることを、古墳壁画や多様な文献資料をあげながら追求した。つづいて、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターの藤田隆則（ふじた・たかのり）氏は、「音楽と芸能における『伝統』『古典』観：伝統楽器の練習方法の日韓比較から」と題し、音楽と芸能における「伝統」や「古典」観について伝統楽器の練習方法の日韓比較という視点から発表した。氏は、アジアの音楽や芸能には、親や師に似ていることを個性よりも大切にすることが強かったが、日本では近代に入って、家元制度を通じて、そこに突出した高い価値が与えられてきたことを指摘した。さらに、能管の実演を入れて日本の伝統楽器の練習方法を紹介し、韓国における音楽・芸能の「伝統」「古典」観との違いを明らかにするための素材提供を試みた。最後に、跡見学園女子大学の横山太郎氏は、「芸能が劇場に収まるとき」と題した発表で、東アジアにおける非劇場型の芸能の多くが、近代化（西洋化）のプロセスを経て劇場で上演されるようになったことを指摘した上、この劇場への適合のあり方に、共通の構造があるのではないかとこのことを説いた。特に、日本を代表する伝統芸能である能の事例分析を通じて東アジア芸能の近代化を考える共通の視点を提示した。

パネル討論には、全北大学の林慶澤（イム・ギョンテク）、檀国大学の韓京子（ハン・ギョンジャ）両氏が加わり、質疑応答の形で行われた。発表の時には時間の制約で触れられなかった事項を質問の形でうまく引き出してくれたので、より詳しい説明が聞けた。フロアーから寄せられた意見や質問に対して、タイムリミットで十分な意見交換ができなかったのはとても残念だった。

今回のフォーラムは、研究発表だけでなく、慶州の旅行も兼ねて行われた。SGRA 研究員であり仏教美術専門家である陸戴和氏に頼りながらたくさんの勉強ができ、有意義な時間が過ごせた。

（文責：金賢旭 韓国外国語大学非常勤講師）



第4回 SGRA チャイナ・フォーラム
 世界的課題に向けていま若者ができること
 — TABLE FOR TWO —
 講演：近藤正晃ジェームス
 (特定非営利活動法人 TABLE FOR TWO International 共同代表理事)

2009年9月16日(水) 午後4時～6時 北京外国語大学逸夫楼
 2009年9月17日(木) 午後6時～8時 上海財経大学国際工商管理学院
 主催：関口グローバル研究会(SGRA)
 協力：特定非営利活動法人 TABLE FOR TWO International
 協賛：国際交流基金北京日本文化センター、(財)渥美国際交流奨学財団

■ フォーラムの趣旨

開発途上国の飢餓と先進国の肥満や生活習慣病に同時に取り組む、TABLE FOR TWO という日本発の社会貢献運動の創始者、近藤正晃ジェームスさんにご講演いただきます。TABLE FOR TWO とは、先進国の食卓に出される健康的な食事が、開発途上国の食卓の学校給食に生まれ変わることを意味します。2007年に始められた活動ですが、協力企業はどんどん増え、たくさんの日本のメディアにとりあげられています。日中同時通訳付き。SGRAは、民間人による公益活動を、北京をはじめとする中国各地の大学等で紹介するフォーラムを開催していきたいと思っています。

■ 概要報告

【北京】

第4回チャイナフォーラム(北京)は体の丈夫そうな宋剛君の強力かつ情熱的な勧めで、9月16日に北京外国語大学の日本学研究センター三階の多目的ホールにて開催された。2006年に北京大学で開催したパネルディスカッション「若者の未来と日本語」、2007年に北京大学と新疆大学で開催した緑の地球ネットワーク高見邦雄事務局長の講演「黄土高原緑化協力の15年：無理解と失敗から相互理解と信頼へ」、2008年に北京大学と延辺大学で開催したアジア学生文化協会工藤正司常務理事の講演「一燈やがて万燈となる如く～アジアの留学生と生活を共にした協会の50年～」に引き続き第4回目であった。今回のテーマは「TABLE FOR TWO～世界的課題に向けていま若者ができること～」で、講演者は特定非営利活動法人 TABLE FOR TWO International の近藤正晃ジェームス共同代表理事だった。



9月16日午後4時、フォーラムは定刻どおり開始し、SGRA代表の今西淳子さんと国際交流基金北京日本文化センターの小島寛之副所長の開会挨拶の後、司会の孫健軍さん(北京大学/SGRA)は、フロアにいる70名近くの入場者に近藤正晃ジェームスさんを紹介した。近藤さんは、世界の死亡・病気の原因のトップ2は肥満と飢餓だと説明し、その同時



解消に取り組もうという TABLE FOR TWO(TFT) の創立趣旨を紹介し、近年の活動成果および数多くの興味深い事例を生々しく語った。

具体的には、2007年2月に日本で始まった TFT 活動は、2009年6月時点では鹿島建設を含む130の企業、衆参両議院をはじめとする多くの官公庁や、地方自治体、大学、病院など200以上の事業所における実施協力を得たという。活動の内容は、日本などの先進国において、実施団体に所属する人々の一食分のカロリーを減らすと約20円程度が節約でき、それを TFT 事務局を通してアフリカなどの発展途上国の学校に寄付し、子供たちの給食にするというシステムだそうだ。さらに、事例としては、ウガンダ、ルワンダ、マラウィの三カ国における実施を通じて、子供たちの「栄養状態は改善、健康増進につながる」、「給食導入後の半年から一年で生徒数が2倍近くに増加」、「最終学年の50人のうち、42人が高等教育への進学試験に合格」といった成果を収め、これまでの累計支援定食数は104万食を超えているという。さらに、レストラン、宅配、コンビニなど業界への活動拡大も着々と進めており、地球範囲での実施を今後の課題として視野に入れていると近藤さんは抱負を語った。

近藤さんの目を見張らせる志と TFT 活動の成果の一つであるその健康ぶりと若さに驚いた参加者から、「カロリーオフのメニュー」、「TFT 活動の運営システムと監督規制」、「中国企業との連携可能性」など、多岐に亘って数多くの質問が出され、会場ではインターアクションのムードが高まり、予定を延長して6時15分、李恩民さん(桜美林大学/SGRA)の閉会挨拶で第4回チャイナフォーラムは幕を下ろした。

懇親会は北外賓館のレストランで行い、自由参加で学生さんを中心に40人程度が集まった。宴会中、今回のフォーラムの北京担当の宋剛君は熱で耳鳴りがしていたが、「近藤さんは行動的だ、援助金でご馳走してくれたね、早く北京で活動拡大してほしい」という参加者の声が聞こえた。今後の北京の立場と今夜の宴会の勘定者を間違えられたが、とりあえず TFT という活動を中国で初めて知ってもらえたことで、宋君の熱がだいぶ下がったようだった。

(文責：北京外国語大学/SGRA 宋 剛)

【上海】

9月17日夕方、SGRA 上海フォーラムは上海财经大学にて開催された。テーマは「Table For Two」で、前日北京フォーラムと同じ内容であった。北京の講演には70名の学生が参加したことを知って、本学ではどのぐらいの学生が集まるのかとても不安であった。というのは、上海财经大学は規模が小さく、経済や経営関連の分野を専攻している学生が大半であり、日本語学科の学生は一学年にクラスしかないから、日本のことや社会貢献、ボランティアなどにそれほど興味を持つのか分からないからだ。さらに、その日はあいにく天気が悪く、朝から大雨が続いていたので、一

層学生の出足を心配した。

ところが、講演の20分前までがらがらだった教室は、定刻の6時になると、学生さんが次々と入り、教室の大半を埋めた。結局、100人近くの学生が出席してくれた。翌日学生さんに確認したところ、参加者には学部2年生と3年生が多かったが、1年生と4年生もいる。また、修士課程の学生も何人かいた。日本語学科の学生は全体の三分の一に過ぎなかった。

スクリーンに映されたPPTは日本語のもので、講師の近藤さんも日本語でスピーチをしていたが、北京大学/SGRAの劉健さんの素晴らしい



逐次通訳によって、講演はスムーズに進んでいた。質疑の時間に入ると、学生さんから沢山の質問が出された。中には、講師に日本語で直接質問した人も何人かいたが、その場合も通訳が必要なので、結構時間がかかった。講演終了後も近藤さんを囲んでさらに質問する学生もいた。その熱心ぶりに感服したが、終了時間は予定より1時間も延長された。

逐次通訳の講演は効率が落ちることを覚悟していたが、3時間ほどになるとは思わなかった。また、会場は普通の教室だったので、臨時に増加したマイクの調子も良くなかったなど、改善すべき点もいくつかあった。とはいえ、講演は概ね成功したといえる。経済学専攻の学生さんからは日本語専攻者とは違った質問が出たと近藤さんが言う。実際、今回のフォーラムが成功裏に終わった主な要因は、何より講師の近藤さんの素晴らしいスピーチである。その話し方はとても魅力的で、大学の先生よりも上手だなあと感心した。

回収されたフォーラムに対するアンケート調査を見ると、参加者のほとんどがフォーラムの主旨を理解し、収穫を得たと回答した。講演を通じて、日本発の民間人によるグローバルな社会貢献運動を中国大学生に伝え、彼らや彼女たちの視野を広げることができたと思う。これからは、貧困や環境汚染といった世界共通の問題を真剣に考え、TFTのような社会貢献運動に取り組んでいくことを中国の若者に期待したい。

(文責：上海財経大学/SGRA 範建亭)

初めての上海虹橋→東京羽田のシャトル便は極めてスムーズで、今回使った全ての便と同様、満席でした。東アジアの人の交流はますます盛んになってきていると旅行する度に感じます。そして、いつものように、中国の発展のパワーとエネルギーに圧倒されました。

フォーラム前の南開大学の国際シンポジウム「グローバル化時代における東アジアの制度変革」へのオブザーバー参加から、フォーラム後の上海万博の工事現場見学まで、とても充実した一週間でした。南開大学の楊棟梁先生、宋志勇先生、上海設計学院のPan Zhengwei先生をはじめ、ご支援ご協力いただきました皆さまに、心から御礼申し上げます。

宋剛さんと範建亭さんのご尽力のおかげで、北京と上海で開催した今年のチャイナフォーラムも無事盛会裡に終わりました。今年の講師の近藤さんは、参加者と年齢も近く、トピックも現代的で、聴く人を惹きつける力をもっていたので、両会場とも大変良い雰囲気での交流ができたと思います。上海財経大学では、社会起業ということ自体に関心のある学生さんが自分達の活動レポートを配布し、若者間でグローバル化の潮流が伝わるスピードの早さに驚きました。SGRAチャイナフォーラムは、来年も9月に、今度は北京とフフホトで開催したいと思っています。みなさんは是非ご予定ください。

(文責：今西淳子)

■ SGRAチャイナフォーラムの写真は下記URLよりご覧ください。

<http://www.aisf.or.jp/sgra/photos/>

第2回SGRAモンゴルプロジェクト

ウランバートル国際シンポジウム

『世界史のなかのノモンハン事件（ハルハ河会戦）』

日 時：2009年7月3日～4日（金、土）

会 場：モンゴル・日本センター

4カ国同時通訳付き

ノモンハン事件（ハルハ河会戦）70周年を記念して、2009年7月3、4日の2日間、モンゴル国家文書管理総局、関口グローバル研究会（SGRA）、モンゴル科学アカデミー歴史研究所が共催、在モンゴル日本大使館、アメリカ大使館、ロシア大使館が後援、東京外国語大学、モンゴル国立大学歴史研究院、モンゴル国防省国防科学研究所軍事史研究センター、モンゴル科学アカデミー国際研究所、モンゴル・日本人材開発センターが協力、日本国際交流基金、霞山会、渥美国際交流奨学財団、守屋留学生交流協会、アメリカのアラタニ財団、韓国の未来人力研究院、及びモンゴル国のモンゴル・テレコム（Telecom Mongolia）、ロシア財団 NGO（Russian Foundation NGO）、モンゴル・アーカイブズと歴史研究者連合会“On tsag”（“On tsag” association of Mongolian Archivists and Historians）、“Tsom” Consulting の協賛で、国際シンポジウム「世界史のなかのノモンハン事件（ハルハ河会戦）——過去を知り、未来を語る——」が、モンゴル国首都ウランバートルで開催された。

7月3日、のどかで、あたたかい日だった。午前9時、モンゴル・日本センターの多目的室で盛大な開会式をおこない、モンゴル国会議員、法務内務大臣 Ts. ニヤムドルジ（Ts. Nyamdorj）氏、モンゴル科学アカデミー総裁 B. チャドラー（B. Chadraa）氏、関口グローバル研究会代表今西淳子氏が挨拶と祝辞を述べた。Ts. ニヤムドルジ大臣の挨拶では、戦略的な視点から、ハルハ河戦争を評価し、研究者たちと率直に話しあって、今後の世界平和と国際的な相互理解を促進したいという意を伝えた。英語で挨拶した今西さんは、同シンポジウム実現までの経緯、ウルズィーバートル局長との付き合い、田中克彦先生、ゴールドマンさんとの出会いなどを簡潔に述べ、参加者に感謝しながら、この戦争をめ



シンポジウム会場で在モンゴル米大使を囲んで

ぐる研究の更なる発展を展望した。続いて、モンゴル科学アカデミー歴史研究所長 Ch. ダシダワー教授、ロシア連邦科学アカデミー会員、シベリア支部ブリヤート支局長 B. V. バザロフ (B. V. Bazarov) 教授、一橋大学田中克彦名誉教授、そして、アメリカのユーラシア・東ヨーロッパ評議会の S. D. ゴールドマン (Stuart D. Goldman) 博士が基調報告をおこなった。在モンゴル日本大使 城所卓雄閣下、ロシア公使、アメリカ大使館の代表が開会式に出席し、在モンゴルアメリカ大使 M. C. ミントン (Mark C. Minton) 閣下も途中から参加した。休憩の忙しいひと時を裂いて、今西さんがミントン大使に挨拶し、私も大使に紹介され、一緒に記念写真をとった。ミントン大使は穏やかで、とてもやさしいという印象だった。日本語が流暢で、びっくりした。たずねてみたら、在日本アメリカ大使館で長年勤務したことがあったのだ。

昼には、参加者たちがモンゴルの国会議事堂の前で記念写真を撮ってから、アルタイというバイキングの焼肉店で食事をした。

午後は、東京外国語大学 二木博史教授、岡田和行教授、愛知大学法学部ジョン・ハミルトン (John Hamilton) 教授、内モンゴル大学 チョイラルジャブ (Choiraljav) 教授、モンゴル国外務省 Ts. バトバヤル (Ts. Batbayar) 局長、モンゴル科学アカデミー会員、国立大学 J. ボルドバートル (J. Boldbaatar) 教授、文化芸術大学学長 D. ツェデブ (D. Tsedev) 教授、国防科学研究所長 B. シャグダル (B. Shagdar) 少将、文書総局 ウルズィーバータル局長、ロシア連邦科学アカデミー極東研究所長 S. G. ルジャニン (S. G. Luzyanin) 教授等 10 人がそれぞれの分野を代表して、大会報告をおこなった。

夕方、モンゴル国大統領官邸のイフ＝テンゲル (Ih Tenger) 迎賓館で歓迎宴会をおこなった。ちょうど雨が降り始めて、今西さんが、昨年のシンポジウムの招待宴会での挨拶の続きとして、たくみに雨を話題に祝辞を述べて、参加者からの拍手喝采を受けた。ウルズィーバータル局長が「今年はもう雨が降らないでしょう。明後日、草原に行くとき、必ず晴れたいい天気になる」と自信满满で返事をした。宴会中、モンゴルの伝統の歌や馬頭琴の演奏が披露された。在モンゴル日本大使館 藁谷栄参事官が招待に応じて出席し、今後の SGRA のモンゴルプロジェクトについて、いろいろ助言して下さった。

翌日の7月4日午前、モンゴル・日本センターの多目的室、ゼミナー室1・2で、「ノモンハン事件 (ハルハ河会戦) の真実：多元的記憶と多国間アーカイブズの比較の視点から」「ノモンハン事件に対する理解の国際比較と現状」「ノモンハン事件に関する報道、文学、映画、音楽、美術」の三つの分科会をおこなった。シャグダル (B. Shagdar) 少将、二木博史教授、ツェデブ学長、ルジャニン所長、ボラグ教授等が各分科会の議長をつとめた。

夕方、在モンゴル日本大使館公邸で、日本大使館と SGRA 共同で招待宴会をおこなった。各国の研究者 60 名あま



モンゴル国家文書管理総局局長挨拶



モンゴル国家文書管理総局の展示室で局長挨拶

りが集まって、城所卓雄大使が英語で挨拶を述べた。研究者たちが乾杯しながら歓談し、意見交換をした。城所大使はやさしく、参加者の要求に応じて、それぞれと記念写真を撮った。これまで、モンゴル国で、世界モンゴル学会など国際シンポジウムをおこなった際、日本大使館は日本の研究者を招待したことがあるが、各国の研究者と一緒に招待したのは、今回がはじめてだったそうで、たいへん有意義なことだと、日本の研究者だけではなく、海外の参加者からも好評だった。

シンポジウムはモンゴル語、英語、日本語、ロシア語の同時通訳がつき、効果的だった。2日間の会議中、モンゴル、日本、アメリカ、ロシア、イギリス、中国、韓国などの研究者が40本の論文（共同発表もふくむ）を発表し、ウランバートルにある各大学、研究機関の研究者、台湾国立政治大学民族学部藍美華教授、東京大学、東京外国語大学の研究者、留学生、中国社会科学院の訪問学者など180人ほどが参加した。会議の影響は大きく、モンゴルのモンツァメ国営通信社、『Udrin sonin（日報）』、UBSなど10数社が報道した。シンポジウムの発表の詳細については、別稿にゆずりたい。これまで、ノモンハン戦争について、日本、モンゴル、ロシアが数回シンポジウムをおこなってきたが、いずれも各国各自の主催であった。ノモンハン事件をテーマに、日本とモンゴル国の諸団体が共同主催し、同事件に関わった国の研究者だけでなく、世界各国の研究者が集まって、国際学術シンポジウムを開催したことは、今回が初めてであった。田中克彦先生の言葉を借りると、「ノモンハンが軍事にとどまらず、多面的な文脈の中で明らかにされること」が、今回のシンポジウムのもっとも重要なところであった（田中克彦「ノモンハン戦争とは何だったのか、奪われた民族統合の夢」『朝日新聞』、2009年6月25日夕刊）。

（文責：ボルジギン・フスレ 東京大学大学院総合文化研究科日本学術振興会外国人特別研究員）



シンポジウム会場



モンゴル日本人材開発センター



在モンゴル日本大使公邸で日本大使を囲んで



Sekiguchi Global Research Association

関口グローバル研究会

活動報告（2009年4月～2010年3月）

☆ SGRA フォーラムを開催

☆ SGRA レポートを発行

☆メルマガ【SGRAかわらばん】無料購読メールを配信（購読者 950名）；

■ 2009年6月7日 第35回 SGRA フォーラム「テレビゲームが子どもの成長に与える影響を考える」

（於：東京国際フォーラムガラス棟 G402 会議）

総合司会：ナポレオン（日産自動車総合研究所研究員、SGRA 研究員）

【発表1】「現代社会はテレビゲームをどう受容してきたか～「テレビゲームの影響」を多面的に捉えるために～」

大多和直樹（東京大学大学院総合教育研究センター・助教）

【発表2】「テレビゲームと子供の健康」

佐々木 敏（東京大学大学院医学系研究科教授）

【発表3】「テレビゲームが子どもの心理に与える影響」

渋谷明子（慶應義塾大学メディアコミュニケーション研究所研究員）

【パネルディスカッション】

進行：江蘇蘇（東芝セミコンダクター社勤務、SGRA 研究員）

パネリスト：上記講演者

→ SGRA レポート No.51

■ 2009年7月25日 第36回 SGRA フォーラム in 軽井沢「東アジアの市民社会と21世紀の課題」

（会場：鹿島建設軽井沢研修センター）

総合司会：林 少陽（東京大学総合文化研究科准教授、SGRA 研究員）

【基調講演】「市民社会を求めての半世紀 ヨーロッパの軌跡とアジア」

宮島 喬（法政大学大学院社会学研究科教授）

【発表1】「日本の市民社会と21世紀の課題 「市民社会」から「市民政治」へ」

都築 勉（信州大学経済学部教授）

【発表2】「韓国の市民社会と21世紀の課題 「民衆」から「市民」へ～植民地・分断と戦争・開発独裁と近代化・民主化～」

高 熙卓（延世大学政治外交学科研究教授、SGRA 研究員）

【発表3】「フィリピンの市民社会と21世紀の課題 フィリピンの「市民社会」と「悪しきサマリア人」

中西 徹（東京大学大学院総合文化研究科教授）

【発表4】「台湾・香港の市民社会と21世紀の課題 「国家」に翻弄される「辺境東アジア」の「市民」～脱植民地化・脱「辺境」化の葛藤とアイデンティティの模索～

林 泉忠（ハーバード大学客員研究員、琉球大学准教授、SGRA 研究員）

【発表5】「ベトナムの市民社会と21世紀の課題 変わるベトナム、変わる「市民社会」の姿」

ブ・ティ・ミン・チィ（ベトナム社会科学院人間科学研究所研究員、SGRA 会員）

【発表6】「中国の市民社会と21世紀の課題」 模索する「中国的市民社会」

劉 傑（早稲田大学社会科学総合学術院教授）

【パネルディスカッション】「東アジアの市民社会と21世紀の課題」

進行：孫 軍悦（明治大学政治経済学部非常勤講師、SGRA 研究員）

パネリスト：上記講演者

→ SGRA レポート No.52

■ 2009年12月5日 第37回 SGRA フォーラム「エリート教育は国に「希望」をもたらすか：東アジアのエリート教育の現状と課題」

（会場：東京国際フォーラム G701 会議室）

総合司会：総合司会：羅 仁淑（国士舘大学政経学部非常勤講師、SGRA 会員）

【発表1】「日本とシンガポールにおけるエリート教育の現状と課題」

SIM Choon Kiat（東京大学大学院教育学研究科・日本学術振興会外国人特別研究員）

【発表2】韓国高校教育の現場を行く—エリート教育の観点から—

金 範洙（東京学芸大学 国際戦略推進本部 特任教授、ソウル教育大学校招聘教授、SGRA 研究員）

【発表3】市場化のなかの中国のエリート教育

張 建（東京大学大学院教育学研究科）

【総括・コメント】「希望学からみたエリート教育」

玄田有史（東京大学社会科学研究所教授）

【パネルディスカッション】

パネリスト：上記講演者

→ SGRA レポート No.54

第35回



第36回



第37回



■ 渥美奨学生 2009 年度著作・論文・特許等リスト

【1995 年度奨学生】

■ 高 偉俊

1. 高偉俊、任洪波、深堀秀敏、渡辺俊行、「蓄熱タンクと連携した家庭用コージェネレーションシステム導入の最適化に関する研究」『日本建築学会環境系論文集』、第 74 巻第 643 号、1091-1097、2009/09
2. Weijun GAO, Qunyin GU, Jiangxing REN, Yutaka TONOOKA, Haifeng LI, "Kitakyushu' s Initiative on Energy Saving and Carbon off of a City", 6th International Symposium of Asia Institute of Urban Environment Energy Conservation and Carbon off in Asia City, Changchun, China, September 20-23, 2009
3. Weijun Gao and Hongbo Ren, "Optimization of Distributed Energy Resources with a Mixed Integer Linear Programming", pp.2347-2357, Sixth International Symposium on Management Engineering, Dalian, China, August 5-7, 2009
4. Weijun Gao, Hongbo Ren, Haifeng Li, Yutaka Tonooka, "Development of Optimization Model and Case Study for Biomass Energy System in Japan", 85-92, the International Conference ORBIT 2009, Beijing, China, 19-21 November 2009
5. Hongbo Ren, Weijun Gao, "A MILP Model for Integrated Plan and Evaluation of Distributed Energy Systems", Applied Energy, Volume 87, Issue 3, Pages 1001-1014, March 2010
6. Hongbo Ren, Weijun Gao, Weisheng Zhou, Ken' ichi Nakagami, "Multi-criteria Evaluation for the Optimal Adoption of Distributed Residential Energy Systems in Japan", Energy Policy, Volume 37, Issue 12, pp.5484-5493, December 2009
7. Xuan, Ji, Gao, Weijun, "Feasibility of Combined Heat and Power System in the Central Business District of Shanghai", Transactions of the Canadian Society for Mechanical Engineering, Vol.33, No.1, 39-50, 2009
8. 官冬杰、高偉俊、深堀秀敏、渡利和、「Study on Integrated Assessment of Urban Ecosystem Health in Chongqing, China」『日本建築学会計画系論文集』第 74 巻 第 638 号 881-888 2009
9. 玄姫、高偉俊、韋新東、「上海市超高層複合施設のコージェネレーションシステムの導入における省エネルギー効果の評価及び影響因子の感度分析」『日本建築学会環境系論文集』第 74 巻 第 640 号 745-752 2009

■ 施 建明

1. SQ. Liu, J. Shi, J. Dong, S.Y. Wang (2010), A Modified Penalty Function Method for Minimization with Inequality Constraints, International Journal of Optimization: Theory, Methods and Applications, March 2010.
2. X. Zhao and J. Shi (2010), Evaluation of mutual funds using multi-dimensional information, Frontiers of Computer Science in China (Springer), 2010.
3. A Mikami and J. Shi (2009), A Modified Algorithm for Sequence Alignment Using Ant Colony System, IPSJ Transactions on Bioinformatics, 2, 63-73.
4. M. Yu, H. Inoue, S. Takahashi and J. Shi (2009), Dynamic portfolio selection with uncertainty, International Journal of Uncertainty, Fuzziness and Knowledge-Based Systems, 2, 237-250.

【1996 年度奨学生】

■ 南 基正

1. 「日韓船舶返還交渉に関する研究—第一次会談船舶文化委員会の交渉を中心に」『日本研究』（韓国外国語大学日本研究所）、2010 年 3 月 30 日<韓国語>
(共著)
2. 『朝鮮半島の和解・協力 10 年—金大中・盧武鉉政権の対北朝鮮政策の評価』御茶の水書房、2009 年 11 月。[第五部第二章の「韓国から見た日朝関係」を著述] <日本語>
3. 『議題で見た日韓会談 (外交文書公開と日韓会談の再証明 2)』ソニン出版社、2010 年 3 月。[「第四部第一章の「日韓船舶返還交渉に関する研究」を著述」] <韓国語>

■ トレーデ、メラニー

1. "Becoming Intense, Becoming Animal, Becoming...", exhibition catalogue, co-editor with Martina Köppel-Yang, Heidelberg: Kehrer Publishers, 2009.

2. "--Vorwort: Körperkunst / Preface: Body Art," in *Becoming Intense, Becoming Animal, Becoming...*, 2009, 7-11.

【1997 年度奨学生】

■ デマイオ、シルバーナ

1. "Lo scrittore abita qui. Shiba Ryōtarō, i libri e l' architetto" [Shiba Ryōtarō, his books and the architect], in Luisa Bienati & Matilde Mastrangelo (eds.), *Un'isola in levante. Saggi sul Giappone in onore di Adriana Boscaro*, ScriptaWeb, 2010, pp. 349-362 [ISBN 978-88-6381-107-0].

■ カノックワン・ラオハブラナキット片桐

1. 「日本人教師と協働したタイ人教師の体験と本音 - 『正確さ』重視の「指導観」を中心に -」『大阪大学フォーラム 2009 東南アジアにおける日本語・日本文化教育の 21 世紀的展望 - 東南アジア諸国と日本との新たな教育研究ネットワークの構築』大阪大学フォーラム 2009 実行委員会

■ 金 外淑

(雑誌論文)

1. 金外淑：糖尿病こころと行動のキーコンセプトー糖尿病患者のセルフケアに「認知的再体制化」をどのように生かすか、医学書院、糖尿病マスター Vo7、No.5、429-435、2009

2. 村上正人、松野俊夫、金外淑 その他：線維筋痛症の痛みをどうとらえるか ～慢性疾患のモデル疾患として～心身医学 49(8)：893-902、2009

(著書)

3. 金外淑：教育プログラム 行動変容技法とヘルスプロモーション第 4 章 心臓リハビリテーション実践マニュアル 中山書点 282-289、2009

4. 金外淑：認知療法 心療内科実践ハンドブック症例に学ぶ用語集 マイライフ社 160-171、2009

(翻訳)

5. Korean Conflict, Stress Effects of ストレス百科事典, 丸善出版 563-565, 11 月

■ ウィリアムズ、ダンカン

1. Helen Hardacre and the Study of Japanese Religion. Nagoya: Nanzan Institute of Religion and Culture, 2009. 197 pp. [Co-edited with Barbara Ambros and Regan Murphy]

■ 張 紹敏

1. P. Huang, SS Zhang**, and C. Zhang The two-sides of cytokine signaling and glaucomatous optic neuropathy. *JOBDI* 2009; 2:78-83.

2. Huang P, Qi Y, Xu YS, Liu J, Liao D, Zhang SS, Zhang C. Serum cytokine alteration is associated with optic neuropathy in human primary open angle glaucoma. *J Glaucoma*. 2009 Sep 2. [Epub ahead of print]

3. Qi S, Wang Y, Zhou M, Ge Y, Yan Y, Wang J, Zhang SS, Zhang S. Mitochondria-localized glutamic acid-rich protein (MGARP/OSAP) is highly expressed in retina that exhibits a large area of intrinsic disorder. *Mol Biol Rep*. 2010 Jan 28. [Epub ahead of print]

4. Pinzon-Guzman C, Zhang SS, Barnstable CJ. Protein kinase C regulates rod photoreceptor differentiation through modulation of STAT3 signaling. *Adv Exp Med Biol*. 2010; 664:21-8.

【1998 年度奨学生】

■ 何 祖源

(論文)

1. Yosuke Mizuno, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, "Measurement range enlargement in Brillouin optical correlation-domain reflectometry based on double-modulation scheme," *OSA Optics Express*, Vol. 18, No. 6, pp. 5926-5933, Mar. 2010

2. Xijing Wang, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, "Reduction of polarization-fluctuation induced drift in resonator fiber optic gyro

- by a resonator with twin 90° polarization-axis rotated splices,” OSA Optics Express, Vol. 18, No. 2, pp. 1677-1683, Jan. 2010
3. Yosuke Mizuno, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, “Measurement range enlargement in Brillouin optical correlation-domain reflectometry based on temporal gating scheme,” OSA Optics Express, Vol. 17, No. 11, pp. 9040-9046, May 2009
4. Weiwen Zou, Zuyuan He, Kwang-Yong Song, and Kazuo Hotate, “Correlation-based distributed measurement of dynamic grating spectrum generated in stimulated Brillouin scattering in a polarization-maintaining optical fiber,” OSA Optics Letters, Vol. 34, No. 7, pp. 1126-1128, Apr. 2009
5. Yosuke Mizuno, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, “One-end-access high-speed distributed strain measurement with 13-mm spatial resolution based on Brillouin optical correlation-domain reflectometry,” IEEE Photonics Technology Letters, Vol. 21, No. 7, pp. 474-476, Apr. 2009

(特許)

1. 何祖源、保立和夫、古敷谷優介、伊藤文彦、ファン・シンユー、“光周波数領域反射測定方法および光周波数領域反射測定装置” 出願者 東京大学、日本電信電話株式会社、特許権、特願 2010 - 037762, 2010 年 2 月 23 日
2. 何祖源、保立和夫、久保田寛和、“フォトニックバンドギャップファイバ” 出願者 日本電信電話株式会社、特許権、特願 2010 - 034755, 2010 年 2 月 19 日
3. 何祖源、保立和夫、川西悟基、“光ファイバを用いた方向性結合器とその製造方法” 出願者、東京大学、日本電信電話株式会社、特許権、特願 2009 - 169184, 2009 年 7 月 17 日
4. 何祖源、保立和夫、ファン・シンユー、伊藤文彦、古敷谷優介、“光リフレクトメトリ測定方法及び光リフレクトメトリ測定装置” 出願者、東京大学、日本電信電話株式会社、特許権、特願 2009 - 169162, 2009 年 7 月 17 日
5. 何祖源、保立和夫、山下ケンジ・ホドリゴ、古敷谷優介、伊藤文彦、ファン・シンユー、“光周波数領域反射測定方法及び光周波数領域反射測定装置” 出願者、東京大学、日本電信電話株式会社、特許権、特願 2009 - 122286, 2009 年 5 月 20 日 .
6. 何祖源、保立和夫、高橋央、ファン・シンユー、伊藤文彦、古敷谷優介、“光リフレクトメトリ測定方法及び光リフレクトメトリ測定装置” 出願者、東京大学、日本電信電話株式会社、特許権、特願 2009 - 122269, 2009 年 5 月 20 日

■ 胡 潔

1. 「閨怨詩と恋歌—表現の「型」の衝突と融合—」(平野由紀子編『平安文学新論—国際化時代の視点から—』風間書房 2010 年 3 月)

■ 金 宰晟

1. Early Buddhist teaching 1 (仏陀と共に 初期佛教散策 1) ソウル: Han-on Publishing 2010.3
2. Mental healing from Early Buddhism - Exploring of possibility of Buddhist social welfare (初期佛教の立場から見た心の治癒 - 佛教社会福祉の可能性摸索) 大韓佛教曹溪宗 社会福祉財團 佛教社会福祉? 研究 8 号, pp. 9-46 2009.12
3. Enlightenment and social commitment of Early Buddhism: Focused on teaching to lay people of the Buddha (初期佛教の悟りと社会参与 - 仏陀の在家者教化を中心として) 佛教学研究 24 号, pp. 57-105. 2009.12
4. History and current situation of studies on the meditation (冥想研究の歴史と現況) 韓国佛教心理治療學會 2009 年 春季學術大會發表論文 2009.5

■ 李 周浩

1. 佐田貴章、李周浩、“インテリジェントモジュールを用いた人とコミュニケーション可能なりソースの提案”、日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会 2009, 2A1-C22(1)-(2), 2009.5.
2. 高橋亮、李周浩、“移動ロボットを用いた建物内における訪問者案内画像の自動生成”、日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会 2009, 2P1-F09(1)-(2), 2009.5
3. Jeong-Eom Lee, Satoshi Miyashita, Kousuke Azuma, Joo-Ho Lee, Gwi-Tae Park, “Anamorphosis Projection by Ubiquitous Display in Intelligent Space” , HCI (6), pp 209-217, 2009.7
4. Joo-Ho Lee, Seong-Oh Lee, Ryuhei Sakurai and Tatsuya Nishizawa, “Environment memory storing and recalling functions in Intelligent Space” , 18th IEEE International Symposium on Robot and Human Interactive Communication(RO-MAN), pp 206-211, 2009.9
5. Joo-Ho Lee, Satoshi Miyashita and Kouseke Azuma, “Making Environments as Canvases -Ubiquitous Display, from 2D to 3D-” , 18th IEEE International Symposium on Robot and Human Interactive Communication(RO-MAN), pp 212, 2009.9

■ マイリーサ

1. 「环境保护事业中的社会互动关系」小長谷有紀等編『地理环境与民俗文化遗产』知识产权出版社 2009 年 3 月
2. 「環境保全事業における新たな社会秩序の構築」今西淳子, Demberel, Husel Borjigin 『国際シンポジウム「アーカイブ・歴史・文学・メディアからみたグローバル化のなかの世界秩序——東北アジア社会を中心に——』論文集 (2008 年 6 月 23 ~ 25 モンゴル国ウランバートル) 風響社 2009 年
3. 片岡慎泰、マイリーサ「NPO のまちづくりと社会教育活動——NPO 法人『境川緑のルネッサンス』の景観形成活動の事例研究——」『学苑』823 号 (総合教育センター・国際学科特集) 昭和女子大学近代文化研究所 2009 年 5 月

■ 孫 艶萍

1. Yanping Sun, Peter Lindholm, James Butler, Ronn Walvick, Jessica Gereige, Xiangzhi Zhou, Haihua Bao, Stephen H. Loring, Massimo Ferrigno, Mitchell Albert, Marked pericardial inhomogeneity of specific ventilation at total lung capacity and beyond in normal subjects and elite divers, *Respir Physiol Neurobiol.* 2009, 169 (1), 44-49.
2. Xiangzhi Zhou, Haihua Bao, Ayumi Takakura, Jing Zhou, Mitchell Albert, Yanping Sun, Polycystic Kidney Disease Evaluation by MRI in Ischemia-Reperfusion Injured PKD1 IKO Mouse Model: Comparison of T2 Weighted FSE and True-FISP, *Investigative Radiology.* 2010, 45(1):24-28
3. Junichi Tokuda, Melanie Schmitt, Yanping Sun, Samuel Patz, Yi Tang, Carolyn E Mountford, Nobuhiko Hata, Lawrence L Wald, Hiroto Hatabu. Lung motion and volume measurement by dynamic 3D MRI using a 128-channel receiver coil. *Academic radiology.* 2009 Jan;16(1): 22-7
4. EY Lee*, Y Sun*(co-first), D Zurakowski, H Hatabu, U Khatwa, MS Albert. Hyperpolarized 3He MR Imaging of the Lung: Normal Range of Ventilation Defects and PFT Correlation in Young Adults, *J Thoracic Imaging,* 24(2), 110-114, 2009 (* these two authors had equal contributions).
5. Ayumi Takakura, Leah Contrino, Xiangzhi Zhou, Joseph V. Bonventre, Yanping Sun, Benjamin D. Humphreys1 and Jing Zhou, Renal Injury is a Third Hit Promoting Rapid Development of Adult Polycystic Kidney Disease, *Human Molecular Genetics,* Vol 18, 2523-2531, 2009.
6. Lisa Marie Campana, Jennifer Kenyon, Sanaz Zhalehdoust-Sani, Yang-Sheng Tzeng, Yanping Sun, Mitchell S. Albert, and Kenneth R. Lutchen, Probing Airway Conditions Governing Ventilation Defects in Asthma via Hyperpolarized MRI Image Functional Modeling, *J Appl Physiol,* 106, 1293-1300, 2009

【1999 年度奨学生】

■ 李 鋼哲

(著書)

1. 『東アジア地域協力の共同設計』(共著・2009.10 西田書店・「第 8 章 東北アジアの地域協力の 20 年」、pp.154~170)
2. 『われら地球市民—かるがると国境を越える』(共著・Japan Book 出版・2010 年 2 月、「中国人の近隣感覚」 pp.184-87)
3. 『経済から見た北朝鮮』(共著・明石書店・2010 年 3 月、第 6 章「中朝経済関係の現状と展望」 pp.143-58)
(新聞、雑誌記事)
1. 「民族政策のグローバル的な新思考」2009.7.16 『中文導報』「オピニオン」(インタビュー)
2. 「オバマの核廃絶宣言と東北アジアの平和」2009.9.14 『北陸中日新聞』「考論」
3. 「延辺の発展には人材誘致戦略と政策対策が緊急課題」2009.9.5 『黒龍江新聞』(中国・朝鮮語・インタビュー)

■ ブティ ミン チ -

1. Rights of Children: From Recognition to Practice. *Human Studies,* 44,28-34.
2. 「ベトナムにおける人権問題の研究—その成績、課題、チャレンジ」『人間、文化、人権及び開発』(305 - 332) Hanoi, Vietnam

■ 楊 接期

1. Yang, J. C., & Lin, Y. L. (2010). Development and Evaluation of an Interactive Mobile Learning Environment with Shared Display Groupware. *Educational Technology & Society,* 13(1), 195-207.
2. Yang, J. C., & Chien, K. H. (2009). A Digital Game-Based Learning System on Energy Education. In *Proceedings of International Workshop on Digital Game-Based Learning.* Hong Kong.
3. Yang, J. C., Chien, K. H, Lin, Y. L, & Shen, C. H. (2009). The Effects of Spatial Ability for Elementary Students in a Digital

- Game-Based Geometric Game. In Proceedings of Technology Enhanced Learning Conference (TELearn 2009). Taipei, Taiwan.
4. Yang, J. C., Chien, K. H., Chang, H. D., & Liu, B. J. (2009). Beenergy: A Digital Game-Based Learning System on Energy Education. In Proceedings of the International Workshop on Research and Practice of Advanced Learning Technologies (RePALT 2009). Tokyo, Japan. 13-15.
5. Yang J. C., Sung, C. W., & Wu, Y. C. (2009). Development of a Visual Classification for Affective Movie Stories. In Proceedings of the International Workshop on Research and Practice of Advanced Learning Technologies (RePALT 2009). Tokyo, Japan. 16-19.
6. Yang, J. C., Lin, Y. L., & Chung, C. I. (2009). Developing a Film-based Learning System with English Verbal Reduced Forms for Supporting English Listening Comprehension. In Proceedings of the 4th International Conference on E-Learning and Games (Edutainment2009). Banff, Canada. 74-84.

■ 葉 文昌

1. Jean de Dieu Mugiraneza, Tomoyuki Miyahira, Akinori Sakamoto, Takashi Noguchi, Chingping Chiu, Menghsin Chen, Wenchang Yeh, "Characterization of Si Films Crystallized by RTA for Photo-Sensor Diode", Proceedings of the 16th International Display Workshops (IDW), AMD5 - 4, 2009
2. Hsinchi Chen, Wenchang Yeh, Poting Huang, Hsinyi Chiang, Poan Chen, "Direct Deposition Poly-Si Thin Films by Hydrogen Deluted Silicon Sputtering Method", Proceedings of the 16th International Display Workshops (IDW), AMDp - 47L, 2009
3. Wenchang Yeh, Chingping Chiu, Boting Huang, "Fabrication of Poly-Si TFT CMOS Inverter by Direct Stencil Mask Patterning during Sputtering Film Deposition", Proceedings of the 16th International Display Workshops (IDW), AMD2 - 4L, 2009

【2000年度奨学生】

■ 鄭 成春

1. 『気候変動に関する国際交渉の現況と示唆』、対外経済政策研究院
2. 『日本の低炭素社会戦略に関する研究』、対外経済政策研究院

■ 高 熙卓

(著訳書)

1. (単独著書) 『日本近世の公共的な生と倫理』(論衡：ソウル) 2009年10月
2. (共同著書) 『東アジアの歴史認識における重層性』(景仁文化社：ソウル) 2009年11月
3. (共同訳書、責任翻訳者) 『教養として読む日本思想史』(論衡：ソウル、原著：苅部直・片岡龍『日本思想史ハンドブック』2008、新書館) 2010年2月

(論文)

1. 「儒学的構図の再編と公共論の探求—伊藤仁斎の場合」(韓国・東洋政治思想史学会『東洋政治思想史』Vol.8-2) 2009年9月<韓国語>

■ 林 泉忠

1. 共著『コンタクトゾーンとしての島嶼における文化現象：沖縄と東アジア・太平洋島嶼地域』石原昌英・山城新・山里勝己編、東京：彩流社、2010年3月、担当部分：「調査からみた沖縄若者のアイデンティティ」
2. 共著『やわらかい南の学と思想—琉球大学の知への誘い』沖縄タイムス出版社、2008年4月、担当部分：「沖縄アイデンティティの読み方：県民の帰属意識の調査から」、106-123頁
3. 「哈日、親日、戀日：『邊陲東亞』的『日本情結』」『思想』13、台北：聯經出版、2009年12月、139-159頁
4. 「馬英九的兩岸協商機制初探」『明報月刊』(香港) 2010年3月號
5. 「兩岸對『琉球主權』認知之演變」『明報月刊』(香港) 2009年12月號
6. 「『歸亞脫美』？——日本民主黨的亞洲戰略」『明報月刊』(香港) 2009年10月號
7. 「天山腳下的『和諧』如何構築？——看新疆騷亂的本質」『明報月刊』(香港) 2009年8月號
8. 「『六四』與台灣社會的認同轉向」『明報月刊』(香港) 2009年7月號
9. 「沖縄人的釣魚島歸屬認知」『明報月刊』(香港) 2009年5月號

■ モルナール、マルギット

1. OECD Economic Surveys: Hungary (2010).
2. OECD Economic Surveys: Slovenia (2009).
3. "Storm in a Spaghetti Bowl: FTAs by BRIICS Countries" (2009), with Kozo Kiyota and Robert Stern, in *Globalisation and Emerging Economies*, OECD.
4. "Recovery and beyond: Boosting Competitiveness to Realise Indonesia's Trade Potential" (2009), with Molly Leshner, in *Globalisation and Emerging Economies*, OECD.

【2001 年度奨学生】

■ ボルジギン、ブレンサイン

1. リグデン著 佐治俊彦 ボルジギン・ブレンサイン訳『地球宣言—大草原の偉大な寓話』教育史料出版会 2009年9月
2. ボルジギン、ブレンサイン著「現代の眼差しでモンゴルを眺めよう」『富士ゼロックス小林節太郎記念基金会報』2009年12月

■ 範 建亭

1. 「中国建設業における市場参入の障壁がなぜ効かなかった」、『財経科学』2010年第2号
2. 「中国建設業の市場構造特徴およびその影響要因分析」、『建築経済』2010年第1号

■ 全 振煥

(論文)

1. 全振煥、百瀬晴基、閑田徹志、三橋博三：スマートマテリアル化した人工軽量骨材を用いた高耐久性コンクリートの開発、鹿島技研年報、No.57、2009年9月、pp.91-96.
2. 笠井浩、全振煥、和美廣喜、松井勇：石炭灰と頁岩微粉末を原料とした高強度人工軽量骨材を用いたコンクリートの強度特性と耐久性に関する実験的研究、日本建築学会構造系論文集、Vol.74、No.640、2009年6月、pp.987-993

(特許)

1. スマートマテリアル化人工軽量骨材及びその製造法並びにコンクリート混練物 2010.3

■ 梁 興国

(論文)

1. Liang, X.G.; Wakuda, R.; Fujioka, K.; Asanuma, H. "Photoregulation of DNA transcription by using photoresponsive T7 promoters and clarification of its mechanism." *FEBS J.*, 2010, 277, 1551-1561. (Selected as "Front Cover")
2. Liang, X.G.; Nishioka H.; Mochizuki, T.; Asanuma, H. "An interstrand-wedged duplex composed of alternating DNA base pairs and covalently attached intercalators." *J. Mater. Chem.*, 2010, 20, 575-581.
3. Liang, X.G.; Mochizuki, T.; Asanuma, H. "A Supra-Photoswitch Involving Sandwiched DNA Base Pairs and Azobenzenes for Light Driven Nanostructures and Nanodevices." *Small* 2009, 5, 1761-1768. (Selected as "Front Cover")
4. Liang, X.G.; Nishioka, H.; Takenaka, N.; Asanuma, H. "Construction of Photon-Fueled DNA Nanomachines by Tethering Azobenzenes as Engines." *LNCS* 2009, 5347, 21-32.
5. Liang, X.G.; Mochizuki T.; Nishioka H.; Asanuma, H. "Line up base pairs and intercalators one by one in a stable duplex." *Nucleic Acids Symp. Ser.* 2009, 53, 189-190.
6. Liang, X.G.; Kato, T. Asanuma, H. "De Novo DNA Synthesis by DNA Polymerase" in "Bacterial DNA, DNA Polymerase and DNA Helicases", Nova Science Publishers, Inc. (English) ISBN: 9781607410942 (2009).
7. 浅沼浩之、梁興国 "DNAのダイナミックな光制御" "超分子サイエンス&テクノロジー—基礎からイノベーションまで—", 国武豊喜 監修、p.941-948、エヌ・ティー・エス (2009)

(特許)

1. Liang, X.G.; Asanuma, H.; Suzuki, M.; Kato, T. "Method for DNA Amplification." JP2009-156940.
2. Liang, X.G.; Asanuma, H.; Suzuki, M.; Kato, T. "Specific Amplification of Target DNA." JP2009-145741.
3. Asanuma, H.; Liang, X.G.; Kashida, H.; Hara, Y.; Yoshida, Y.; Takase, T.; Niwa, K. "Applications of Oligonucleotide Probes." JP2009-285966.

■ スリスマンティヨ、ヨサファット テトオコ

(論文)

1. M. Baharuddin, V. Wissan, J.T. Sri Sumantyo, and H. Kuze, "Equilateral Triangular Microstrip Antenna for Circularly-polarized Synthetic Aperture Radar," Progress in Electromagnetics Research C, Vol. 8, pp. 107-120, June 2009
2. J. Amini and J.T. Sri Sumantyo, "Employing a method on SAR images for forest biomass estimation," IEEE Transaction on Geoscience and Remote Sensing, Vol. 47, No.12, pp.4020-4026, December 2009
3. M. Baharuddin, V. Wissan, J.T. Sri Sumantyo, and H. Kuze, "Development of an elliptical annular ring microstrip antenna with sine wave periphery," Progress in Electromagnetics Research C, Vol. 12, pp.27-36, January 2010
4. P.R. Akbar, J.T. Sri Sumantyo, and H. Kuze, "A Novel Circularly Polarized Synthetic Aperture Radar (CP-SAR) onboard Spaceborne Platform," International Journal of Remote Sensing, , Vol. 31, No. 4, pp. 1053-1060, 20 February 2010 (London : Taylor & Francis).

(Proceedings)

1. J.T. Sri Sumantyo, "Development of Circularly Polarized Synthetic Aperture Radar onboard Small Satellite," Japan Geoscience Union Meeting 2009, J244-006 (International Session), 18 May 2009.
2. J.T. Sri Sumantyo, "A Novel Volumetric Synthetic Aperture Radar (VolSAR) Method : Finding of Subsidence Dynamics of Bandung-Indonesia by Using JERS-1 SAR and ALOS PALSAR (1993-1998 and 2007-2008 periods)," Japan Geoscience Union Meeting 2009, Z177-004, 20 May 2009.
3. J.T.Sri Sumantyo, M. Shimada, P.P. Mathieu, and H.Z. Abidin, "Long term continuously DInSAR for volume change estimation of land deformation," European Space Agency (ESA) - Fringe Workshop 2009, November 2009 (Frascati, Italy)
4. J.T. Sri Sumantyo, Masanobu Shimada, Pierre Phillippe Mathieu, and Hasanuddin Zainal Abidin, "Long term continuously DInSAR technique for volume change estimation of subsidence," The 17th Remote Sensing Forum, The Society of Instrument and Control Engineers (SICE) Proceedings (Catalog No. 10PG0001), pp. 9-12, Tokyo Metropolitan University, Akihabara Satellite Campus, March 1, 2010
5. J. T. Sri Sumantyo, "Long Term Continuously DInSAR for Volume Change Estimation of Land Deformation," Progress in Electromagnetics Research Symposium, Session 4P1b, p.70, March 25, 2010 (Xian: PIERS)

(受賞)

2010年3月1日 J.T. スリスマンティヨ、計測自動制御学会 (SICE) リモートセンシング部会奨励賞、第17リモートセンシングフォーラム、社団法人 計測自動制御学会 計測部門 (SICE) " 長期間継続的 DInSAR による地盤沈下の体積変化の推定法 "

【2002 年度奨学生】

■ イミテ、アブリズ

1. Optical Waveguide BTX Gas Sensor Based on Poly Acrylate Resin Thin Film. Environ. Sci. Technol. 2009, 43, 5113-5116
2. Optical Waveguide Sensor of Volatile Organic Compounds Based On PTA Thin Film. Analytica Chimica Acta, 2010,658,63-67
3. Study on Formaldehyde Gas Sensitivity of Optical Waveguide Sensing Element Based on MB/PVP Thin Film, Chinese Journal of Sensors and Actuators, 2009, 22(9)1239-1242
4. Optical Waveguide Device and Its Gas Sensing Properties for Xylene, Instrument Technique and Sensor, 2010,3,6-8
5. Fabrication and optical properties of nano-LiFePO4 thin film, Journal of Functional Materials, 2010,41(1)118-120

【2003 年度奨学生】

■ 張 桂娥

(著書)

1. 「コラム 帯の違いからみる台湾の子ども読書の事情」、展示会『日本発☆子どもの本、海を渡る』展示図録、2010年2月、日本国立国会図書館 国際子ども図書館。

(翻訳)

2. 「送你一顆蘋果」〔訳〕『りんごあげるね』〔さえぐさひろこ著・低学年児童向け童話〕台北：東方出版社 2009.04
3. 「少棒隊長真命苦!! ——阿勇隊長之超級任務 1」〔訳〕『キャプテンはつらいぜ』〔後藤竜二著・中・高学年児童向け小説〕台北：三采文化出版社 2010.05

4. 「少棒隊長放輕鬆!! ——阿勇隊長之超級任務 2」〔訳〕『キャプテンらくにいこうぜ』〔後藤竜二著・中・高学年児童向け小説〕台北：三采文化出版社 2010.05

5. 「少棒隊長再加油!! ——阿勇隊長之超級任務 3」〔訳〕『キャプテンがんばる』〔後藤竜二著・中・高学年児童向け小説〕台北：三采文化出版社 2010.05

■ フスレ

1. 今西淳子、ボルジギン・フスレ編『ノモンハン事件（ハルハ河会戦）70周年——2009年ウランバートル国際シンポジウム報告論文集』風響社、2010年3月

2. Husel Borjigin, "On the Battle of Nomonkhan (Khalkhyn Gol) from the perspective of Inner Mongolia", International Academic Symposium, "The Battle of Khalkhyn Gol (Nomonkhan Incident) in the World History: Knowing the Past and talking of the Future", 2009. 7. Ulaanbaatar.

3. Husel Borjigin, "The Inner Mongolian in the Battle of Nomonkhan", the Third International Conference "Past and Present of the Mongolic Peoples", 2009. 8. Ulaanbaatar.

4. ボルジギン・フスレ「ノモンハン戦争と内モンゴル人」、国際シンポジウム「ノモンハン事件をめぐる国際情勢」、日本大学文理学部、2009年12月

■ 林 少陽

(論文)

1. 「隠喩的言語空間において「現代」と「歴史」を疑う：近年の中国長編小説について」、『群像』第64巻第5号（特集「海外文学最前線」）、講談社、2009年5月、379－387頁

2. 「日本の「新感覚派」と香港の文学」『東亜』2009年7月号（「連載：多面的華南世界<4>」）、財団法人霞山会、100－107頁

3. 「方法としての短編小説：劉以鬯の小説観」『城市文芸』総47号（第四巻第11号）、2009年12月（中国語）（著書）

4. 『「修辞」という思想：漢字圏言語論的批判理論のために』東京：白澤社、2008年11月、381pages

■ 朴 貞姫

1. 日中韓起点表現における述語動詞の意味的制限 『日本語動詞の研究』外研社 2009.10

■ 臧 俐

1. 『「初任者研修」に見る都県教育委員会施策の変容』『研究資料集』No.16、2009年1月、東海大学教育研究所、P.70～83

2. 「1990年代以降の教員の『資質』向上策」『東海大学短期大学部紀要』第42号、2009年3月、東海大学出版会、P.49～53

3. 「教員免許更新制の政策目的の究明」『東海大学短期大学部紀要』第43号、2010年3月、東海大学出版会、P.29～36

【2004年度奨学生】

■ アンボン、ベリル・ニヤメチェ

1. Rashmi Rawat, Tatiana V Cohen, Beryl Ampong, Dwight Francia, Andrea Pons, Eric P Hoffman, and Kanneboyina Nagaraju. Inflammation up-regulation and activation in dysferlin-deficient skeletal muscle. American Journal of Pathology. 2010 (accepted march 2010, would be available on line April/May)

【2005年度奨学生】

■ 包 聯群

1. 「日本の社会言語学」、『中国言語計画』第1期（創刊号）、中国言語戦略研究センター編集、商務印書館出版 2010年

■ 韓 珺巧

1. Demand Response and Open Automated Demand Response Opportunities for Data Centers, Ghatikar, G., M.A. Piette, S. Fujita, J.H. Dudley, A. Radspieler, K.C. Mares, and D. Shroyer. LBNL-3047E. January 2010

2. Northwest Open Automated Demand Response Technology Demonstration Project, Kiliccote, S., M.A. Piette, and J.H. Dudley. LBNL-2573E. April 2009
3. OPEN AUTOMATED DEMAND RESPONSE FOR SMALL COMMERCIAL BUILDINGS, Kiliccote, Sila, M. A. Piette, J. H. Dudley, E. Koch and D. Hennage. Open Automated Demand Response for Small Commercial Buildings. CEC-500-03-026.
4. Chilled Water Thermal Storage System and Demand Response at the University of California at Merced, proceedings of International Conference for Enhanced Building Operations, November 2009, J. Granderson, J. H. Dudley, S. Kiliccote, M.A. Piette
5. Regression Models for Demand Reduction based on Cluster Analysis of Load Profiles, proceedings of IEEE-PES/IAS Conference on Sustainable Alternative Energy (SAE 2009), September 2009, N. Yamaguchi, J. Han, G. Ghatikar, S. Kiliccote, M. A. Piette, H. Asano
6. Improvement of Classification of Electricity Customers by Demand Response, proceedings of 2009 meeting, The Institute of Electrical Engineers of Japan (IEEJ), August 2009, N. Yamaguchi, H. Asano, J. Han, G. Ghatikar, S. Kiliccote, M. A. Piette
7. Preliminary Study of Load Shed Effect of Customers' Attributes on Demand Response, proceedings of 2009 annual meeting, The Institute of Electrical Engineers of Japan (IEEJ), May 2009, N. Yamaguchi, J. Han, G. Ghatikar, S. Kiliccote, M. A. Piette, H. Asano

■ 韓 京子

1. 「近松の浄瑠璃にあらわれたナショナリズム」(『日本研究』2009年6月)
2. 「近松の時代浄瑠璃における呪術性の考察」(『日語日文学研究』、韓国日語日文学会、2009年11月)
3. 「時代浄瑠璃における推理小説的手法についての考察」(『日本思想』、韓国日本思想史学会、2009年12月)
4. 共著『日本文学の中の江戸・東京表象研究』(J & C、2009年12月)

■ 王 雪萍

(著書)

1. 『改革開放後中国留学政策研究—1980—1984年赴日本国家公派留学生政策始末』(中国・世界知識出版社、2009年7月)(論文)
 2. 「時代とともに変化してきた抗日戦争像 一九四九—二〇〇五—中国の中学歴史教科の「教学大綱」と教科書を中心に」、『軍事史学』(軍事史学会)45巻4号、2010年3月、10—32頁
 3. 「留日学生の選択—愛国的情熱と歴史的影響」、劉傑・川島真編『1945年の歴史認識：圍繞“終戦”の中日対話嘗試』、中国社会科学文献出版社所収、2010年1月、189-225頁
- Xueping Wang “History textbooks controversies regarding China in Japan”, 『関西学院大学外国語紀要人文科学編』、2010年2月、81—88頁。
4. 「改革開放後国家公派赴日留学生派遣政策総述」、王輝耀主編、苗丹国・程希副主編『中国留学人材発展報告2009』(中国機械工業出版社所収、2009年10月 (ISBN978-7-111-28494-9)、157—198頁
 5. 「中国留日国費学生に対する予備教育の実態調査(1979～1984年)—東北師範大学における赴日学部留学生教育を中心に」、『華僑華人研究』(日本華僑華人学会)No. 6、2009年11月、40—62頁
 6. Wang Xue-ping & Sekine Yoshika “Policy Coordination beyond Borders: Japan-China Environmental Policy Practices in Shenyang and Chengdu, China” Michio Umegaki, Lynn J. Thiesmeyer, Atsushi Watabe, ed. Human Insecurity in East Asia: United Nations University Press., 2009. ISBN: 978-92-808-1164-3) pp144-164.
(翻訳)
 7. 家近亮子著・王雪萍訳『『蒋介石日記』解釈 1937年12月の南京形勢』、(中国)『民国档案』2009年第2期、総第96期

■ 王 健歡

1. Armstrong H, Carter CK, Wong KFK and Kohn R (2009) "Bayesian Covariance Matrix Estimation Using a Mixture of Decomposable Graphical Models", *Statistics and Computing* 19(3) 303-316.
2. Galka A, Wong KFK, Ozaki T (2010) "Generalized state-space models for modeling nonstationary EEG time-series", in Steyn-Ross DA and Steyn-Ross M (Ed.) *Modeling Phase Transitions in the Brain*, Springer.

■ 趙 長祥

1. "Growth model research on multi-utilization of technology power in Hisense Group", *Proceedings of 2009 International*

Conference on Strategy Management. 2009.6 (CPCI Index, In English)

2. "What drives campus ventrue to a global online survey company", Post Session Paper of Asia 2009 Roundtable Entrepreneurship and Education. 2) 2009.10 (Held by STVP of Stanford University and CUHK. In English)

3. "Approaches on building up multi-integrated emergency coalition mechanism in regional marine: A case study of Qingdao inshore enteromorpha-prolifra accident in 2008-2009", Proceedings of 2009 the fifth international public management conference. 2009.10 (CPCI-SSH Index, In English)

4. "Research on growth pattern:A case study of Hisense Group", Proceedings of 2009 the third coporate case study management forum. 2009.11

5. "内生外促" 成長模式研究 - 海信集团的案例、《洛迦管理评论》2009 年卷第 2 輯、武汉大学出版社。2009.12 (In Chinese)

【2006 年度奨学生】

■ 梁 蘊嫻

1. 『『絵本三国志』の挿絵における合戦場面の「動」と「静」—『三国志演義』宝翰楼本の受容を中心に—』（『鹿島美術研究』年報 26 号別冊、2009 年 11 月）314 頁～ 325 頁

■ ウィーラシンハ・ナリン

1. L. Yue, C. Han, N. S. Weerasinghe, and T. Hashimoto, "Performance of Pilot-Aided CS-CDMA/CP with Perfect Spreading Sequences over a Fast Fading Channel," The 12th Int. Symp. Wireless Personal Multimedia Communications (WPMC'09), Sendai, Japan, 7-10 Sep. 2009, Student Best Papers Award paper (2009.9).

2. L. Yue, N.S. Weerasinghe, and T. Hashimoto, "Partial Multiuser Detection for CS-CDMA/CP over Multipath Channels and Its Comparison with DS-SS-CDMA," 2009 IEEE International Conference on Communications (ICC 2009), Dresden, Germany, 14-18 June 2009 (2009.6).

【2007 年度奨学生】

■ 金 玟淑

1. 益田兼房・金玟淑・メンドサ島田オルガ恵子・板谷直子・李明善「地震帯における世界文化遺産の危機に関する国際的認識の重要性」『歴史都市防災論文集』Vol.3、立命館大学歴史都市防災研究センター、2009 年 6 月、pp.203-210

2. 金玟淑「日本の火災被害の文化財建造物の収拾時における価値判断と保存行態の実例」『崇礼門火災収拾部材調査報告書』、韓国：国立文化財研究所、2009 年 7 月、pp.215-226

3. 益田兼房・板谷直子・李明善・金玟淑・福島信夫・島田オルガ恵子「歴史都市における文化的景観と文化的空間の形成と災害」『学術フロンティア推進事業「文化遺産と芸術作品を自然災害から防御するための学理の構築」2009 年度末報告書』、立命館大学歴史都市防災研究センター、2010 年 3 月

4. 柳成龍・金玟淑・朴珍淑「日本の建造物文化財の火災収拾および管理に関する調査」『崇礼門火災収拾部材調査報告書』、韓国：国立文化財研究所、2009 年 7 月、pp.195-214

5. 金玟淑「韓国建築再現事情—ソウルは「今」…」、『建築雑誌』vol.125、no.1598、日本建築学会、2010 年 1 月、pp.40-41

■ 李 垠庚

1. 『羽仁もと子の思想・生活・戦争—近代日本女性キリスト者とその時代』東京大学、2009

2. 「近代日本キリスト者の戦争協力—羽仁もと子（1873 - 1957）の言説を中心に—」『東洋史学研究』110、2010.3 * 韓国の歴史ジャーナル（原文は韓国語）

【2008 年度奨学生】

■ 馮 凱

1. FENG, K., and KANEKO, S., 2009, "Thermohydrodynamic Study of Multiwound Foil Bearing Using Lobatto Point Quadrature", ASME Journal of Tribology, 131(2), 021702

2. FENG, K., and KANEKO, S., 2009, "Calculation of Dynamic Coefficients for Multiwound Foil Bearings," Journal of System Design and Dynamics, 3(5), pp.841-852

3. FENG, K., and KANEKO, S., 2009, "Link-Spring Model of Bump-Type foil bearings," Proceedings of ASME Turbo Expo 2009, GT2009-59260, Orlando, FL USA, 8-13, June, 2009
4. FENG, K., and KANEKO, S., 2009, "Parametric studies on static performance and nonlinear stability of bump-type foil bearing", Proceedings of 13th Asia Pacific Vibration Conference, APVC 2009, Nov. 22 - 25 2009, Christchurch, New Zealand
5. FENG, K., and KANEKO, S., 2009, "Prediction of Dynamic Coefficients of Bump-Type Foil Bearing with Bump Considered as Link-Spring Structure," World Tribology Congress, WTC2009-90791, September, 6 - 11, 2009, Kyoto, Japan
6. FENG, K., and KANEKO, S., 2009, "Calculation model of bump-type foil bearing with shell and link-spring structure", Proceedings of Asian congress on gas turbines 2009, August 24-26, 2009, University of Tokyo, Tokyo, Japan
7. 馮凱、金子成彦、2009、"バンプ型フォイル軸受の静特性と安定性に対するフォイル設計変数の影響" 日本機械学会、Proceedings of Dynamics and Design Conference 2009 (D&D2009), Aug. 3-7, 2009、札幌
8. FENG, K., and KANEKO, S., 2010, "Thermohydrodynamic Model of Bump-Type Foil Bearings," The 4th TU-SNU-UT Joint Symposium, March 12-13, 2010, University of Tokyo, Tokyo, Japan

■ 洪 ユンシン

1. 『戦場の宮古島と「慰安所」—12のことが刻む女たちへ』日韓共同「日本軍慰安所」宮古島調査団著、洪ユン伸編 なんよう文庫、2009年

■ 劉 健

1. 『(V1 + V2) する』型漢語動詞のアスペクト』、《日本学研究》19、北京日本学研究中心、学苑出版社 2009年10月
2. 『(一+V) する』型漢語動詞のアスペクトについて』、『文体論研究』第56号、日本文体論研究学会 2010年3月

■ プアン キムチャイヤラシー

1. Kimchhayarasy PHUONG, Kazuo KAKII & Toshiyuki NIKATA, " Role of Acinetobacter spp. in Solid-Liquid Separation in Activated Sludge Process ", PROGRESS IN Environmental Science and Technology (2009 ISEST), (VOL. II), PART B, pp.2052-2059, 2009

■ 修 震

1. 修震、留滄海、北川能、塚越秀行、小西健一郎、遠隔で行う他動運動による在宅手首リハビリシステムの研究、日本フルードパワーシステム学会論文集、41巻、1号、14-19 (2010)
2. 修震、留滄海、北川能、塚越秀行、小西健一郎、他動運動で得られる手首特性を利用した自動運動による在宅手首リハビリシステムの研究、日本フルードパワーシステム学会論文集、41巻、2号、36-42 (2010)

■ 陸 載和

1. 「中国式武裝形四天王像の図像の成立に関する一考察」、『武蔵野美術大学博士後期課程研究紀要』、no.3、武蔵野美術大学 2010年3月

【2009年度奨学生】

■ 崔 恩碩

(翻訳)

1. John W. Dower, Embracing Defeat (1999) 韓国語版 (民音社 2009)

■ ダルウィッシュ、ホサム

1. "Contentious Politics in Egypt: Mobilizing for Participation" 『言語・地域文化研究』第16号、2010年3月、東京外国語大学

■ カバ、メレキ

1. "Inspirations of Japanese Language and Literature in Turkey-Between Reality and Imagination"、『2009年第4回国際外国文学教育学会論集』、2009年5月、(pp.54-61)
2. 「芥川龍之介のロティ理解—伝統文化・西洋化・異国の過去への郷愁—」 国際会議日本研究—異文化圏からの視座—学会ブ

ロシーディング、2010年1月、(pp. 88 - 93)

3. 「ピエール・ロティ『ロティの結婚』—民族学者的な眼差しとフランス領ポリネシア— 『筑波比較・理論文学会』2010年3月、(pp. 47 - 63)

4. 「明治日本の西洋化と西洋人—ピエール・ロティ「日本の婦人たち」における日本理解」中華大学応用日本語科学創立記念第一回国際学術コンフェレンスプロシーディング、2010年3月新竹、台湾

■ 郭 栄珠

1. KWAK, Y.J., KONDOH, Akihiko, `A Study on the Assessment of Multi-Parameter Affecting Urban Floods Using Satellite Image: A Case Study in Nackdong Basin, S.Korea`, Asia Oceania Geoscience Society, 2008

■ リンチン

1. 「内モンゴル地域における『四清運動』をめぐって」『関連社会科学』第19号、97～116頁、2010年3月

2. 「内モンゴルの牧畜業地域における人民公社化政策の分析」『言語・地域文化研究』第16号、49～67頁、2010年3月

3. 「『大躍進』期の内モンゴルにおける放牧地開墾・人口問題」『現代中国研究』第25号、93～108頁、2009年10月

■ シェルマトフ, ウルグベック

1. 「倒産手続における将来債権譲渡担保の取扱い」法学研究論集32号(2010年2月)243頁以下

■ フェルトカンブ, エルメル

1. 「英雄となった犬たち—軍用犬慰霊と動物供養の変容」、『人と動物の日本史3 動物と現代社会』菅豊(編)、吉川弘文館2009.3.

2. 「動物の死に対する儀礼的処理と民俗の変化—日本・新潟県佐渡島の事例を中心に」(韓国語)、『次世代人文社会研究』第五号 2009.3.

■ イエ・チョウ・トゥ

(Proceedings)

1. Ye Kyaw Thu and Yoshiyori URANO, "Romanized Myanmar Language Handwriting Text Input Interface for Non-natives", Proceedings of the Interfaces and Human Computer Interaction 2009 and Game and Entertainment Technologies 2009, Algarve, Portugal, pp. 121-128, June 2009

2. Ye Kyaw Thu, "Romanization Based Text Input Interfaces of Asian Syllabic Languages for Non-Natives", Proceedings of the 10th APRU Doctoral Students Conference, Kyoto, Japan, (CD-ROM), July 2009

3. Ye Kyaw Thu and Yoshiyori URANO, "A Comparison of Myanmar PC Keyboard Layouts", Proceedings of the 8th International Symposium on Natural Language Processing, Bangkok, Thailand, pp. 15-20, October 2009

4. Ye Kyaw Thu and Yoshiyori URANO, "MyTap and M9: Comparison of Two Existing Methods for Myanmar Mobile Phone Text Input", the 133rd Human Computer Interaction Symposium, Ishikawa, Japan, IPSJ SIG Technical Reports, 2009-HCI-133, (online publication), May 2009

5. Ye Kyaw Thu and Yoshiyori URANO, "Prototyping with "Pictures & Mobile Devices": a Rapid Prototyping Technique for Mobile User Interfaces", Workshop on Natural Language Processing for Asian Languages (a part of GITS/GITI Research Festival 2009), Waseda University, Honjo, Japan, pp. 46-53, October 2009

6. Jackchai Butsrikui, Ye Kyaw Thu, Mitsuji MATSUMOTO and Yoshiyori URANO, "Analysis on Possible Combinations of a Consonant with Vowels and Tone Marks for Thai", Workshop on Natural Language Processing for Asian Languages (a part of GITS/GITI Research Festival 2009), Waseda University, Honjo, Japan, pp. 31-38, October 2009

7. Ye Kyaw Thu, Jackchai Butsrikui, Mitsuji MATSUMOTO and Yoshiyori URANO, "A Comparison of Thai Mobile Phone Keypad Mappings", Proceedings of the Forum on Information Technology (FIT2009), Tohoku Institute of Technology, Sendai, Japan, pp. 461-464, September 2009

8. Huotely YIN, Ye Kyaw Thu, and Yoshiyori URANO, "New Khmer Handwriting Text Input Interface: Handwriting and Positional Prediction", Proceedings of the 2009 IEICE Society Conference, Niigata University, Niigata, Japan, pp. S-133-S-134, September 2009

■ 朱 琳

1. 「湖南の思想形成——政教社との関連をめぐって」『湖南』30、内藤湖南先生顕彰会、2010年3月、47～56頁

【2010年度奨学生】

■ チャイトンディー・プラチャッポン

1. Lokappadīpakasāra (世間灯明精要) の研究序 平成21年12月『印度学仏教学研究』第58巻
2. Lokappadīpakasāra (世間灯明精要) の成立背景—第七章 (Okāsalokaniddesa、器世間の説明) を中心として—平成21年12月『パナリ学仏教文化学会』第23号

■ 崔 禎恩

1. 高麗時代に制作された青銅鏡の微細構造 崔禎恩、北田正弘、日本金属学会誌 Vol.73(2009) No.5 pp.381-386
2. 高麗青銅貨：海東通寶 (ヘドントンボ) の金属組織と不純物の微細構造 崔 禎恩、北田正弘、日本金属学会誌 Vol.74(2010) No.1 pp.30-35

■ 李 軍

1. 「イメージ模型図を用いた発見型漢字指導法—『同訓異字』に着目した授業開発」『月刊国語教育』2009年12月号 第29巻第10号 東京法令出版 50～53頁
2. 「カタカナ語を用いた漢字指導法—日中漢字訳語の対比を通して」『月刊国語教育研究』2010年2月号 No.454 日本国語教育学会 58～65頁
3. 『『大東世話』「品藻」篇注釈稿』(共著)『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第20号 2010年3月 早稲田大学大学院教育学研究科 33～34頁 49頁

■ 王 昕

1. Hiroyuki Kudo, Masayuki Sawai, Xin Wang, Tomoko Gessei, Tomoyuki Koshida, Kumiko Miyajima, Hirokazu Saito, Kohji Mitsubayashi "A NADH-dependent fiber-optic biosensor for ethanol determination with a UV-LED excitation system," Sensors and Actuators B 141 (2009) 20 (Article history: Received 15 August 2008, Received in revised form 14 April 2009, Accepted 5 June 2009, Available online 16 June 2009)

◇ 設立の趣旨について

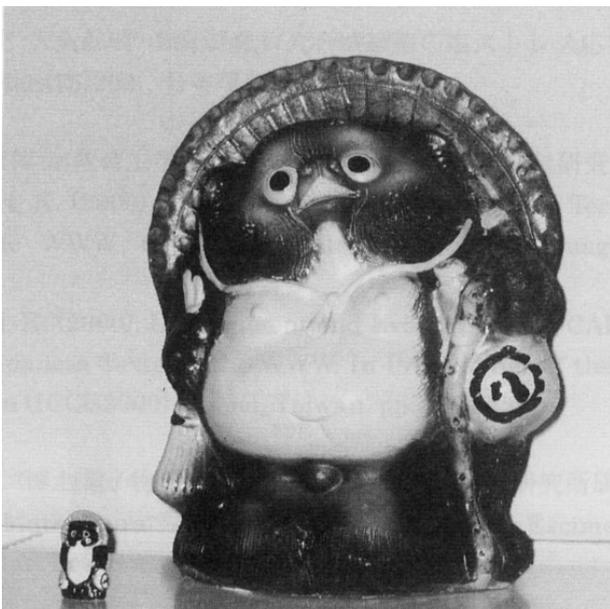
近年の交通・通信手段の発達により、海外旅行者の数はめざましく増加し、また、世界中の出来事が即座に伝えられるようになりました。このような時代に生きる私達は、もはや国家という単位ではなく、国際社会の一員として物事をとらえていかなければならないのではないのでしょうか。しかし、現在経済大国となった日本は、国際的な活動をもっと積極的に押し進め、世界に対してより大きな役割を果たすことができるのではないかと指摘されています。

渥美国際交流奨学財団は、1993年10月14日に物故いたしました渥美健夫鹿島建設名誉会長の遺志により、このような状況にあります日本の国際化の推進にささやかながらもお役に立ちたいという願いをこめて設立されました。当財団は諸外国から日本の大学院に留学している優秀な学生に対し、奨学援助をいたします。日本にやって来た留学生が、学問を成就するだけでなく、豊かな文化や社会に触れ、より大きな収穫を得ることができまようお手伝いさせていただきたいと思います。

渥美氏は、アジア、西太平洋建設業協会国際連盟（IFAWPCA）会長、世界建設業連盟（CICA）会長、及び社団法人CISV日本協会会長を長年にわたって勤め、国際交流に尽くしてまいりました。CISV（国際こども村）とは、「世界の平和を築くためには子供の時から機会を与え、国籍・人種・言語を越えて同じ人間であることを肌で実感させることが何より大切」という理想のもとに1951年アメリカで始められた平和運動で、毎年世界各地で子供達を集めてキャンプを行なっています。

また、渥美健夫・伊都子夫妻は、ニューヨークのコロンビア大学に日本美術史の冠講座を寄付いたしました。これによりコロンビア大学では、日本美術史の教授職が常置されることになりました。

渥美国際交流奨学財団は、渥美氏の国際交流の促進への信念を引き継ぎ、一層の発展をめざして、活動してまいりたいと思います。若者たちがより大きな世界を知るよう支援させていただくことによって、人々の心の中に国際理解と親善の芽が生まれ、やがては世界平和への道がひらかれてゆくことを願っております。



◇ 2009 年度業務日誌

- 4月 3日 4月例会：食事会（於：ドルフィンハウス）
- 5月 7日 5月例会：個人面談（13日まで）
- 7日 第10回マニラ共有型成長セミナー「労働移住と貧困：国内や海外におけるパターン」
（於：フィリピン・アジア太平洋大学（UA&P））
- 21日 2008年度会計監査
- 6月 2日 2008年度年報発行
- 2日 第31回理事会・評議員会（2008年度事業報告と決算報告）・親睦会（6月例会）
- 7日 第35回 SGRA フォーラム「テレビゲームが子どもの成長に与える影響を考える」
（於：東京国際フォーラム） SGRA レポート # 51
- 29日 7月例会：東京国際空港 D 滑走路新設工事現場見学会
- 7月1日 募集要項配布（関東地方の大学に通知、ホームページに掲載）
- 3～4日 国際シンポジウム「世界史のなかのノモンハン事件（ハルハ河会戦）：過去を知り未来を語る」
（於：モンゴル・ウランバートル モンゴル日本センター）
- 24日 軽井沢リクリエーション旅行（26日まで）
- 25日 第36回 SGRA フォーラム in 軽井沢「東アジアの市民社会と21世紀の課題」
（於：鹿島建設軽井沢研修センター） SGRA レポート # 52
- 8月25日 第11回共有型成長セミナー「第3回フィリピンの自動車産業を通じた共有型成長のロードマップを巡るワークショップ」（於：フィリピン・アジア太平洋大学（UA&P））
- 9月1日 2010年度奨学生応募受付開始
- 1日 9月例会：個人面談（7日まで）
- 16日 第4回 SGRA チャイナ・フォーラム：北京外国語大学日本学研究センター
- 17日 第4回 SGRA チャイナ・フォーラム：上海財経大学国際工商管理大学院
「世界的課題に向けていま若者ができること ~Table For Two~」 SGRA レポート # 53
- 30日 2010年度奨学生応募締め切り（応募者総数 126名）
- 10月7日 10月例会：食事会（於：トルコ料理 アセナ）
- 9日 2010年度奨学生書類審査
- 22日 2010年度奨学生候補者予備面接（28日まで）
- 11月6日 渥美奨学生の集い：近藤正晃ジェームス様をお迎えして「Table For Two」
（於：鹿島新館 / 渥美国際交流奨学財団ホール）
- 28日 2010年度奨学生最終選考委員会・面接
- 12月1日 12月例会：個人面談（7日まで）
- 5日 第37回 SGRA フォーラム「東アジアのエリート教育の現状と課題」
（於：東京国際フォーラム） SGRA レポート # 54
- 1月9日 1月例会：新年会
- 2月1日 2月例会：個人面談（5日まで）
- 9日 第9回韓国アジア未来フォーラム「アジアにおける公演文化（芸能）発生と現在：その普遍性と独自性」
（於：韓国慶州・教育文化会館） SGRA レポート # 55（発行予定）
- 26日 第32回理事会・評議員会（2010年度事業計画と収支予算）
- 26日 渥美国際交流奨学財団15周年・関口グローバル研究会（SGRA）10周年記念祝賀会
（於：鹿島K I ビル）
- 3月6日 3月例会：2009年度奨学生研究報告会
- 18日 2009年度奨学生最終食事会（於：ホテルイースト 21 東京 中華料理「桃園」）

◇ 2009 年度収支決算明細書

(単位：円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
基本財産運用収入		事業費	50,876,190
基本財産配当金	22,000,000	管理費	9,282,612
基本財産債券利息	11,965,000	次期繰越収支差額	70,668,604
基本財産償還益等	1,281,199		(内5,000万円は奨学資金積立金)
基本財産普通預金利息	1,841		
特定資産運用収入	200,000		
寄附金収入			
寄附金（一般）	16,450,000		
寄付金（指定）	3,088,425		
雑収入			
運用財産受取利息	8,158		
貸与奨学金返戻収入	100,000		
その他雑	92,500		
前期繰越収支差額	75,640,283		
収入合計	130,827,406	支出合計	130,827,406

◇ 貸借対照表 (2010年3月31日現在)

(単位：円)

資産の部		正味財産の部	
I. 流動資産		I. 基本金	
1. 現金	109,819	1. 基本財産	1,416,000,000
2. 普通預金	19,459,885	II. 当期収支差額	70,668,604
3. 郵便預金	1,098,900		
流動資産計	20,668,604		
II. 固定資産			
基本財産			
1. 投資有価証券	1,403,694,505		
2. 普通預金	12,305,495		
基本財産計	1,416,000,000		
奨学資金積立基金			
定期預金	50,000,000		
固定資産計	1,466,000,000		
資産合計	1,486,668,604	正味財産合計	1,486,668,604

◇財団人名簿

(2010年5月現在)

★理事・監事

理事長	渥美 伊都子	CISV 日本協会会長、日本ユニセフ協会理事、アジア婦人友好会顧問
常務理事	今西 淳子	関口グローバル研究会代表、CISV International 副会長
理事	渥美 直紀	鹿島建設株式会社代表取締役・副社長執行役員
	片岡 達治	元癌研究会癌化学療法センター主任研究員
	加美山 節	国際基督教大学評議員
	加藤 秀樹	構想日本代表、東京財団理事長、行政刷新会議事務局長
	佐藤 直子	日本プロテニス協会理事
	田村 次朗	慶應義塾大学法学部教授
	遠山 友寛	TMI 総合法律事務所パートナー
	永山 治	中外製薬株式会社代表取締役社長
	宮崎 裕子	長島・大野・常松法律事務所パートナー
監事	石井 茂雄	石井公認会計士事務所所長
	松岡 誠司	元株式会社日本債券信用銀行取締役会長

★評議員

青木 生子	日本女子大学名誉教授・理事
明石 康	国際文化会館理事長
渥美 雅也	東京水産振興会理事・振興部長
蟻川 芳子	日本女子大学学長・理事長・名誉教授
岩崎 統子	CISV 日本協会副会長
植田 兼司	弁護士
嶋津 忠廣	渥美国際交流奨学財団事務局長
長岡 實	資本市場研究会顧問
堀田 健介	グリーンヒルジャパン株式会社代表取締役会長
水谷 弘	専修大学名誉教授
山縣 睦	山縣有朋記念館理事長、栃木産業株式会社社長
八城 政基	株式会社新生銀行取締役会長・代表執行役社長

★選考委員

委員長	畑村 洋太郎	東京大学名誉教授、工学院大学グローバルエンジニアリング学部教授 (産業機械工学)
	井上 博允	東京大学名誉教授、産業技術総合研究所デジタルヒューマン研究センター顧問 (情報工学)
	片岡 達治	(理事) (薬学)
	佐野 みどり	学習院大学文学部教授 (美術史)
	田村 次朗	(理事) (法学)
	平川 均	名古屋大学大学院経済学研究科教授 (経済学)

★事務局

事務局長 嶋津 忠廣
事務局 谷原 正
石井 慶子

◇奨学生名簿

【1995 年度奨学生】

Bambling, Michele バンプリング、ミッシェル：博士（美術史）コロンビア大学（慶應義塾大学）：Emirati 女子大学講師（在
アブダビ）
Gao Lingna 高 玲娜：博士（社会学）一橋大学：（在横須賀）
Gao Weijun 高 偉俊：博士（建設工学）早稲田大学：北九州市立大学国際環境工学部教授、西安交通大学兼職教授（在北九州）
Jin Xi 金 熙：博士（物理情報学）東京工業大学：（在北京）
Kwack Jae-Woo 郭 在祐：博士（美術史）学習院大学：日本大学文理学部、学習院大学文学部非常勤講師
Maquito, Ferdinand マキト、フェルディナンド：博士（経済学）東京大学：アジア太平洋大学（フィリピン）研究助教授
Park Chul-Ju 朴 哲主：博士（商学）慶應義塾大学：三育大学経営学部副教授（在ソウル）
Park Jungran 朴 貞蘭：博士（社会福祉学）日本女子大学：仁済大学社会福祉科副教授（在釜山）
Shi Jianming 施 建明：博士（数理工学・社会工学）筑波大学：室蘭工業大学情報工学科准教授（在室蘭）
Yao Hui 葉 会：早稲田大学（日本文学）：法政大学国際文化情報学部非常勤講師
Youn Seokhee 尹 錫姫：博士（商学）専修大学：仁徳大学観光学部非常勤講師（在ソウル）
阪神大震災被災特別奨学生
Chen Xiao 陳 曉：神戸大学（医学）
Horng Der-juinn 洪 徳俊：博士（経営学）神戸大学：国立中央大学企業管理系副教授（在台湾桃園）
Wang Libin 王 立彬：神戸大学（自然科学）：(株)東洋インキ製造

【1996 年度奨学生】

Chantachote, Viravat チャンタチャテ、ビラバット：博士（法学）慶應義塾大学：タマサート大学法学部准教授、教務部長（在
バンコク）
Gulenc, Selim Yucel ギュレチ、セリム・ユジェル：東京大学（政治学）：宗教法人京都ムスリム協会理事、イスラーム文
化センター代表（在京都）
Khin Maung Htwe キン・マウン・トウエ：博士（応用物理）早稲田大学：Ocean Resource Production Co., LTD. 社長（在
ヤンゴン）
Kim Woong-Hee 金 雄熙：博士（国際政治経済学）筑波大学：仁荷大学校国際通商学部副教授（在ソウル）
Lee Nae-Chan 李 來賛：博士（管理工学）慶應義塾大学：漢城大学経済学部副教授（在ソウル）
Nam Kijeong 南 基正：博士（国際関係論）東京大学：ソウル大学日本研究所 HK 教授（在ソウル）
Park Keunhong 朴 根弘：博士（生命理工学）東京工業大学
Qiao Xin 喬 辛：博士（無機材料工学）東京工業大学：（在アメリカ）
Trede, Melanie Maria トレーデ、メラニー・マリア：博士（美術史）ハイデルベルク大学 [学習院大学]：ハイデルベルグ
大学東洋美術史研究所（在ハイデルベルグ）
Zhao Qing 趙 青：お茶の水女子大学（比較文化）：（在東京）
Zhu Tingyao 朱 庭耀：博士（船舶海洋工学）東京大学：（財）日本海事協会技術研究所首席研究員 / ハルビン工科大学客

員教授

【1997年度奨学生】

- De Maio, Silvana デマイオ、シルバーナ：博士（日本語学）東京工業大学：ナポリ大学オリエンターレ専任講師（在ナポリ）
- Fang Meili 方 美麗：博士（言語学）お茶の水女子大学：お茶の水女子大学外国人講師
- Isananto, Winursito イサナント、ウィヌルシト：博士（応用科学）慶應義塾大学：インドネシア通産省皮革産業開発研究所研究員（在インドネシア マナド）
- Kim Woesook 金 外淑：博士（健康科学）早稲田大学：兵庫県立大学看護学部心理学系教授（在神戸）
- Katagiri, Laohaburanakit Kanokwan (Noi) 片桐カノックワン・ラオハブナキット（ノイ）：博士（言語学、日本語教育）筑波大学：チュラロンコン大学文学部日本語講座助教授（在バンコク）
- Lee Hyang-Chul 李 香哲：博士（経済学）一橋大学：光云大学日本学科教授（在ソウル）
- Li Enmin 李 恩民：博士（社会学）一橋大学：桜美林大学リベラルアーツ学群教授
- Nizamidin Jappar ニザミディン、ジャッパル：博士（応用化学）東京大学：キモト・テック（在米ジョージア）
- Wang Yuepeng 王 岳鵬：博士（医学）東京大学：タフツ大学医学部タフツ医療センター分子心臓病研究所研究員（在ボストン）
- Williams, Duncan ウィリアムス、ダンカン：博士（宗教学）ハーバード大学[上智大学]：カルフォルニア大学バークレー校日本研究センター教授（在米バークレー）
- Zhang Shao-Min 張 紹敏：博士（医学）東京大学：ペンシルベニア州立大学医学部神経と行動学科助理教授（在米ハーシー）

【1998年度奨学生】

- Adiole Emmanuel アディオレ、エマニュエル：博士（政治学）東京大学：ナイジェリア・エネルギー環境研究所主任研究員（在ナイジェリア）
- Cao Bo 曹 波：博士（建設工学）早稲田大学：(株)北京NTTデータジャパン
- He Zuyuan 何 祖源：博士（先端学際工学/光電子工学）東京大学：東京大学大学院工学系研究科電気系工学専攻准教授
- Hu Jie 胡 潔：博士（文学）お茶の水女子大学：名古屋大学大学院国際言語文化研究科准教授（在名古屋）
- Kim Jaesung 金 宰晟：東京大学（仏教学）：仏教大学院大学講師（在ソウル）
- La Insook 羅 仁淑：博士（経済学）流通経済大学、早稲田大学博士課程修了：国土舘大学政経学部非常勤講師
- Lee JooHo 李 周浩：博士（電子工学）東京大学：立命舘大学情報理工学部情報コミュニケーション学科准教授（在滋賀）
- Mailisa マイリーサ：博士（社会学）一橋大学：立教大学非常勤講師
- Sun Yanping 孫 艶萍：博士（医学）東京大学：ハーバード大学ブリッグム病院放射線科准教授（在ボストン）
- Wu Hongmin 呉 弘敏：博士（精密工学）東京工業大学：フクダ電子（株）
- Xu Xiaoyuan 許 曉原：博士（農学生命科学）東京大学：コロビア大学ナオミベリーセンター研究員（在ニューヨーク）

【1999年度奨学生】

- Coimbra, Maria Raquel Moura コインブラ、マリア・ハケウ・モウラ：博士（資源育成学）東京水産大学：ペルナンブコ州立大学農水学部応用遺伝子研究室助教授（在ブラジル）
- Hong Kyung-Jin 洪 京珍：博士（化学環境工学）東京工業大学：韓国環境省環境部環境政策室化学物質安全課（在ソウル）
- Hou Yankun 侯 延琨：博士（物理電子化学/薬学）東京工業大学：ノムラ・インターナショナル（在香港）
- Ju Yan 具 延：博士（農学）筑波大学：メッツォペーパージャパン（株）
- Li Gangzhe 李 鋼哲：立教大学（経営学/経済学）：北陸大学未来創造学部教授（在金沢）
- Mushikasinthorn, Prachya ムシカシントーン・プラチャー：博士（資源育成学）東京水産大学：カセサート大学水産学部

助教授（在バンコク）

Vu Thi Minh Chi ブ・ティ・ミン・チィ：博士（地域研究）一橋大学：ベトナム社会科学院人間科学研究所研究員（在ハノイ）

Wang Dan 王 旦：博士（音楽）東京芸術大学：バイオリニスト／昭光物産㈱

Yang Jie Chi 楊 接期：博士（教育工学）東京工業大学：国立中央大学網路学習科技研究所准教授（在台湾桃園）

Yeh Wen-chang 葉 文昌：博士（電子物理工学）東京工業大学：島根大学総合理工学部電子制御システム工学科准教授（在松江）

Zhou Haiyan 周 海燕：博士（医学）東京医科歯科大学：たてやまクリニック院長（在富山県）

【2000年度奨学生】

Jin Zhengwu 金 政武：博士（物質科学）東京工業大学：東芝㈱

Jung Jae Ho 鄭 在皓：博士（物質科学）慶應義塾大学：三星電子 LCD 総括 LCD 開発室（在韓 CheonAnn）

Jung Sung Chun 鄭 成春：博士（経済学）一橋大学：対外経済政策研究院（KIEP）日本チーム長（在ソウル）

Ko Hee Tak 高 熙卓：博士（総合文化）東京大学：延世大学政治外交学科研究教授（在ソウル）

Lim Chuan-Tiong 林 泉忠：博士（国際政治学）東京大学：琉球大学法文学部准教授（在沖縄）

Molnar, Margit モルナル・マルギット：博士（経済学）慶應義塾大学：OECD 研究員（在パリ）

Naiwala Pathirannehelage, Chandrasiri ナイワラ・パティランネヘラーゲ、チャンドラシリ：博士（電子情報）東京大学：トヨタ IT 研究センター研究員

Ren Yong 任 永：博士（医学）群馬大学：ニューヨーク州立大学医学部研究員（在米バッファロー）

Suzuki Sato, Hiromi スズキサトウ、ヒロミ：慶應義塾大学（経済学）：（在東京）

Wu Yuping 武 玉萍：博士（医学）千葉大学：理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター（CDB）（在神戸）

Xu Xiangdong 徐 向東：博士（社会学）立教大学：㈱中国市場戦略研究所代表取締役

Zeng Zhinong 曾 支農：博士（アジア文化）東京大学：（在武漢）

【2001年度奨学生】

Borjigin, Burensain ボルジギン、ブレンサイン：博士（東洋史）早稲田大学：滋賀県立大学人間文化学部准教授（在彦根市）

Fan Jianting 範 建亭：博士（経済学）一橋大学：上海財経大学国際工商管理大学院助教授（在上海）

Jeon Jin Hwan 全 振煥：博士（建築材料）東京工業大学：鹿島建設㈱技術研究所主任研究員

Jiang Huiling 蔣 恵玲：博士（電子情報工学）横浜国立大学：(株) NTT ドコモ・総合研究所研究主任

Jin Xianghai 金 香海：博士（政治学）中央大学：延辺大学アジア研究センター教授兼副センター長（在延吉）

Kostov, Vlaho コストブ、ブラホ：博士（システム工学）東京都立科学技術大学：パナソニック・ヨーロッパ社（在フランクフルト）

Lee Hyun-Young 李 炫瑛：博士（比較文化）お茶の水女子大学：建国大学校師範大学日本語教育科助教授（在ソウル）

Lee Young-Suk 李 英淑：博士（教育学）筑波大学：釜山大学校師範大学数学教育科非常勤講師（在釜山）

Liang Xingguo 梁 興国：博士（化学生命工学）東京大学：名古屋大学物質制御工学専攻准教授（在名古屋）

Lwin U Htay ルイン・ユ・ティ：博士（社会医学及び公衆衛生学）東京医科歯科大学：（在東京）

Qi Jin Feng 奇 錦峰：博士（薬理学）東京医科歯科大学：広州中医薬大学中薬学院教授（在広州）

Sri Sumantyo, Josaphat Tetuko スリ スマンティヨ、ヨサファット・テトオコ：博士（人工システム科学）千葉大学：千葉大学環境リモートセンシング研究センター准教授

【2002年度奨学生】

Baek Insoo 白 寅秀：博士（商学）早稲田大学：（在ソウル）

- Chen Tzu-Ching 陳 姿菁：博士（国際日本学）お茶の水女子大学：開南大学国際事務中心対外教学組長、台湾大学兼任助理教授（在台北）
- Hu Bingqun 胡 炳群：博士（システム工学）日本工業大学：日豊興業株式会社（在名古屋 / 広州）
- Iko, Pramudiono イコ、プラムディオノ：博士（電子情報工学）東京大学：インドネシア三井物産（在ジャカルタ）
- Jo Gyuhwan 曹 奎煥：博士（地質学）早稲田大学：新日本石油開発（株）（在マレーシア）
- Mandah, Ariunsaihan マンダフ、アリウンサイハン：博士（地域社会学）一橋大学：（在米カンザス）
- Mukhopadhyaya, Ranjana ムコパディヤーヤ、ランジャンナ：博士（宗教学宗教学史）東京大学：デリー大学・東アジア研究科准教授（在デリー）
- Park Young-June 朴 栄濬：博士（国際社会科学）東京大学：国防大学校安全保障大学院副教授、ハーバード大学 Weatherhead Center U. S. - Japan Program 訪問研究員（在ボストン）
- Sun Jianju 孫 建軍：博士（日本語学）国際基督教大学：北京大学外国語学院日本語文化学部助教授（在北京）
- Wang Xi 王 溪：博士（電子情報工学）東京大学：（在アメリカ）
- Yimit Abliz イミテ、アブリズ：博士（人工環境システム）横浜国立大学：新疆大学化学化工学院教授（在ウルムチ）
- Yu Xiaofei 于 曉飛：博士（社会文化科学）千葉大学：日本大学法学部准教授

【2003 年度奨学生】

- Chae Sang Heon 蔡 相憲：博士（生物生産学）東京農工大学：天安蓮庵大学産学協力担当教授（在韓国天安）
- Chang Kuei-e 張 桂娥：博士（学校教育学—言語文化）東京学芸大学：東呉大学日本語学科助教授（在台北）
- Husel フスレ：博士（地域文化）東京外国語大学：東京大学大学院総合文化研究科日本学術振興会外国人特別研究員
- Kim Hyeon Wook 金 賢旭：博士（総合文化—表象文化）東京大学：韓国外国語大学・檀国大学非常勤講師（在ソウル）
- Kwak Jiwoong 郭 智雄：博士（経営学）立教大学：九州産業大学商学部商学科准教授、ノーステキサス大学交換教授（在テキサス）
- Lin Shaoyang 林 少陽：博士（総合文化—言語情報科学）東京大学：香港城市大学中文翻訳及言語学科（在香港）
- Lu Yuefeng 陸 躍鋒：東京海洋大学（海洋情報システム）：Merit Intelligence Development Centre, Director（在トロント）
- Piao Zhenji 朴 貞姫：博士（応用言語学）明海大学：北京語言大学外国語学院日本語学部教授、北陸大学交換教授（在金沢）
- Tisi, Maria Elena ティシ、マリア エレナ：博士（児童文学）白百合女子大学：ボローニャ大学、ペルージャ外国人大学、サレント大学非常勤講師（在ボローニャ）
- Yamaguchi Ana Elisa ヤマガチ、アナ エリーザ：一橋大学（社会学）：上智大学外国語学部助教
- Yun Hui-suk ユン ヒスク：博士（材料学）東京大学：韓国機械研究院附属材料研究所（KISM）（在韓慶南道昌原）
- Zang Li 臧 俐：博士（学校教育学—教育方法論）東京学芸大学：東海大学短期大学部准教授

【2004 年度奨学生】

- Ampong, Beryl Nyamekye アンボン、ベリル ニャメチェ：博士（薬理学）東京医科大学：Children's National Medical Center（在ワシントン D.C.）
- Chin, Angelina Yanyan チン、アンジェリーナ ヤンヤン：博士（ジェンダー研究）カリフォルニア大学サンタクルーズ校（お茶の水女子大学）：Pomona College 准教授（在カリフォルニア）
- Khomenko, Olga ホメンコ、オリガ：博士（地域文化研究）東京大学：（在キエフ）
- Lee Jea Woo 李 濟宇：博士（地盤地震工学）早稲田大学：鹿島建設（株）技術研究所主任研究員
- Lee Sung Young 李 承英：博士（言語学）筑波大学：光云大学日文学科（在ソウル）
- Meng Zimin 孟 子敏：博士（言語学）筑波大学：松山大学人文学部教授、ハーバード大学客員研究員（在ボストン）
- Mullagildin, Rishat ムラギルディン、リシャット：慶応義塾大学（環境デザイン）：RAUM Architects 社長（在露ウファ）

Napoleon ナポレオン：博士（機械制御システム）東京工業大学：日産自動車（株）総合研究所
Sonntag, Mira ゾンターク、ミラ：博士（宗教史学）東京大学：立教大学文学部キリスト教学科准教授
Tsai Ying-hsin 蔡 英欣：博士（法学）東京大学：国立台湾大学法学部助理教授（在台北）
Yang Myung Ok 梁 明玉：博士（人間発達科学）お茶の水女子大学：茨城県立医療大学人間科学センター助手、お茶の水女子大学大学院人間創成科学研究科研究員
Ye Sheng 叶 盛：博士（先端学際工学）東京大学：東莞九域星医薬科技有限公司（在香港）

【2005 年度奨学生】

Bao Lian Qun 包 聯群：博士（言語情報学）東京大学：東京大学大学院総合文化研究科学術研究員
Han Junqiao 韓 珺巧：博士（建築学）早稲田大学：国立ローレンス・バークレー研究所研究員（在バークレー）
Han Kyoung Ja 韓 京子：博士（日本文化研究）東京大学：檀国大学日本研究所学術研究教授（在ソウル）
Jiang Susu 江 蘇蘇：博士（物理情報工学）横浜国立大学：東芝セミコンダクター（株）
Kim Bumsu 金 範洙：博士（社会系教育（歴史））東京学芸大学：東京学芸大学特任准教授、（韓国）国立公州大学校客員教授
Kim Yeonkyeong 金 娟鏡：東京学芸大学（心理学）：帝京平成大学現代ライフ学部、近畿大学九州短期大学非常勤講師、YMCA 健康福祉専門学校講師
Lan Hung Yueh 藍 弘岳：博士（地域文化研究）東京大学：国立交通大学通識教育中心助理教授（在台北）
Tenegra Brenda Resurecion Tiu テネグラ ブレンダ レスレション ティウ：博士（人間発達科学）お茶の水女子大学：ノッティンガム大学社会学社会政策学部特任講師（在英ノッティンガム）
Vo Chi Cong ヴォー・チー・コン：東京工業大学（数理・計算科学）：㈱トリニティセキュリティシステム勤務
Wang Xueping 王 雪萍：博士（政策メディア）慶応義塾大学：東京大学教養学部講師（専任）
Wong Kin Foon 王 健歡：博士（統計科学）総合研究大学院大学：ハーバード大学医学部 MGH 病院研究員（在ボストン）
Zhao Changxiang 趙 長祥：博士（商学）一橋大学：中国海洋大学法政学院（在青島）

【2006 年度奨学生】

Chu Xuan Gao チュ・スワン・ザオ：東京外国語大学（文化人類学）：ベトナム社会科学院文化研究所研究員（在ハノイ）
Hu Xiuying 胡 秀英：博士（看護教育学）千葉大学：四川大学華西看護学部華西病院准教授（在成都）
Hyun Seungsoo 玄 承洙：博士（地域文化）東京大学：漢陽大学 HK 教授（在ソウル）
Li Chengri 李 成日：博士（政治学）慶応義塾大学：東西大学校国際学部国際関係学講師（在釜山）
Liang Yun-hsien 梁 蘊嫻：東京大学（比較文化）
Mohottala Shirmila モホッタラ・シャミラ：博士（情報理工学）東京大学：東京大学情報理工学研究科特別研究員
Pantcheva Elena Latchezarova パンチェワ・エレナ：博士（日本研究）千葉大学：日永インターナショナル（株）
Seo Kyoung Sook 徐 景淑：慶応義塾大学（美学美術史）：（在ソウル）
Sim Choon Kiat シム・チュン キャット：博士（教育学）東京大学：日本大学、日本女子大学非常勤講師
Sun Junyue 孫 軍悦：東京大学（言語情報科学）：東京大学教養学部講師
Weerasinghe Nalin ウィーラシンハ・ナリン：博士（電子工学）電気通信大学：シュルンベルジェ（株）電子エンジニア
Woo Seonghoon 禹 成勲：博士（建築学）東京大学：（在仁川）

【2007 年度奨学生】

Chan Chai-fong 詹 彩鳳：東京大学（地域文化研究）：（在台北）
Deng Fei 鄧 飛：博士（先端エネルギー学）東京大学：デラウェア大学特別研究員（在米デラウェア）

Gangbagana ガンバガナ：博士（地域文化研究）東京外国語大学：国際教養大学非常勤講師
 Kim Minsuk 金 玟淑：博士（建築学）早稲田大学：立命館大学歴史都市防災研究センター PD 研究員（在京都）
 Lee Eungyong 李 垠庚：博士（地域文化研究）東京大学：ソウル大学日本研究所 HK 研究教授（在ソウル）
 Mijiti, Abuduxukuer メジテ、アブドシュケル：博士（外科学）東京医科大学：東京医科大学研究員
 Park Sohyun 朴 昭炫：博士（文化資源学）東京大学：韓国文化観光研究院文化芸術政策担当責任研究員（在ソウル）
 Porras Rojas Oscar ポラス・ロハス、オスカル：博士（応用環境システム学）東京海洋大学：コスタリカ大学太平洋岸校副学長（在コスタリカ、プンタレナス）
 Quan Mingai 権 明愛：博士（社会福祉学）日本社会事業大学：清瀬市子どもの発達支援・交流センター
 Wang Jian Hong 王 劍宏：博士（建設工学）早稲田大学：(株)日本工営中央研究所研究員
 Yan Hainian 顔 海念：博士（国際保健学）東京大学：(株)中外製薬安全性データマネジメント部
 Yaroslav Shulatov ヤロスラブ、シュラトフ：博士（政治学）慶応義塾大学：東京大学大学院総合文化研究科日本学術振興会外国人特別研究員

【2008 年度奨学生】

Feng Kai 馮 凱：博士（機械工学）東京大学：東京大学大学院工学系研究科日本学術振興会外国人特別研究員
 Hong Yunshin 洪 ユン伸：早稲田大学（国際関係学）：早稲田大学国際言語文化研究所客員研究員、青山学院大学非常勤講師
 Shiohara Vroni Friederike 塩原 フローニ フリデリケ：博士（文化財保存学）東京芸術大学：(株)資生堂
 Liu Jian 劉 健：博士（日本語学）北京大学（早稲田大学）：首都師範大学専任講師（在北京）
 Lkhamsuren, Lkhagvasuren ハムスレン、ハグワスレン：早稲田大学（国際関係学）：早稲田大学モンゴル研究所客員研究員
 Nemekhjargal ネメフジャルガル：博士（経済学）亜細亜大学：内モンゴル大学モンゴル学研究センター（在フフホト）
 Phuong, Kimchhayarasy プアン、キムチャイヤラシー：博士（物性工学）宇都宮大学：(在カンボジア)
 Song Gang 宋 剛：博士（地域文化）桜美林大学：北京外国語大学日本語学部専任講師（在北京）
 Vorno, Heli-Liis ヴェルノ、ヘリ リース：学習院大学（哲学）
 Wang Wei 王 偉：博士（人工システム）千葉大学：千葉大学大学院自然科学研究科研究員
 Xiu Zhen 修 震：博士（機械制御システム）東京工業大学：セコム（株）I S 研究所
 Yuk Jaehwa 陸 載和：武蔵野美術大学（造形芸術）：武蔵野美術大学非常勤講師
 Zhang Jian 張 建：博士（教育学）東京大学：(株)ハウスメイト企業開発本部

【2009 年度奨学生】

Choi Eunseok 崔 恩碩：博士（日本史学）国民大学（東京大学）：韓国海洋水産開発院研究員（在ソウル）
 Darwisheh Housam ダルウィッシュ ホサム：博士（地域文化研究）東京外国語大学：東京外国語大学講師・研究員
 Kaba Melek カバ 加藤 メレキ：筑波大学（文芸・言語）
 Kim Youngsoon 金 英順：立教大学（日本文学）
 Kwak Youngjoo 郭 榮珠：博士（地球生命圏科学）千葉大学：(独)土木研究所水災害・リスクマネジメント国際センター (ICHARM) 専門研究員
 Kwon Nam-hee 権 南希：東京大学（国際法）：関西大学政策創造学部助教（在大阪）
 Rin Chin リンチン：博士（地域文化研究）東京外国語大学：東京外国語大学大学院総合国際研究院
 Schicketanz Erik Christopher シッケタンツ、エリック：東京大学（宗教学宗教史学）：東京大学大学院人文社会系研究科特別研究員

Shermatov Ulugbek シェルマトフ・ウルグベック：博士（民事法学）明治大学：ウズベキスタン 最高裁判所（在タシケント）
Son Jounga 孫 貞阿：博士（森林科学）東京大学：東京大学大学院農業生命科学研究科研究員
Veldkamp Elmer フェルトカンフ、エルメル：博士（文化人類学）東京大学：（在オランダ）
Ye Kyaw thu イェ・チョウ・トゥ：早稲田大学（国際情報通信学）：早稲田大学国際情報通信研究センター助手
Zhu Lin 朱 琳：博士（アジア政治思想史）東京大学：東京大学大学院学術研究員

【2010年度奨学生】

Chaitongdi Phrachatpong チャイトンディー・プラチャッポン：東洋大学（仏教学）
Choi Jung Eun 崔 禎恩：東京藝術大学（文化財保存学）
Kiatkobchai Siratsanan キャアコプチャイ・スィラッサナン：学習院大学（日本語日本文学）
Kin Kyongtae 金 キョンテ：高麗大学（東京大学）（歴史学）
Lee Hyun Bom 李 賢凡：東京工業大学（材料工学）
Li Jun 李 軍：早稲田大学（国語教育学）
Lu Liang 盧 亮：東京工業大学（原子核工学）
Magid, Evgeni マギッド・イヴゲニ：筑波大学（知能機能システム）
Mya Dwi Rostika ミヤ・ドゥイ・ロスティカ：国土館大学（政治学）
Vigouroux, Mathias Dominique Yves ヴィグル・マティアス：二松学舎大学（中国学）
Wang Xin 王 昕：東京医科歯科大学（先端医療開発学）
Yoon Jin-Hee 尹 ジンヒ：お茶の水女子大学（ジェンダー学際研究）

◇ 2011 年度渥美奨学生募集概要

渥美国際交流奨学財団は、関東地方の大学院博士課程に在籍する留学生を対象に、2011 年度渥美奨学生を下記の通り募集します。

(1) 応募資格（奨学期間に下記のすべてに該当すること）

1. 日本以外の国籍を有し、関東地方の大学院博士課程に在籍し、当財団の奨学金支給期間に博士号を取得する見込みのある方。正規在籍年限を超えたために、或いは、他国の大学院より博士号を取得するために、研究員等として日本の大学院に在籍する方も含む。
2. 自分の所属する大学院研究科(研究室)および自分の居住地が、関東地方(東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県・茨城県・栃木県・群馬県)にある方。
3. 国際理解と親善に関心をもち、当財団の交流活動に積極的に参加する意思のある方。

(2) 交流活動

1. 当財団は、毎月の例会で学業や生活について報告していただいた上で、奨学金を支給します。
2. 毎年数回奨学生や元奨学生と当財団の理事・評議員ならびに選考委員を招き親睦会を催します。年度末には当該年度奨学生の研究報告会を催します。
3. 毎年7月に2泊3日のリクリエーション旅行に招待します。
4. 海外学会派遣プログラム：渥美奨学生で博士号を取得した方には、海外で開催される学会等に一回参加するための旅費・宿泊費および参加費を支給します。ただし、海外にいる方は日本への旅費にあてることができます。

(3) 奨学金の詳細

1. 奨学金は月額 20 万円です。2011 年度は 10 名採用します。
2. 奨学金の支給は 1 年間です。継続は認められません。

(4) 応募方法

1. 奨学金希望者は、2010 年 7 月 1 日以後、各大学院の留学生担当課または当財団事務局まで、応募要項と申込書をご請求ください。また、同日以後、当財団ホームページ (<http://www.aisf.or.jp>) からダウンロードできます。
2. 2011 年度申込は、2010 年 9 月 1 日から 9 月 30 日まで、郵便にて受け付けます。

(5) 選考の方法

事務局における書類審査と予備面接の後、選考委員による書類選考と面接により審査します。選考の結果は 12 月上旬に通知します。

2009年度の活動にご協力いただいた皆様
～ありがとうございました～

●一般寄付

団体

(株)アクト・テクニカルサポート
中央工業(株)
イースト不動産(株)
鹿島建設(株)
かたばみ興業(株)
(株)都市環境エンジニアリング
横浜実業(株)

ケミカルグラウト(株)
クリエイティブライフ(株)
(株)イリア
鹿島リース(株)
財団法人 霞山会
東亜産業(株)

中外製薬(株)
大和証券キャピタル・マーケット(株)
鹿島道路(株)
鹿島建物総合管理(株)
大興物産(株)
(株)八重洲ブックセンター

個人

渥美 伊都子 谷原 正 堀田 健介 八城 政基

●SGRAの活動支援指定寄附

団体

(財) 鹿島育英会
プラス (株)

鹿島建物総合管理 (株)
大興物産 (株)

(株) 小堀鐸二研究所
(株) 虎屋

個人

足立 憲彦	赤池 豊	明石 康	青木 生子	蟻川 芳子	渥美 直紀
曹 波	鄭 仁豪	福田 収一	原 嘉男	何 祖源	平舘 幸治
平川 均	開 康寛	星埜 弘明	今西 淳子	井上 博允	石井 茂雄
石井 慶子	岩間 陽一郎	岩崎 統子	全 振煥	蔣 恵玲	江 蘇蘇
具 延	カバ 加藤 メレキ	加美山 節	片岡 達治	河相 全次郎	岸本 泰廣
小松 親次郎	工藤 正司	栗原 俊記	黒住 真	李 恩民	李 鋼哲
梁 興国	林 少陽	マイリーサ	松岡 誠司	三澤 正勝	宮川 守久
宮島 喬	水谷 弘	長岡 實	永山 治	中上 英俊	中島 隆
中村 順次	中曾根 弘文	中曾根 康弘	中澤 忠義	並木 隆史	野村 継男
岡本 和久	奥村 裕一	太田 厚生	ロハス.O. ボラス	奇 錦峰	権 明愛
佐野 みどり	佐藤 直子	S. ウルグベック	施 建明	嶋津 忠廣	塩崎 恭久
鈴木 由美子	高橋 甫	高橋 司	竹内 忍	M. エレナ・ティシ	東城 清秀
遠山 幸三	辻 悦子	角田 英一	都築 勉	都竹 武年雄	植田 兼司
上野 宏	上野 由美子	王 剣宏	王 雪萍	呉 弘敏	武 玉萍
修 震	山田 俊作	山縣 睦	顔 海念	八城 政基	吉田 由美子
干 曉飛	臧 俐	周 海燕	朱 庭耀		

財団法人 渥美国際交流奨学財団

Atsumi International Scholarship Foundation

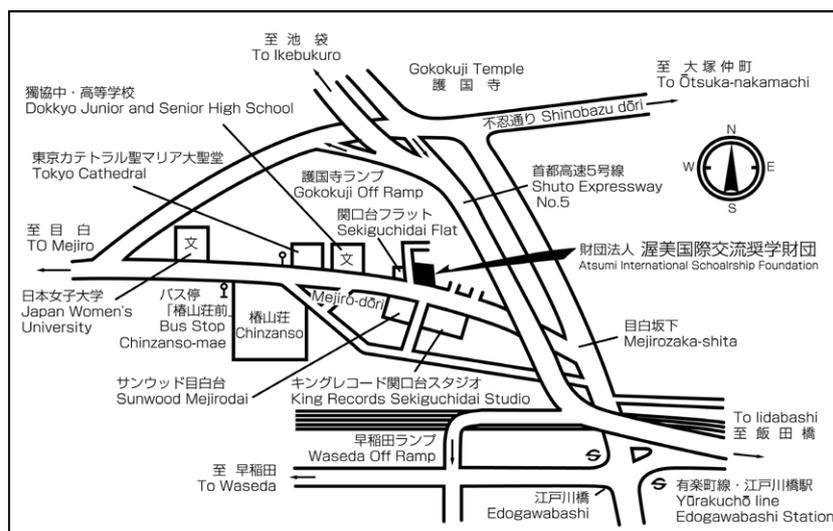
〒112-0014 東京都文京区関口3丁目5番8号

3-5-8 Sekiguchi Bunkyo-ku Tokyo 112-0014 Japan

Phone:03-3943-7612 Fax:03-3943-1512

<http://www.aisf.or.jp>

E-mail:aisf-office@aisf.or.jp



★ JR山の手線目白駅より、都バス 61 番 新宿駅西口行、「椿山荘前」下車・徒歩 3 分
Take The 61 bus from Mejiro Station (JR Yamanote line) and get off at the "Chinzanso-mae" stop. 3 min. walk.

★ 営団地下鉄有楽町線「江戸川橋」(出口 A 1) 下車・徒歩 10 分
Get off at Edogawabashi station from the Yurakucho subway line. (A1 exit 10 min. walk)

